

Oracle Enterprise Manager

構成ガイド

リリース 2.1

2000年2月

部品番号 : J00984-01

ORACLE®

Oracle Enterprise Manager 構成ガイド, リリース 2.1

部品番号 : J00984-01

原本名 : Oracle Enterprise Manager Configuration Guide, Release 2.1

原本部品番号 : A75685-01

原本協力者 : Shankara Avancha, Nancy Chen, Steve Cohen, Marie-Dominique Dahan - Coupeau, Erik DeMember, Todd Guay, Bryan Higgs, Sonali Inamdar, John J. Kennedy, Dennis Lee, Peter W. Lee, Priscilla J. Lee, Craig Louis, Patricia McGonigle, Ravi Pinnamaneni, Jim Powell, Peter Robson, Peter Shih, Preeti Somal, Nicole Sullivan, Long Yang, and Peter J. Winter

Copyright © 1999, 2000, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation (米国オラクル) または日本オラクル株式会社 (日本オラクル) を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation (米国オラクル) およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的のみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

ドラフトのアルファ版およびベータ版ドキュメント

ドラフトのアルファ版およびベータ版ドキュメントはプレリリース状態のものです。これらのドキュメントは、オラクル社の機密かつ所有のドキュメントであり、デモおよび暫定使用のみを目的としたものです。タイプミスからデータの不正確さに至るまでのいくつかの誤りが存在することが考えられます。このドキュメントは予告なく変更する場合がありますが、当ソフトウェアを使用するハードウェアに限定するものではありません。オラクル社はプレリリースのドキュメントに対して、無謬性を保証しません。またそのドキュメントを使用したことによって損失および損害が発生した場合も一切責任を負いかねますのでご了承ください。

目次

はじめに	ix
------------	----

1 Oracle Enterprise Manager の概要

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ	1-1
Oracle Enterprise Manager システムおよびハードウェアの要件	1-3
基本用語	1-4
リポジトリとは	1-5
リポジトリの所有者とは	1-5
管理ユーザーとは	1-5
コンソールとは	1-5
Oracle Management Server とは	1-5
Oracle Intelligent Agent とは	1-6
サービス検出とは	1-6
優先接続情報リストとは	1-6
Oracle Enterprise Manager 構成の概要	1-7

2 リリース 2.1 のリポジトリの作成

リリース 2.1 の新しいリポジトリの作成	2-2
Enterprise Manager Configuration Assistant の起動	2-3
ステップ 1 「構成操作」	2-4
ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」	2-5
ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」	2-6
ステップ 4 「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」	2-8
ステップ 5 「リポジトリ作成のサマリー」	2-12
ステップ 6 「Configuration Assistant の進行ウィンドウ」	2-13

3 Management Server の管理

Management Server の起動	3-1
Management Server の状態のチェック	3-3
Management Server の停止	3-4
Management Server のログ・ファイルのチェック	3-5

4 Management Server の追加

追加の Management Server のインストール	4-2
追加の Management Server の設定	4-2
ステップ 1 「構成操作」	4-2
ステップ 2 「構成パラメータ」	4-2
ステップ 3 「構成パラメータを変更」	4-3

5 Intelligent Agent の起動

Windows NT での Oracle Intelligent Agent の起動および停止	5-1
Windows NT での Intelligent Agent の起動	5-2
Windows NT での Intelligent Agent の停止	5-2
Windows NT での Intelligent Agent の実行の確認	5-2
コマンド・プロンプトからの起動、停止および状態の確認	5-3
UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止	5-3

6 コンソールの設定

Enterprise Manager コンソールの起動	6-1
サービスの検出	6-3
管理者アカウントの作成	6-4
Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行	6-5
一般設定	6-9
ジョブ制御システムの設定	6-10
ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成	6-10
管理対象サービスの優先接続情報リストの設定	6-13
電子メール通知の設定	6-13
SMTP ゲートウェイの設定	6-13
電子メールとポケットベルの通知の設定	6-14
ポケットベル・サービスの構成および起動	6-16
ポケットベルの設定	6-16

ポケットベル・サービスの起動	6-26
ポケットベル・サービスの状態の問合せ	6-27
ポケットベル・サービスの停止	6-27
数値ポケットベルのポケットベル状態コード	6-27
Management Server 接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成	6-28
バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成	6-30
サーバー側 (NT)	6-30
サーバー側 (UNIX)	6-30

7 リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへの移行

重要な注意	7-2
移行の段階	7-2
リリース 1.x とリリース 2.1 の違いが移行に与える影響	7-3
リポジトリ移行の準備	7-6
リリース 2.1 の新しい管理者の作成	7-6
リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ	7-7
リリース 1.x のコンソールとリリース 2.1 の Management Server の停止	7-7
リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認	7-7
リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ	7-8
Migration Assistant を使用したリポジトリの移行	7-9
ステップ 1 「イントロダクション」	7-9
ステップ 2 「コンポーネントの選択」	7-10
ステップ 3 「ソース・リポジトリ・ログイン」	7-11
ステップ 4 「ターゲット・リポジトリ・ログイン」	7-11
ステップ 5 「管理者データ」	7-12
進行中の作業	7-13
リリース 1.x のコンソールからのすべてのアクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除	7-14
移行成功の確認	7-14
移行の取消し	7-16
リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス	7-16
リリース 2.1 へ移行されるリリース 1.x のオブジェクト	7-16
再作成が必要なリリース 1.x のオブジェクト	7-18
使用不可になるリリース 1.x のオブジェクト	7-18

8 DBA Studio の設定

スタンドアロンまたは Management Server モードの DBA Studio	8-2
データベースへの直接接続	8-2
Oracle Management Server による接続	8-3
スタンドアロン・モードの DBA Studio の設定	8-3
スタンドアロン・モードでの DBA Studio の起動	8-3
スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーにデータベースを追加	8-4
スタンドアロン・モードの DBA Studio でデータベースへ接続	8-6
スタンドアロン・モードの DBA Studio のローカル優先接続情報リストの編集	8-7
OMS モードの DBA Studio の設定	8-9
Management Server へ接続するための DBA Studio の設定	8-9
OMS モードでの DBA Studio の起動	8-10
OMS モードの DBA Studio でデータベースへ接続	8-11
DBA Studio のその他の手順	8-12
DBA Studio の Quick Tour へのアクセス	8-13
データベースに別のユーザーとして接続	8-13
DBA Studio への接続で使用しているロールの参照	8-13
スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーからデータベースを削除	8-13
OMS モードのナビゲータからデータベースを削除	8-14
OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加	8-14
OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更	8-15
スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更	8-16

A ディレクトリ構造

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のディレクトリ構造	A-1
\$ORACLE_HOME¥sysman のディレクトリ構造	A-1
その他の重要なディレクトリ	A-2

B Configuration Assistant の操作

リリース 2.0 のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへのアップグレード	B-2
ステップ 1 「構成操作」	B-3
ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」	B-3
ステップ 3 「リポジトリを選択」	B-3
ステップ 4 「リポジトリへのログイン情報」	B-3

ステップ 5 「リポジトリ・サマリーの更新」	B-4
ステップ 6 「Configuration Assistant の進行」	B-4
既存リポジトリの削除	B-4
ステップ 1 「構成操作」	B-5
ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」	B-5
ステップ 3 「リポジトリを選択」	B-5
ステップ 4 「リポジトリの削除オプションを選択」	B-6
ステップ 5 「リポジトリ削除のサマリー」	B-6
ステップ 6 「Configuration Assistant の進行」	B-6
構成パラメータの編集	B-7
ステップ 1 「構成操作」	B-8
ステップ 2 「構成パラメータ」	B-8
ステップ 3 「構成パラメータを変更」	B-9
構成ファイルにアクセス不能	B-9

C トラブルシューティング

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告	C-1
マニュアル	C-2
Metalink	C-2
オラクル社カスタマ・サポート・センター	C-3
ロギングとトレースの設定	C-4
Management Server のトレースとロギング	C-4
ロギング・プロパティとトレース・プロパティ	C-4
Management Server ログ	C-6
クライアントのトレース	C-6
Web ブラウザのトレース	C-7
ポケットベルのトレース	C-7
Management Server のトラブルシューティング	C-8
Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合	C-8
Management Server が Windows NT の「スタート」メニューから起動できない場合	C-9
「サービス」ダイアログ・ボックスにリポジトリ接続情報を入力していない	C-9
「サービス」ダイアログ・ボックスに誤った接続情報を入力した	C-9
Windows NT のイベント・ログへのアクセス	C-9
クライアント・アクセス用の Management Server の変更	C-10
ping 間隔の設定	C-10
ポケットベル・サービスのトラブルシューティング	C-11

ポケットベルが作動しない	C-11
リモート Oracle Management Server でのポケットベル・サービスの登録	C-11
Enterprise Manager コンソールからのポケットベル・サービス情報の変更	C-12
ポケットベルの通知失敗	C-12
Web ブラウザのトラブルシューティング	C-12
パスワードの再設定	C-13
Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング	C-13
Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー	C-13
リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない	C-15
OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成	C-16
別の表領域の作成	C-16
既存の表領域のサイズを拡張	C-17
リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ	C-18
omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更	C-19
SGA サイズの決定	C-20
ジョブ通知のトラブルシューティング	C-21

D リポジトリのサイズ設定

E Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング

Apache 1.3.9 (Solaris)	E-1
Oracle Application Server 4.0.8 (Windows NT および Solaris)	E-2
Internet Information Server (IIS) 4.0	E-3

索引

はじめに

この章では、このマニュアルの目的と構成について説明します。「はじめに」には、次の情報が含まれています。

- [このマニュアルの目的](#)
- [このマニュアルの対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [ドキュメント・セット](#)
- [関連資料](#)
- [このマニュアルの表記規則](#)

このマニュアルの目的

このマニュアルでは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 の構成方法を説明します。

Oracle Enterprise Manager は、異種環境を管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。グラフィカル・コンソール、Agent、共通サービスおよびツールの組合せにより、Oracle 製品を管理するための統合された総合システム管理プラットフォームを提供します。

プログラムの更新および Oracle Enterprise Manager の使用上の重要な注意は、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を参照してください。

構成完了後は、Oracle Enterprise Manager の使用方法については、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプまたは『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

このマニュアルの対象読者

このマニュアルは、Oracle Enterprise Manager を構成するデータベース管理者およびシステム管理者を対象としています。読者は、Oracle と、実行する管理作業に精通している必要があります。

Oracle8i リリース 2 (8.1.6) の一般情報および操作方法は、『Oracle8i 概要』を参照してください。データベース管理手順の詳細は、Oracle8i リリース 2 (8.1.6) ドキュメント・セットを参照してください。Oracle8i リリース 2 (8.1.6) ドキュメント・セットには、Oracle Enterprise Manager の各種ツールで実行できるデータベース管理作業について、具体的に詳細な説明が記載されています。また、Oracle8i リリース 2 (8.1.6) ドキュメント・セットには、データベースの最適な管理方法についてのアドバイスも記載されています。

読者は、使用している Microsoft Windows または Solaris システムの操作についても精通している必要があります。必要に応じて、ご使用の Windows または Solaris システムのドキュメントを参照してください。

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章から構成されています。

章	説明
第 1 章「Oracle Enterprise Manager の概要」	Oracle Enterprise Manager の構成の概要について説明します。
第 2 章「リリース 2.1 のリポジトリの作成」	Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して、新規のリポジトリを作成する方法を説明します。
第 3 章「Management Server の管理」	Oracle Management Server の開始、停止、状態のチェック方法について説明します。
第 4 章「Management Server の追加」	新しい Management Server を追加して、既存のリポジトリを管理する方法について説明します。
第 5 章「Intelligent Agent の起動」	Oracle Intelligent Agent の起動方法について説明します。
第 6 章「コンソールの設定」	Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 の構成および起動方法について説明します。
第 7 章「リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへの移行」	ユーザーのリリース 1.x プライベート・リポジトリを、新しいリリース 2.1 リポジトリの特定のユーザーに移行する方法について説明します。 リリース 2.0 のリポジトリをリリース 2.1 のリポジトリへアップグレードする場合の詳細は、B-2 ページの「リリース 2.0 のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへのアップグレード」を参照してください。
第 8 章「DBA Studio の設定」	DBA Studio のセットアップ方法について説明します。
付録 A 「ディレクトリ構造」	Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のディレクトリ構造について説明します。

章	説明
付録 B 「Configuration Assistant の操作」	リポジトリのアップグレード方法と削除方法、および別のリポジトリを使用するため、またはリポジトリのユーザー・パスワードの変更に対応するために、ローカル Management Server をリダイレクトする方法について説明します。
付録 C 「トラブルシューティング」	発生する可能性のあるトラブルシューティングについて説明します。
付録 D 「リポジトリのサイズ設定」	リポジトリのサイズ設定に関する推奨事項が記載されています。
付録 E 「Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング」	Oracle Application Server リスナーがインストールされていない場合の、Web サーバーとディレクトリ・マッピングの構成について説明します。

ドキュメント・セット

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のドキュメント・セットには、次のドキュメントが含まれています。

- 『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート リリース 2.1』には、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いについて記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド リリース 2.1』には、Oracle Enterprise Manager システムの構成に関する情報が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 概説 リリース 2.1』には、Enterprise Manager システムの概要が記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド リリース 2.1』には、Oracle Enterprise Manager システムのコンポーネントと機能について記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド リリース 8.1.6』には、Oracle Intelligent Agent の管理方法について記載されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル リリース 2.1』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

Oracle Enterprise Manager ドキュメント・セットの他にも、Oracle Enterprise Manager では、各種コンポーネントの詳しいオンライン・ヘルプが提供されています。

関連資料

『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』では、関連資料の重要な情報を参照しています。このマニュアルで参照されている関連書籍は、次のとおりです。

- Oracle8i リリース 2 (8.1.6) の概要と機能は、『Oracle8i 概要』を参照してください。

- Oracle8i リリース 2 (8.1.6) の管理の詳細は、『Oracle8i 管理者ガイド』を参照してください。
- Oracle の以前のバージョンからの移行手順は、『Oracle8i 移行ガイド』を参照してください。
- Oracle の SQL コマンドおよび関数の詳細は、『Oracle8i SQL リファレンス』を参照してください。
- Oracle8i リリース 2 (8.1.6) にバンドルされているユーティリティの情報は、『Oracle8i ユーティリティ・ガイド』を参照してください。
- Oracle メッセージおよびコードの詳細は、『Oracle8i エラー・メッセージ』を参照してください。
- Oracle ネットワーキング・システムの詳細は、ネットワーク固有のドキュメントを参照してください。
- Windows NT における Oracle8i リリース 2 (8.1.6) の詳細は、『Oracle8i for Windows NT インストール・ガイド』、『Oracle8i for Windows NT 管理者ガイド』および『Oracle8i for Windows 日本語リリース・ノート』を参照してください。
- Oracle Parallel Server の詳細は、『Oracle8i Parallel Server セットアップおよび構成ガイド』を参照してください。このドキュメントには、Oracle Parallel Server および Oracle Enterprise Manager で Oracle8i リリース 2 (8.1.6) を使用するための準備に必要な情報が記載されています。「Oracle Parallel Server の概要」の章には、Oracle Parallel Server の概念およびコンポーネントの概要が記載されています。この情報は、Oracle8i リリース 2 (8.1.6) の環境で Oracle Parallel Server をインストールおよび構成を準備し、計画する際に有効です。

このマニュアルの表記規則

ここでは、このマニュアルで使われている表記規則を説明します。

例

このマニュアルには、コードの例が記載されています。例のテキストは、このマニュアルの本文とは違う書体で示されていますので注意してください。次に示すのは、SELECT 文の例です。

```
SELECT * FROM emp
```

このマニュアルで示す例は、大文字と小文字を次の表記規則に基づいて使い分けています。

- CREATE、NUMBER などのキーワードは大文字で表記してあります。キーワードには特別な意味があります。キーワードは大文字または小文字のどちらでも指定できますが、それらを使用する場合はコード例と同じ表記をする必要があります。

- データベース・オブジェクトとそれらの部分の名前は、`emp` や `empno` のように、小文字で表記してあります。ただし、このマニュアルの本文中では、データベース・オブジェクトとその部分の名前は、大文字で示されています。
- 例では、パラメータがプレースホルダの役割を果たします。パラメータは小文字で表記されます。パラメータは、通常、スキーマ・オブジェクトの名前、Oracle データ型または式です。構文図でパラメータを参照する場合、該当する型のオブジェクトまたは式を代入してください。このマニュアルの本文では、パラメータ名はイタリック体で表記されますので注意してください。

コマンド構文

- イタリック体は、`application_name` のように、変数に使用されます。実際に使用する値を指定してください。
- `|` は、選択肢を示します。
- `{param1 | param2 | ...}` は {} 内のパラメータの 1 つを指定する必要があることを示します。カッコは入力しないでください。
- `[]` は、オプション・パラメータを示します。カッコは入力しないでください。

Oracle Enterprise Manager の概要

Oracle Enterprise Manager は、異種環境を集中管理するための統合ソリューションを提供するシステム管理ツールです。Oracle Enterprise Manager では、グラフィカル・コンソール、Oracle Management Server、Oracle Intelligent Agent、共通サービス、および Oracle 製品管理用の統合された包括的システム管理プラットフォームを提供するツールを組み合わせで使用します。

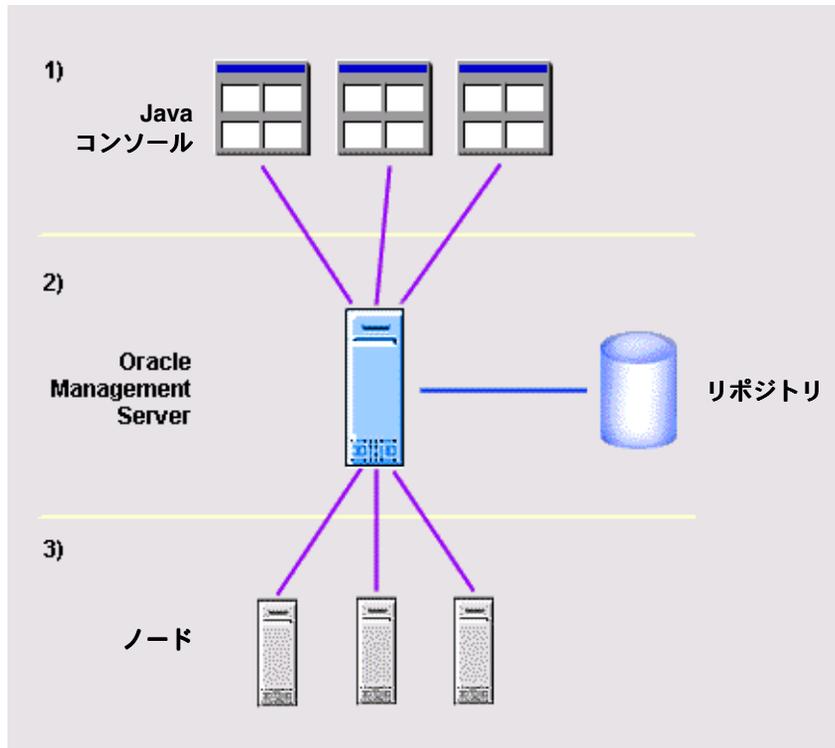
この概要では、次の内容について説明します。

- [Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ](#)
- [Oracle Enterprise Manager システムおよびハードウェアの要件](#)
- [基本用語](#)
- [Oracle Enterprise Manager 構成の概要](#)

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ

Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャは、3 層から成っています。第 1 層のクライアントは、Java ベースのコンソールと統合アプリケーションで構成されています。第 2 層は、Management Server または指定した Management Server グループで、インテリジェント機能の集中化と、クライアントとターゲット間の制御の分散を実現します。第 3 層は、データベース、ノードまたはその他の管理対象サービスなどのターゲットで構成されています。Intelligent Agent は、ターゲットごとに 1 つ常駐して、そのターゲットのサービスに登録イベント（潜在的な問題の発生）がないかどうかを監視し、Oracle Management Server を介してコンソールによって送られたジョブを実行します。

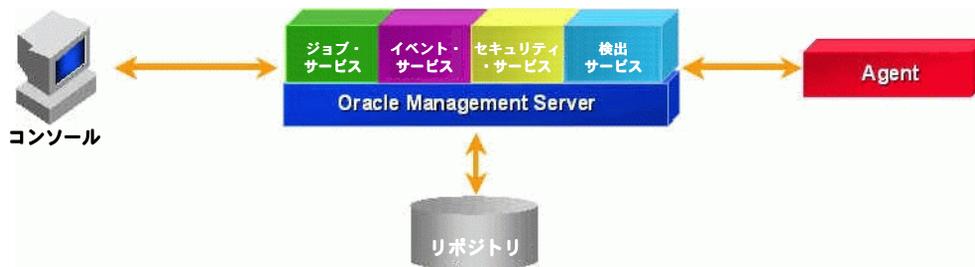
マシン上のサービス数に関係なく、1 台のマシンには 1 つの Agent しか存在しません。



Oracle Enterprise Manager の 3 つの主要コンポーネントは、次のとおりです。

コンポーネント	機能
コンソール	コンソールでは、強力かつ確実なシステム管理を実現する直観的なグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) により、Oracle 環境を一元的に制御できます。
Management Server	Oracle Management Server は、インテリジェント機能の集中化と、コンソールと管理対象ノード間の制御の分散化を実現します。具体的には、コンソールから送られるシステム管理タスクを処理し、企業全体でのこれらのタスクの分散を管理します。Oracle Management Server には、システム・データ、アプリケーション・データ、リポジトリ (データベース内に格納されている表の集合) に入っている管理対象ノードの状態に関する情報が、すべて格納されています。ジョブまたはイベントを管理している Management Server には、そのジョブやイベントの状態に関するすべての情報 (スケジュール済、Intelligent Agent からの応答待ち、コンソールへの通知待ちなど) が格納されます。Management Server が複数ある場合は、ワークロードを自動的に分散して、バランスをとるため、高いパフォーマンスと拡張性が保証されます。

コンポーネント	機能
Intelligent Agent	Intelligent Agent は、ネットワーク内の管理対象ノードで稼動するプロセスです。Management Server を介してコンソールから送られたジョブやイベントを実行します。



Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のアーキテクチャに関する詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概説』の第 1 章を参照してください。

Oracle Enterprise Manager システムおよびハードウェアの要件

Oracle Enterprise Manager のコンポーネントは、管理環境によって異なるどのような構成でも実行できます。たとえば、それぞれの層を個別のマシンで実行することも、1つのマシンで3つのすべての層を実行することもできます。

Enterprise Manager のコンポーネントを個別のマシンで実行するには、次の要件を満たす必要があります。

コンソールと DBA Management Pack のみを実行するマシンの要件は次のとおりです。

- Pentium I 266MHz または SPARC 20
- 64MB RAM
- ハード・ディスクの空き容量 190MB

注意： Web ブラウザで Enterprise Manager コンソールを実行するには、64MB の RAM が必要です。Web サイトおよび Oracle Application Server リスナーを実行するには、102MB が必要です。

注意： 統合アプリケーションの場合は、さらに 18MB 必要です。

Management Server のみを実行するマシンの要件は次のとおりです。

- Pentium II 300MHz または SPARC Ultra 1
- 64MB RAM

- ハード・ディスクの空き容量 190MB（トレースをオンにした場合、トレース・ログ用にさらに 50MB 割り当てる必要があります。）

1つのマシンで Enterprise Manager のすべてのバンドル（コンソール、DBA Management Pack、Oracle Management Server およびデータベース・リポジトリ）を実行する場合の、マシンの要件は次のとおりです。

- Pentium II 400MHz または SPARC Ultra 1
- 128MB RAM
- ハード・ディスクの空き容量 190MB（リポジトリを構成するために必要な 6～26MB が含まれます。リポジトリの容量がどのくらい増加するかを予想するには、[付録 D「リポジトリのサイズ設定」](#)を参照してください。また、トレースをオンにした場合、トレース・ログに対してさらに 50MB 割り当てる必要があります。）

注意： この要件では、Enterprise Manager リポジトリに対してデータベースがすでに存在していると仮定しています。データベースがインストールされていない場合は、インストールする必要があります。Oracle データベースに対して推奨されるシステムおよびハードウェアの要件は、対象のデータベース・リリースのインストレーション・ガイドを参照してください。

デフォルトの Enterprise Manager パッケージ（各自の環境で 1つの Oracle Management Server を使用するパッケージ）は、次の特性を持つ環境を最適にサポートするようにチューニングされています。

- 40～50 台のマシン
- 管理対象のデータベース・インスタンスまたはその他の管理対象の合計が 80～100（1つのノードにおいては最大 10 個の管理対象）
- 常にアクティブに使用するコンソールは最大 12～15、また断続的 / 受動的に使用するコンソールは無制限
- 1日に1つのノードで 10 個のジョブが稼動
- 1日に1つのノードで 10 件のイベント・トリガー

管理対象のノードが増加した場合にパフォーマンスを改善するには、管理対象の 50 個のノードにつき 1つの Management Server を追加するか、または Management Server マシンの CPU 容量を増加することをお勧めします。

コンソール、ジョブまたはイベントの数が増加した場合にパフォーマンスを改善するには、リポジトリ・データベース・マシンのリソース容量を増やすことをお勧めします。

基本用語

次の用語の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 概説』および『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

リポジトリとは

リポジトリは、管理する環境の状態についての情報、および Management Pack についての情報が格納されている表の集合です。クライアントと管理対象ノードの間で分散制御が実現されている場合は、リポジトリは、Oracle Management Server でバックエンドの格納場所として使用されます。

リポジトリの所有者とは

Enterprise Manager リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリを作成する際に、このデータベース・ユーザーの作成に使用するリポジトリ・ユーザー名を指定します。リポジトリの作成時に、リポジトリのユーザー名および暗号化されたパスワードが保存されている場合は、Management Server は、これらを使用してリポジトリにログインします。保存されていない場合は、リポジトリを起動する前に、ユーザー名とパスワードを入力するように要求されます。

管理ユーザーとは

Oracle Enterprise Manager は、最初のログインに使用するデフォルトのスーパー管理者アカウントでインストールされます。スーパー管理者アカウントは `sysman`、初期パスワードは `oem_temp` です。パスワードは、最初のログインの後で変更してください。このアカウントを使用すると、必要に応じて他のスーパー管理者を作成できます。リポジトリに格納されている管理データは、管理者の持つ許可に基づいてフィルタ処理されます。優先接続情報リストなどの作業環境、ログイン・パスワードおよび通知スケジュールは、管理者ごとに設定する必要があります。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 の接続情報を、個人のデータベースのユーザー・アカウントのユーザー名およびパスワードと混同しないでください（個人のアカウントのものは、Oracle Enterprise Manager の管理者アカウントまたはリポジトリの接続情報とは異なります）。

コンソールとは

コンソールは、管理者用のグラフィカル・インタフェースで、シンまたはファットのいずれのクライアントとしても実行できる Java ベースのアプリケーションです。シン・クライアントでは、コンソール・ファイルがインストールされているサーバーに接続する際に Web ブラウザを使用しますが、ファット・クライアントでは、コンソール・ファイルをローカルにインストールする必要があります。

コンソールをどのように実行する場合でも、システム管理タスクを実行するには、Oracle Management Server と Oracle Intelligent Agent が必要です。

Oracle Management Server とは

Management Server は、インテリジェント機能の集中化と、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散化を実現し、システム管理タスクを処理します。

ネットワーク内のノード数および管理対象のサービス数が増加した場合、または現行の Management Server がオーバーロードした場合には、中間層に Oracle Management Server を追加してワークロードを分散し、平準化することができます。Management Server を追加すると、いずれかの Management Server を使用できなくなった場合にも、システム全体に影響を与えずに稼働できます。

同じノード群を管理する Management Server は、すべて1つのリポジトリを共有します。リポジトリには、その環境全体のシステム・データ、アプリケーション・データ、管理対象ノードの状態が全部格納されています。

Oracle Intelligent Agent とは

Oracle Intelligent Agent は、各ノードにインストールされ、Management Server から送られたジョブの実行と、イベントの監視を行います。Intelligent Agent は、Management Server やコンソールのクライアントから独立しているだけでなく、サポートするデータベースやサービスとも無関係に機能します。

サービス検出とは

コンソールで検出ウィザードを使用すると、Management Server は、そのノードにインストールされている Intelligent Agent に接続し、ノードにインストールされている Oracle サービスを検出します。

次に、Management Server は新しい情報をリポジトリに格納し、コンソールのナビゲータを更新して、すべてのノードおよびそれぞれのサービスのビューを表示します。

サービス検出により、管理者はノードでのジョブの実行と、イベントの監視ができ、情報はコンソールで集中管理されます。

優先接続情報リストとは

この項では、次の事項について説明します。

- Oracle Enterprise Manager コンソールによって保存される優先接続情報リスト
- DBA Studio によって保存されるローカル優先接続情報リスト

Oracle Enterprise Manager コンソールによって保存される優先接続情報リスト

各管理者は、ネットワーク内で管理するノード、リスナー、データベースおよびその他のサービスに対して、特定のユーザー名、パスワードおよびロール（NORMAL、SYSOPER または SYSDBA）を設定できます。

優先接続情報リストを設定すると、管理対象のターゲットに接続するたびに、接続情報を要求されることはなくなります。

コンソールで設定した優先接続情報リストを使用すると、優先接続情報リストが必要なターゲットに対して、ジョブおよびイベント・システムを使用できます。コンソールで設定したログイン接続情報は、リポジトリ内では暗号化されます。

DBA Studio によって保存されるローカル優先接続情報リスト

DBA Studio は、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに表示されるデータベースのリストを格納します。これらのデータベースのいずれかの優先接続情報リストが指定されると、ユーザー名、暗号化されたパスワードおよびロールが、ローカル・ファイルに追加されます。

優先接続情報リストを保存または編集するオプションも用意されており、これによって、ユーザー名、パスワード、ロール（NORMAL、SYSOPER または SYSDBA）などのログイン情報を格納できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。データベースへの接続が確立したときに、そのたびにユーザー名とパスワードを入力するのではなく、かわりにこのログイン情報が使用されます。

Oracle Enterprise Manager 構成の概要

Oracle Enterprise Manager を構成するには、次のステップを実行する必要があります。

ステップの中には、使用する機能によってオプションになるものもあります。

手順	必須またはオプション	参照先
Oracle データベースをインストールした後、Oracle Enterprise Manager をインストールする。	必須。	対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。
Enterprise Manager Configuration Assistant を実行し、リポジトリがない場合は、リポジトリを作成する。 Oracle Enterprise Manager のインストールの際に、既存のリポジトリを使用するか、新しいリポジトリを作成するかを選択します。	必須。	2-1 ページの「 リリース 2.1 のリポジトリの作成 」。
リリース 2.0 のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへアップグレードする必要がある場合は、B-2 ページの「 リリース 2.0 のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへのアップグレード 」を参照してください。		
Migration Assistant を実行して、リリース 1.x の環境で使用中的数据を、1 つまたは複数のプライベート・リポジトリから、リリース 2.1 の新しいリポジトリの特定のユーザーに移行する。	オプション。 リリース 1 のリポジトリがない場合は、このステップは省略してください。	7-1 ページの「 リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへの移行 」。

手順	必須またはオプション	参照先
Management Server を追加する。	オプション。 Management Server を追加する必要がなければ、このステップは省略してください。多くの環境では、必要となる Management Server は1つだけです。	4-1 ページの「 Management Server の追加 」。
Intelligent Agent を起動する。	必須。	5-1 ページの「 Intelligent Agent の起動 」。
Management Server を起動する。	必須。 最低1つの Management Server の起動と構成が必要です。	3-1 ページの「 Management Server の管理 」。
コンソールを起動する。	必須。	6-1 ページの「 Enterprise Manager コンソールの起動 」。
サービスを検出する。	必須。 データベースやリスナーなどのサービスが、Enterprise Manager のコンポーネントで管理されるように、ネットワーク・サービスを識別します。	6-3 ページの「 サービスの検出 」。
管理者アカウントを作成する。	必須。 アカウントを作成すると、管理者は独自のコンソール・ビューをカスタマイズし、管理者間で管理データを共有および保護できます。	6-4 ページの「 管理者アカウントの作成 」。
Web ブラウザと Oracle Enterprise Manager Web サイトをインストールし、(Oracle Application Server リスナーがインストールされていない場合は) Web サーバーをインストールおよび構成して、Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager を実行する。	オプション。 Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager を実行しない場合は、この項は省略してください。	6-5 ページの「 Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行 」。
ジョブ発行権限のある Windows NT ユーザー・アカウントを作成する。	必須。 管理対象ノードで Intelligent Agent がジョブを実行するには、適切な NT ユーザー・アカウントが必要です。	6-10 ページの「 ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成 」。
ノードに優先接続情報リストを設定する。	必須。 管理対象ノードで Intelligent Agent がジョブを実行するには、管理者ごとに、ノードの優先接続情報リストを設定します。	6-13 ページの「 管理対象サービスの優先接続情報リストの設定 」。

手順	必須またはオプション	参照先
電子メール通知を設定する。	オプション。 電子メール通知の設定により、電子メールによるジョブまたはイベントの通知を受けることができます。	6-13 ページの「 電子メール通知の設定 」。
ポケットベル・サービスを設定する。	オプション。 ポケットベルによるジョブまたはイベント通知を受ける場合は、ネットワークごとに1つのポケットベル・サービスのインストールが必要です。	6-16 ページの「 ポケットベル・サービスの構成および起動 」。
バックアップまたは SYSDBA 管理用のリモート・データベースを構成する。	まだ設定されていない場合は必須。 バックアップ管理ウィザードのいずれかを使用する前、または Oracle Enterprise Manager によってデータベースを停止する前に、リモート SYSDBA 管理用のデータベースを設定する必要があります。 Database Configuration Assistant によってサーバーおよびクライアントが構成されていない場合は、サーバーとクライアントが必要です。	6-30 ページの「 バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成 」。
DBA Studio を設定する。	オプション。 データベース管理機能にアクセスし、複数のデータベースを1つのツールで管理する場合は、DBA Studio を構成します。	8-1 ページの「 DBA Studio の設定 」。

リリース 2.1 のリポジトリの作成

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のリポジトリには、管理する環境の状態についての情報、および Management Pack についての情報が格納されています。クライアントと管理対象ノードの間で分散制御が実現されている場合は、リポジトリは、Oracle Management Server でバックエンドの格納場所として使用されます。

リリース 2.0 では、Enterprise Manager Configuration Assistant で、ベースの Oracle Enterprise Manager 製品に対するリポジトリのみが作成されました。リリース 2.1 では、Oracle Enterprise Manager のすべての製品に対するリポジトリが作成されます。Enterprise Manager Configuration Assistant では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリは 1 つのエンティティと見なされます。1 つのリポジトリを作成すると、他の製品をインストールしているかどうかに関係なく、リポジトリのすべての部分が作成されます。

Enterprise Manager Configuration Assistant は、データベース管理者によるリポジトリ作成、削除、アップグレードおよび構成パラメータのメンテナンスを支援します。

Oracle Enterprise Manager を初めて使用する場合、またはリリース 2.1 のリポジトリを初めて使用する場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant の「新規リポジトリの作成」オプションを使用して、リリース 2.1 のリポジトリを作成およびロードし、ローカル Management Server に対する構成パラメータを設定します。

リリース 2.0 のリポジトリを使用しており、リリース 2.0 からリリース 2.1 のリポジトリへアップグレードする場合は、B-2 ページの「[リリース 2.0 のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへのアップグレード](#)」を参照してください。

Enterprise Manager のリリース 1.x を使用しており、リリース 1.x のリポジトリをリリース 2.1 のリポジトリへ直接移行する場合は、リリース 2.1 のリポジトリを作成した後で、Enterprise Manager Migration Assistant を使用して追加のステップを実行する必要があります。リリース 1.x の 1 つ以上のリポジトリを、リリース 2.1 の共有リポジトリ・スキーマへ移行する場合の詳細は、[第 7 章「リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへの移行」](#)を参照してください。

Management Server を設定または追加して既存のリポジトリを管理する場合の詳細は、4-2 ページの「[追加の Management Server の設定](#)」を参照してください。

複数の Management Server を使用する環境では、Management Server が稼動するマシンごとに、Enterprise Manager Configuration Assistant を実行する必要があります。リポジトリは、Management Server と異なるマシンに作成することもできます。

重要： Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、個別にライセンスを取得できるパック、Management Server およびリポジトリでは、すべて同じリリースを使用してください。たとえば、リリース 2.1 のコンソールでリリース 2.0 の Management Server およびリポジトリを使用することも、リリース 2.0 のパックでリリース 2.1 の Management Server およびリポジトリを使用することもできません。Enterprise Manager リリース 2.1 の製品では、リリース 2.1 の Management Server およびリポジトリを使用してください。具体的な製品には、次のものがあります。

- Oracle Enterprise Manager コンソール
- Oracle DBA Management Pack
- Oracle Tuning Pack
- Oracle Diagnostics Pack
- Oracle Change Management Pack
- Oracle Management Pack for Oracle Applications
- Oracle Management Pack for SAP R/3
- Oracle Standard Management Pack

現在の Management Server およびリポジトリが以前のバージョンである場合は、それらを最新バージョンに移行またはアップグレードできます。Management Server およびリポジトリをリリース 2.1 に移行またはアップグレードする場合には、リポジトリで使用するすべての Enterprise Manager 製品がリリース 2.1 となるようにしてください。たとえば、Diagnostics Pack リリース 2.0 または Change Management Pack リリース 2.0 を使用したまま、Management Server およびリポジトリをリリース 2.1 にアップグレードしないでください。使用するリリース 2.1 パックのソフトウェアを取得する前に、Management Server とリポジトリをリリース 2.1 にアップグレードすると、以前のパック製品は使用できなくなります。

リリース 2.1 の新しいリポジトリの作成

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のリポジトリは、リリース 1.x のリポジトリとは異なります。Enterprise Manager リリース 1.x では、各管理者が独自のリポジトリ・スキーマを持っており、そこにネットワーク内の現行のビューとユーザー固有の情報が格納されています。

まず、Enterprise Manager リリース 2.1 では、1つの共有リポジトリ・スキーマに、それぞれの管理者のアカウントと作業環境が格納されます。

新しいリリース 2.1 のリポジトリを作成する際に、Enterprise Manager Configuration Assistant によって、次のタスクが実行されます。

- Enterprise Manager および Management Pack のリポジトリの所有者となる、新しいデータベース・ユーザーを作成します。
- 新しいデータベースに、適切な権限とロールを割り当てます。
- Enterprise Manager および Management Pack のリポジトリに対して新しい表領域を作成するか、必要の場合は既存の表領域を使用します。
- Oracle Enterprise Manager の実行に必要な情報を、リポジトリにロードします。
- ローカル Management Server 構成ファイル `ORACLE_HOME¥sysman¥config¥msconfig.properties` を作成または更新（あるいはその両方）します。
- Oracle Enterprise Manager クライアントに情報をロードします。これによって、Oracle Enterprise Manager コンソールに、アクセス可能な Management Server ノードのすべてのリストが表示されます。
- Enterprise Manager Configuration Assistant をインストール・セッションから起動しており、リポジトリの作成時にリポジトリのユーザー名とパスワードを保存するように選択した場合は、Management Server サービスを起動します（Windows NT のみ）。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動

注意： Oracle Enterprise Manager リポジトリ・スキーマを作成する前に、必ずデータベースをインストールし、実行しておいてください。

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動するには、次のステップを実行します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー → 「プログラム」 → 「Oracle-<Oracle_Home_Name>」 → 「Enterprise Manager」 → 「Configuration Assistant」を選択して、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

- UNIX の場合

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、Enterprise Manager Configuration Assistant を起動します。

```
emca
```

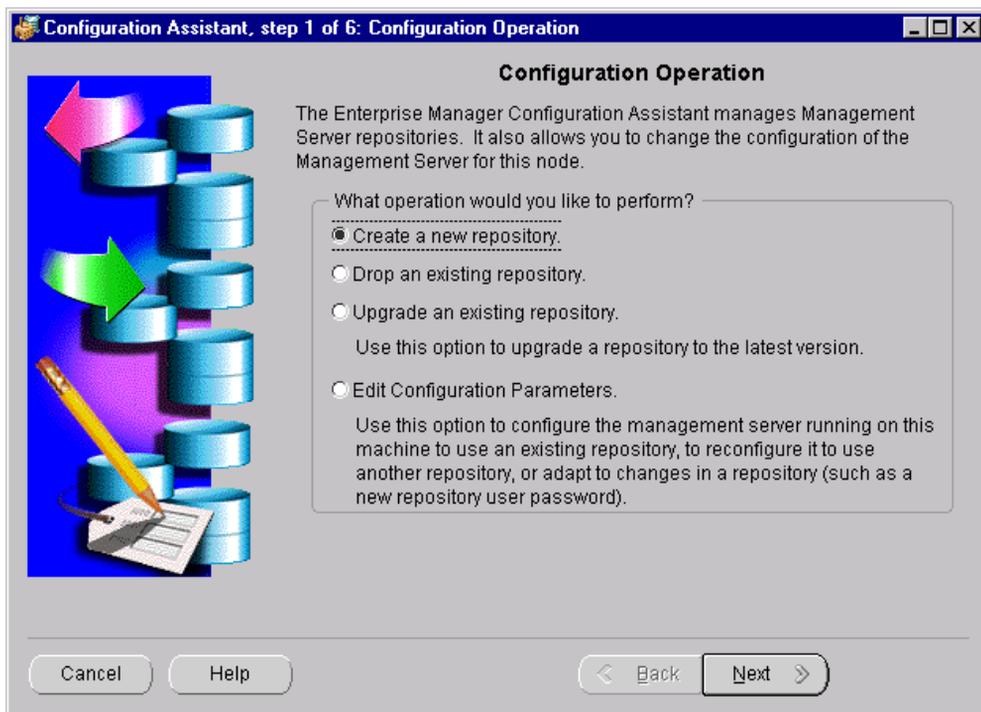
注意： このコマンドを実行するには、`omsconfig.properties` ファイルの所有者（このファイルに対する許可を持つユーザー）としてログインする必要があります。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant をスタンドアロン・アプリケーションとして起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

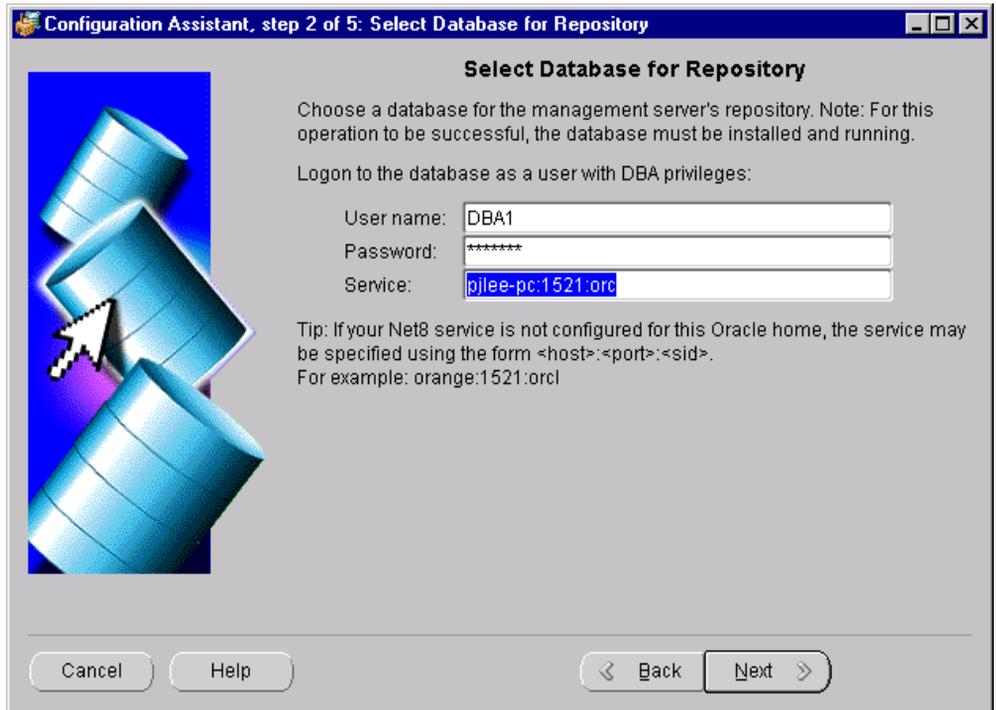
インストール・セッションから Configuration Assistant を起動し、インストール・ダイアログ・ボックスから新しいリポジトリを作成するように選択すると、構成操作の画面は表示されません。「リポジトリのデータベースを選択」画面が表示されます。この場合は、2-5 ページのステップ 2/5 に進んでください。

リポジトリ操作のリストから、「新規リポジトリの作成」を選択し、「次」を押します。「リポジトリのデータベースを選択」ページが表示されます。



ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」

リポジトリを作成するデータベースにログインします。



ユーザー名とパスワード： データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。これは個人のデータベース・ユーザー・アカウントで、Oracle Enterprise Manager 管理者アカウントではありません。

たとえば、system/manager を使用します。

サービス： サービスは、次の形式で指定します。

<host>:<port>:<sid>

ここで

host は、データベースが格納されるマシン名を表します。

port は、データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526 となります。

SID はデータベースのシステム ID を表します。

例：

`pjlee-pc:1521:orcl`

このように指定すると、pjlee-pc マシンでポート 1521 を使用して、orcl に接続します。

「次」を押して、操作を継続します。

エラー・メッセージの詳細は、C-13 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)」を参照してください。

リポジトリを作成する場合には、次の条件に適合するデータベースを選択してください。

- データベースは常に使用できる状態となっている必要があります。
- データベースが他の管理者によって停止されないようにします。
- データベースが、稼働中のマシン上で他のリソースと競合しないようにします。

ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」

Enterprise Manager リポジトリの所有者は、データベース・ユーザーです。リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、このページで指定するユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成します。

Repository Login Information

An Enterprise Manager repository is owned by a database user. In order to perform this operation, it is necessary to logon to the repository database as this user.

Enter repository user name and password

User name: PJLEE

Password: *****

Confirm password: *****

Do not save username and password

Cancel Help < Back Next >

ユーザー名： リポジトリのユーザー名を指定します。リポジトリの所有者となるデータベース・ユーザーが、この名前で作成されます。リポジトリ・ユーザー名は、ネットワーク全体で一意的な名前にしてください。マシンの TCP/IP ホスト名は一意的であると考えられるため、これがデフォルトとして使用されます。別の名前を選択する場合は、それが一意であることを確認してください。

パスワード： ユーザーのパスワードを入力します。

パスワード確認： パスワードをもう一度入力して確認します。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを、`omsconfig.properties` ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。これらのリポジトリ接続情報がファイルに保存されている場合は、Management Server は、これらの内容を使用してリポジトリにログインします。保存されていない場合は、起動する前に、ユーザー名とパスワードを指定するように要求されます。

ユーザー名および暗号化されたパスワードを `omsconfig.properties` ファイルに保存しない場合は、「ユーザー名とパスワードを保存しない」チェックボックスを選択してください。

リポジトリに対して指定したユーザー名がすでに存在している場合は、「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページが省略されます。次に、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたりポジトリ・スキーマ・ユーザーは、DBA 権限を持つ個人のデータベース・ユーザー・アカウント（Enterprise Manager Configuration Assistant の「リポジトリのデータベースを選択」ステップで、データベースに接続する際に使用するアカウント）とは異なります。リポジトリ・スキーマ・ユーザーには、このステップに必要な DBA 権限がありません。

セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。

Enterprise Manager Configuration Assistant の「リポジトリのデータベースを選択」ステップでは、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに DBA 権限を付与するかわりに、**DBA 権限を持つデータベース・ユーザー**としてデータベースに接続します。たとえば、system/manager を使用します。

Enterprise Manager Configuration Assistant の「リポジトリへのログイン情報」ステップで、リポジトリ・データベースにリポジトリ・スキーマ・ユーザーとしてログインします。

ステップ 4 「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」

次の場合には、「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページは表示されません。

- リポジトリ・ユーザーがすでに存在する場合
または
- Enterprise Manager Configuration Assistant が通常のインストールから実行されている場合、かつ
- OEM_REPOSITORY 表領域がすでに存在する場合、かつ
- OEM_REPOSITORY 表領域に適切なサイズ属性が定義されている場合

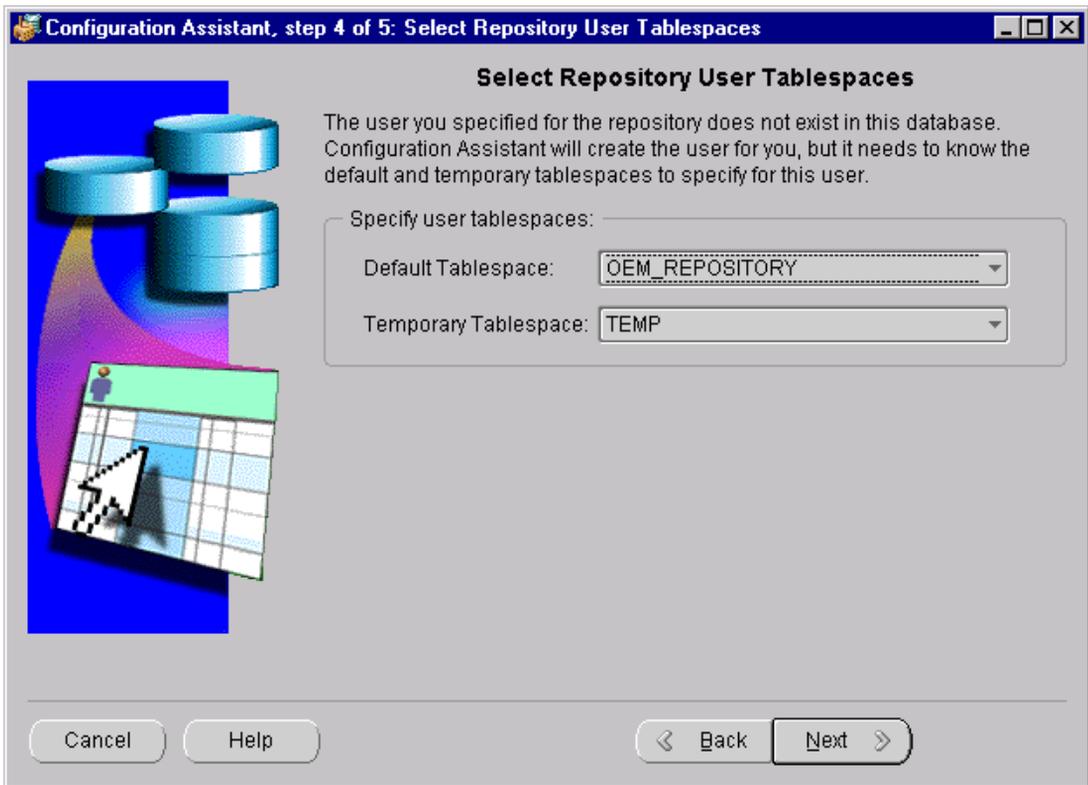
注意： Oracle Enterprise Manager のリポジトリを、SYSTEM（具体的には製品データベースの SYSTEM 表領域）、ROLLBACK または TEMPORARY 表領域にインストールしないでください。SYSTEM 表領域で使用する表領域パラメータ設定は、Oracle Enterprise Manager で使用するには適切ではありません。SYSTEM 表領域は、system エントリに対してのみ使用してください。ツール、ユーザーおよび（Oracle Enterprise Manager などの）管理製品は、他の表領域に格納されます。

ROLLBACK 表領域は、ロールバック・セグメントの作成で使用します。Oracle ユーザー・プロセスは、ロールバック・セグメントを使用してロールバック情報を保存します。TEMPORARY 表領域は、ユーザーの TEMPORARY 表領域に割り当てられ、Oracle ユーザー・プロセスによって一時領域として使用されます。データベースの稼動中は、これらの 2 つの表領域の使用率が変化します。

TEMPORARY 表領域は、ユーザーの一時表領域として使用することができます。

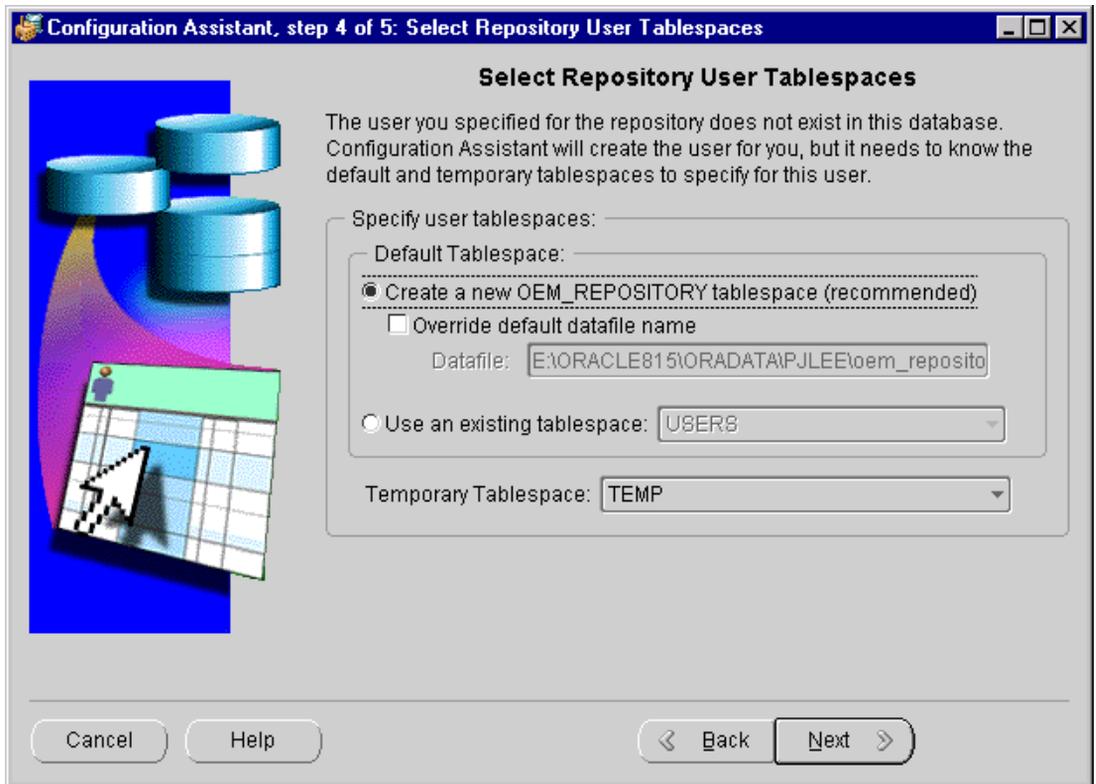
詳細は、『Oracle8i 概要』を参照してください。

OEM_REPOSITORY 表領域がすでに存在する場合は、次の画面が表示されます。



Enterprise Manager のリポジトリで使用するデフォルトの一時表領域を選択します。

OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合は、次の画面が表示されます。



デフォルト表領域:

- 新規の OEM_REPOSITORY 表領域の作成 (推奨)

OEM_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。これは、Enterprise Manager のリポジトリに対して特別な特性を持つ表領域で、ユーザーのデフォルト表領域として使用されます。
- デフォルトのデータファイル名の上書き

OEM_REPOSITORY 表領域のデータファイルのデフォルト名を変更する場合は、このチェックボックスを選択します。
- 既存の表領域を使用

プルダウン・リストから、既存の表領域を選択します。

一時表領域

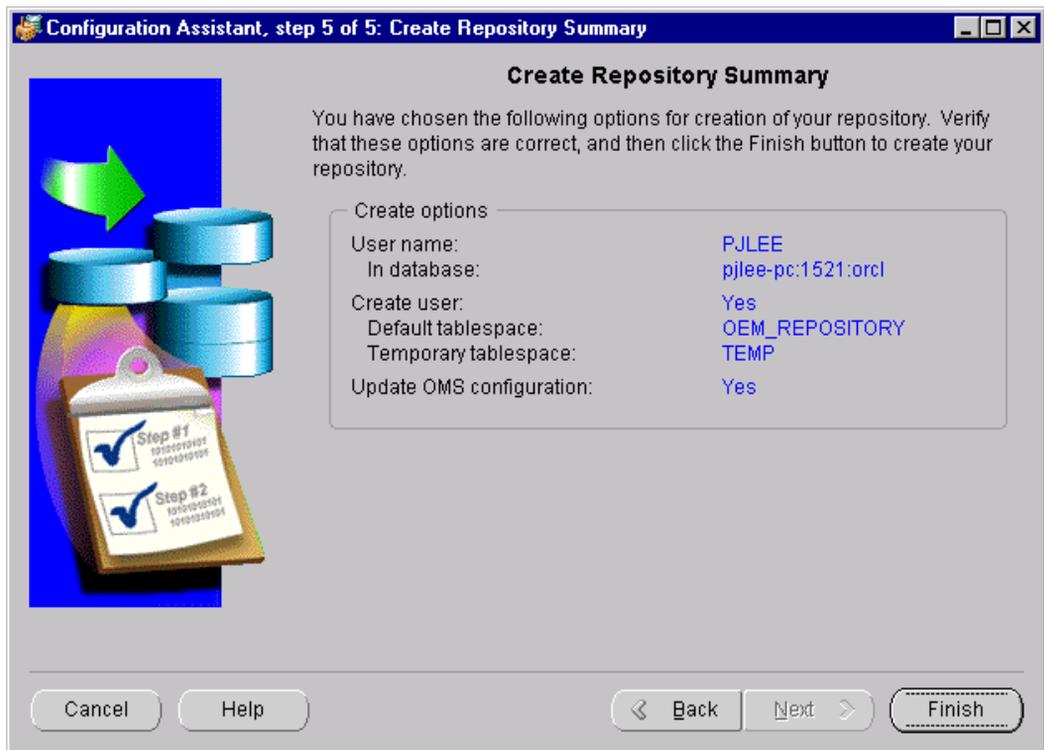
プルダウン・リストから一時表領域を選択します。

「次」をクリックして処理を続行します。

Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に必要な空き領域があることが確認されると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。

ステップ 5 「リポジトリ作成のサマリー」

「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示され、実行する処理のサマリーが示されます。「リポジトリを作成」ウィザードの処理で提供された情報が正しいことを確認します。

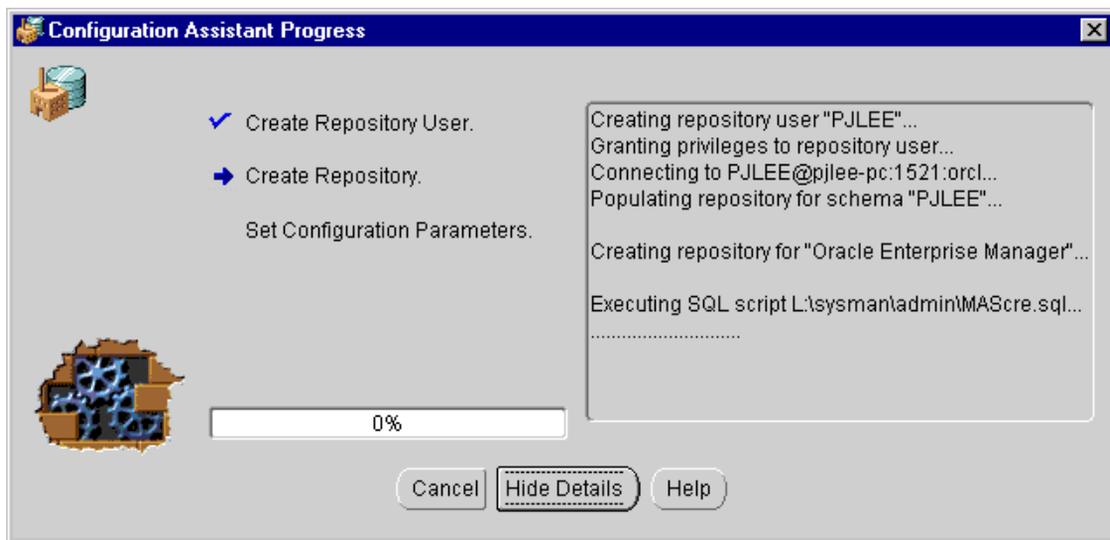


「終了」をクリックしてリポジトリの作成を開始するか、または「前」をクリックして、前のページに戻って設定を変更します。

「終了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。

ステップ 6 「Configuration Assistant の進行ウィンドウ」

処理の詳細情報（発生した可能性のあるエラーなど）が必要な場合は、「詳細を表示」ボタンをクリックし、ダイアログ・ボックスを拡張してテキスト領域を表示してください。「詳細を非表示」ボタンをクリックすると、詳細情報を非表示にすることができます。



結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「クローズ」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

注意： 処理の進行中にリポジトリの作成を取り消すと、リポジトリは不正な状態になります。このような場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用してリポジトリを削除します。

Configuration Assistant を終了するには、「クローズ」ボタンをクリックします。

Management Server の管理

Management Server は、クライアントと管理対象ノード間の制御の分散を実現します。通知の中央エンジンである Management Server では、すべてのシステム管理作業の処理と、これらの作業の企業全体での分散管理が行われます。

この章でトピックは次のとおりです。

- Management Server の起動
- Management Server の状態のチェック
- Management Server の停止

Management Server の起動

注意： Management Server を起動する前に、リポジトリ・データベースを起動し、オープンしておく必要があります。

Management Server を起動するには、次のステップを実行します。

注意： Oracle Enterprise Manager では、各自のマシンのローカルに設定されていない Management Server（つまりリモート Management Server）の起動はサポートしていません。

Management Server のリポジトリ接続情報を変更する必要がある場合は、B-7 ページの「[構成パラメータの編集](#)」を参照してください。

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、3-5 ページの「[Management Server のログ・ファイルのチェック](#)」を参照してください。

Windows NT の場合

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer」 サービスを選択します。
3. 「スタートアップ」 ボタンをクリックして、「サービス」 ダイアログ・ボックスを表示します。
 - a. 「スタートアップの種類」 セクションで「自動」または「手動」を選択し、Management Server サービスをどのように起動するかを指定します。「手動」を選択した場合は、ユーザーが Management Server を起動します。「自動」を選択すると、システムを起動するたびに Management Server が自動的に起動されます。「無効」を選択した場合は、Management Server を起動できません。
 - b. 「ログオン」 セクションで、次の設定を確認します。
 - * 「システム アカウント」 オプションが選択されていることを確認します。このオプションは、Management Server を実行するためにサポートされている方法です。このオプションが選択されていない場合は、ログアウトする際にシステム・アカウントが表示されません。
 - * 「デスクトップとの対話サービスに許可」 ボックスが選択されていないことを確認します。トラブルシューティングの目的でサポートから要求されない限り、「デスクトップとの対話サービスに許可」 ボックスを選択しないでください。このボックスを選択すると、Management Server は、デフォルト・デスクトップに DOS コンソールを作成しようとします。このため、ログインするユーザーがいないと、Management Server は停止します。
 - c. リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を保存するように選択していない場合は、(データベース・ユーザーの作成で使用された) リポジトリのユーザー名、およびそのユーザーのパスワードを、Management Server の起動時に「サービス」ダイアログ・ボックスに指定する必要があります。

「サービス」ダイアログ・ボックスでリポジトリ接続情報を指定しない場合は、Management Server は起動されません。誤った接続情報を指定した場合も、Management Server は起動されません。

リポジトリ所有者の定義の詳細は、2-6 ページの「[ステップ3「リポジトリへのログイン情報」](#)」を参照してください。

Windows NT の「スタート」メニューから Management Server が起動できない場合のトラブルシューティングの詳細は、C-9 ページの「[Management Server が Windows NT の「スタート」メニューから起動できない場合](#)」を参照してください。
4. 「開始」 ボタンをクリックして、Management Server を起動します。

注意： リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant をインストール・セッションから起動し、リポジトリ接続情報を保存するように選択した場合は、Management Server サービスが Windows NT で自動的に起動されます。

リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、「サービス」ダイアログ・ボックスに接続情報を指定する必要があります。

UNIX の場合

コマンド・ラインで、次のように入力します。

```
% oemctrl start oms
```

Management Server をバックグラウンド・プロセスで開始する場合は、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
% oemctrl start oms&
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

リポジトリの構成時に、リポジトリ接続情報を保存しないように選択した場合は、(データベース・ユーザーの作成で使用された) リポジトリのユーザー名、およびそのユーザーのパスワードを、接続情報を要求された際に入力します。リポジトリ所有者の定義の詳細は、2-6 ページの「[ステップ 3 「リポジトリへのログイン情報」](#)」を参照してください。

注意： ORACLE_HOME 環境変数が、Management Server が稼動している Oracle ホームに設定されていると、Management Server は、正しい Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームでクラス・ファイルを探そうとするため、Management Server は正しく起動されません。Oracle 環境の設定の詳細は、C-8 ページの「[Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合](#)」を参照してください。

Management Server の状態のチェック

Management Server の状態をチェックするには、オペレーティング・システムのプロンプトで、次のように入力します。

```
% oemctrl status oms
```

UNIX のコマンド文字列では大文字と小文字が区別されるため、小文字で入力してください。

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。Oracle Enterprise Manager のスーパー管理者の定義の詳細は、1-5 ページの「[管理ユーザーとは](#)」を参照してください。

リモート Management Server の状態をチェックする場合は、Management Server が稼動しているマシンのホスト名も指定する必要があります。

Management Server の状態をチェックすると、次の情報が示されます。

- Management Server 全体の状態
- Management Server が実行されてからの経過時間
- Management Server のパフォーマンスに関する統計

たとえば、次のような出力が示されます。

```
OEMCTRL for Windows NT: Version 2.1.0.0.0  
Copyright (c) 1998, 1999 Oracle Corporation. All rights reserved.
```

```
The Oracle Management Server on host [pjlee-pc.us.oracle.com] is functioning properly.
```

```
The server has been up for 0 00:03:55.437
```

```
Target database session count: 1 (session sharing is off)  
Operations queued for processing: 0  
Number of OMS systems in domain: 1 (pjlee-pc)  
Number of administrators logged in: 1  
Repository session pool depth: 15  
Repository session count: 6 in-use and 1 available, pool efficiency: 70%
```

Management Server の停止

注意： 各自のマシンにローカルに設定されていない Management Server（つまりリモート Management Server）の停止はサポートしていません。

Management Server を停止するには、次のステップを実行します。

Windows NT の場合

1. 「スタート」メニュー → 「設定」 → 「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer」サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、Management Server を停止します。

UNIX の場合

コマンド・ラインで、次のように入力します。

```
% oemctrl stop oms
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

Oracle Enterprise のスーパー管理者のユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。Oracle Enterprise Manager のスーパー管理者の定義の詳細は、1-5 ページの「[管理ユーザーとは](#)」を参照してください。

Management Server のログ・ファイルのチェック

Management Server が起動されない場合のトラブルシューティングの詳細は、次のリソースを参照してください。

- oms.log ファイル
- oms.nohup ファイル (Solaris の場合)
- Windows NT のイベント・ログ (Windows NT の場合)

\$ORACLE_HOME¥sysman¥log ディレクトリには、ディスクにリダイレクトされたトレースの出力が入っています。このディレクトリには、oms.log ファイルと oms.nohup ファイルが含まれています。

Management Server では、トレース・メッセージはすべて oms.log ファイルに格納されます。oms.log ファイルには、Management Server の起動時および実行時に生成されたメッセージが含まれています。

oms.nohup ファイルには、Management Server の起動前に表示される、Management Server のエラー・メッセージが含まれています。

Windows NT のイベント・ログにアクセスして、Management Server で記録されたイベントを表示するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー→「プログラム」→「管理ツール (共通)」で、「イベント ビューア」を選択します。
2. 「ログ」メニューの「アプリケーション」を選択します。
3. ログの画面が表示されます。Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer サービスで記録されたイベントの中で、赤い停止記号が示されているものをダブルクリックします。これらのイベントは、Management Server によって報告されたエラーです。

Management Server の追加

3層アーキテクチャの Oracle Enterprise Manager は、急速に規模が拡大する分散環境でのパフォーマンスのメンテナンスと、日常的な作業の自動化において、これまでにない拡張性があります。

ネットワーク内のノード数および管理対象のサービス数が増加した場合、または現行の Management Server がオーバーロードした場合には、中間層に Oracle Management Server を追加してワークロードを分散し、平準化することができます。複数の Oracle Management Server がある環境では、複数の Management Server で同じリポジトリを共有します。

Oracle Management Server を複数使用することにより、互いの耐障害性が確保されます。1つの Oracle Management Server に障害が発生しても、他のサーバーが稼働し続けます。障害が発生した Management Server に登録されているクライアントは、ただちにログインし直し、同じリポジトリを管理している他の Management Server のいずれかに登録すれば、残っている使用可能な Oracle Management Server で作業を継続できます。障害が発生したサーバー以外の Oracle Management Server に登録するように構成されているクライアントは、障害の影響を受けません。

管理対象のノードが増加した場合にパフォーマンスを改善するには、管理対象の 50 個のノードにつき 1 つの Management Server を追加するか、または Management Server マシンの CPU 容量を増加することをお勧めします。

この章では、既存のリポジトリを管理するために、Management Server を設定、または追加する方法を説明します。

注意： 既存のリポジトリを管理するために、Management Server を設定、または追加する必要がない場合は、この章を省略して先に進んでください。

追加の Management Server のインストール

他の Management Server がインストールされていないマシンに、Oracle Server CD-ROM から追加の Oracle Management Server をインストールします。詳細な手順は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。

追加の Management Server の設定

新しい Management Server を追加する場合には、Enterprise Manager Configuration Assistant を実行して、対象ノードの構成ファイルを更新する必要があります。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-3 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「構成パラメータの編集」を選択し、「次」を押して操作を続けます。「構成パラメータ」ページが表示されます。

ステップ 2 「構成パラメータ」

必要に応じてパラメータを変更します。

ユーザー名

このマシンの Management Server で管理する、既存のリポジトリのユーザー名を入力します。

パスワード

上のユーザー名のパスワードを入力します。この情報は、Management Server が次回起動するときに使用されます。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれにあわせて変更してください。

サービス

リポジトリが常駐するサービスを入力します。

この情報は、このマシンの Management Server が次回起動するときに使用されます。無効な情報があると、Management Server は起動しません。

ユーザー名とパスワードを保存しない

ユーザー名および暗号化されたパスワードを、omsconfig.properties ファイルに保存するかどうかを選択できます。保存された内容は、起動時に Management Server によって読み込まれます。このファイルにユーザー名と暗号化されたパスワードが保存されている場合

は、Management Server は、これらの内容を使用してリポジトリにログインします。保存されていない場合は、起動する前に、ユーザー名とパスワードを入力するように要求されます。

ユーザー名とパスワードを保存しない場合は、「ユーザー名とパスワードを保存しない」チェックボックスを選択してください。

注意： 次のページに進むには、このページのパラメータを少なくとも1つ変更する必要があります。何も変更せずに「次」ボタンを押すと、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください。」というエラー・メッセージが表示されます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページに移動できません。

ステップ3 「構成パラメータを変更」

「構成パラメータを変更」ページには、構成パラメータ変更ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックして変更を開始するか、または「前」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

Intelligent Agent の起動

Oracle Intelligent Agent は、ネットワーク内のリモート・ノードで実行されるプロセスです。Oracle Enterprise Manager は、Intelligent Agent を使用して、自身が常駐するノードにおけるサービスの検出、ジョブの実行、イベントの監視およびリモート・サイトにおけるデータの収集を行います。Intelligent Agent に関するトラブルシューティングの詳細は、『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Management Server にローカルに格納されている Intelligent Agent は、Management Server の起動時に自動的に検出されます。分散サービスを検出するには、それらのサービスが常駐しているノードの Intelligent Agent を起動する必要があります。

この章の内容は、次のとおりです。

- [Windows NT での Oracle Intelligent Agent の起動および停止](#)
- [UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止](#)

Enterprise Manager をインストールまたは使用する前に、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』の Intelligent Agent 互換表を確認してください。

Windows NT での Oracle Intelligent Agent の起動および停止

この項には、Windows NT のコントロール・パネルおよびコマンド・プロンプトによって Intelligent Agent を制御する際の情報が記載されています。

注意： Oracle Enterprise Manager および Intelligent Agent は、Net8 を使用してデータベースと通信します。Intelligent Agent を使用できるかどうか確認する前に、Net8 がそれぞれの SID と接続できることを確認してください。

Windows NT での Intelligent Agent の起動

Windows NT で Intelligent Agent を起動するには、次のステップを実行します。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>Agent」サービスを選択します。
3. 「開始」ボタンをクリックして、Intelligent Agent を起動します。

Intelligent Agent の「スタートアップの種類」は「自動」に設定されており、システムの起動時に、Intelligent Agent が自動的に起動されます。ユーザーが Intelligent Agent を起動するには、「スタートアップの種類」を「手動」に設定します。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>Agent」サービスを選択します。
3. 「スタートアップ」ボタンをクリックします。「サービス」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「スタートアップの種類」で「手動」を選択します。
5. 「サービス」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

Windows NT での Intelligent Agent の停止

Windows NT で Intelligent Agent を停止するには、次のステップを実行します。

1. 「スタート」メニュー→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「サービス」アイコンをダブルクリックします。
2. 「Oracle<Oracle_Home_Name>Agent」サービスを選択します。
3. 「停止」ボタンをクリックして、Intelligent Agent を停止します。

Windows NT での Intelligent Agent の実行の確認

Intelligent Agent が実行中であることを確認するには、「コントロール パネル」の「サービス」で状態を検索するか、コマンド・プロンプトで `net start` と入力します。サービスのリストに、Oracle<Oracle_Home_Name>Agent が表示されます。

Windows NT のタスク・マネージャを表示して、`dbsnmp.exe` プロセスの情報を参照することもできます。

コマンド・プロンプトからの起動、停止および状態の確認

コマンド・プロンプトから Intelligent Agent を起動または停止するには、適切なコマンドを入力します。コマンド・プロンプトからは、サービスが稼働中であることも確認できます。

目的	入力するコマンド
プロンプトから Intelligent Agent を起動	net start Oracle<Oracle_Home_Name>Agent
プロンプトから Intelligent Agent を停止	net stop Oracle<Oracle_Home_Name>Agent
プロンプトから Intelligent Agent の状態を確認	net start

注意： Windows NT で Intelligent Agent を起動する場合に、lsnrctl コマンドを使用しないでください。このコマンドはサポートされていません。Windows NT では、net コマンドを使用してください。

UNIX での Oracle Intelligent Agent の起動および停止

UNIX では、Oracle Enterprise Manager は lsnrctl コマンドを使用して Intelligent Agent を起動および停止します。UNIX Intelligent Agent を制御するための関連する lsnrctl コマンドは、次のとおりです。

目的	入力するコマンド
UNIX プラットフォームでの Intelligent Agent の起動	lsnrctl dbsnmp_start
UNIX プラットフォームでの Intelligent Agent の停止	lsnrctl dbsnmp_stop
Intelligent Agent の状態の確認	lsnrctl dbsnmp_status

注意： Intelligent Agent は、同じオペレーティング・システムのユーザーとして起動および停止する必要があります。

コンソールの設定

Oracle Enterprise Manager コンソールは、管理者用のグラフィカル・インタフェースです。コンソールからは、次のタスクを実行できます。

- 複数のデータベースの集中的な管理、診断およびチューニング
- Oracle 製品およびデータベース以外のサービスの管理
- 使用している Oracle 製品ファミリーおよびサードパーティ・サービスの状態の、1日24時間にわたる効率的な監視と対応
- 複数のノードで実行されるジョブの、様々な間隔によるスケジュール
- ネットワーク・サービスでのイベントの監視
- データベースやその他のサービスを論理的な管理グループごとにまとめて、表示をカスタマイズ

この章の内容は、次のとおりです。

- [Enterprise Manager コンソールの起動](#)
- [サービスの検出](#)
- [管理者アカウントの作成](#)
- [Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行](#)
- [一般設定](#)

Enterprise Manager コンソールの起動

コンソールでは、強力かつ確実なシステム管理を実現する直観的なグラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）により、Oracle 環境を一元的に制御できます。

リポジトリを作成して、Management Server と Intelligent Agent を起動すると、Enterprise Manager コンソールを起動できるようになります。

Enterprise Manager コンソールを起動するには、次のステップを実行します。

1. Enterprise Manager コンソールを起動します。

- Windows プラットフォームの場合

「スタート」メニュー → 「Oracle-`<Oracle_Home_Name>`」 → 「Enterprise Manager」で「コンソール」を選択します。

- UNIX の場合

コマンド・ラインで、次のように入力します。

```
oemapp console
```

コマンド文字列は大文字・小文字が区別されるので、小文字で入力してください。

注意： Web ブラウザから Enterprise Manager を起動することもできます。Enterprise Manager Web サイトのインストール、および Web ブラウザを設定して Enterprise Manager を実行する方法の詳細は、6-5 ページの「[Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行](#)」を参照してください。

Oracle Enterprise Manager ログイン画面が表示され、管理者名とパスワードを入力するように要求されます。

2. Oracle Enterprise Manager に初めてログインする場合は、デフォルトの接続情報（管理者名とパスワード）を入力します。

管理者 = sysman

パスワード = oem_temp

これらの接続情報は、デフォルトのスーパー管理者アカウントのもので、Enterprise Manager を最初に起動する場合は、スーパー管理者としてログインしてください。スーパー管理者アカウントを使用して別の管理者アカウントがすでに作成されている場合は、別の管理者としてログインできます。

3. プルダウン・リストから、Management Server が稼働しているノード名を選択します。選択したノード上の Management Server は、アクセスするリポジトリで構成されている必要があります。

注意： このステップを実行する前に、Management Server をインストールして構成しておく必要があります。

プルダウン・リストに、Management Server が稼動しているノード名が表示されない場合は、次の処理を行います。

- a. 「Management Server」フィールドの右側にある「Management Server」ボタンをクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - b. 「追加」ボタンをクリックします。「Management Server の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - c. Management Server が稼動しているノード名を指定して、「OK」をクリックします。
 - d. プルダウン・リストから、Management Server を稼動しているノード名を選択します。
4. 最初にログインしたときに、セキュリティ・ログインのダイアログ・ボックスが表示され、ここでデフォルトのスーパー管理者パスワードを変更できます。パスワードはただちに更新してください。

注意： パスワードは、半角英数字 8 文字までです。

最初にコンソールを起動すると、検出ウィザードが表示されます。これを使用して、ネットワーク・サービスを識別し、コンソールのナビゲータ・ツリーに簡単に移入できます。

サービスの検出

Oracle Enterprise Manager には、ネットワーク・サービスを識別し、コンソールのナビゲータ・ツリーに移入するための、サービスの検出ウィザードがあります。データベースやリスナーなどのサービスは、Enterprise Manager のコンポーネントによって管理できます。

Management Server の起動時には、Management Server が稼動しているマシンの Intelligent Agent および管理可能なサービスが、自動的に検出されます。コンソールのナビゲータには、Management Server マシンで検出されたサービスがすべて表示されます。

リモート・ノードを検出するには、次のようにします。

1. コンソールの「ナビゲータ」メニューで「ノードの検出」を選択します。
2. 検出ウィザードが表示された場合は、イントロダクションを確認し、「次」を押して処理を続行します。
3. 「ノードの指定」ページが表示された場合は、テキスト・ウィンドウにノード名または IP アドレスを指定します。テキスト・ウィンドウに、検出するノードまたは IP アドレスを、空白、カンマ、タブで区切るか、または改行して入力すると、複数ノードのサービスを一度に検出できます。「次」をクリックして処理を続行します。

4. 「進行」ページが表示され、ノード検出の状態が示されます。ノードが正常に検出された場合は、チェックマークが表示されます。ノードの検出に失敗した場合は、Xが表示されます。検出プロセスが終了した後で、「終了」ボタンをクリックします。
5. 「検出結果」ダイアログ・ボックスが表示され、自動的に検出された、または検出されなかったノードが示されます。「OK」ボタンをクリックして、ダイアログ・ボックスを取り消します。

ノードで自動検出に失敗した場合は、「進行」ページの「次」ボタンをクリックします。「エラー」ページが表示され、ここで失敗したノードに対して、再試行、スキップまたは手動による検出を行うかどうかを選択できます。

注意： 手動で検出されたノードは、自動検出を行う前にナビゲータ・ツリーから削除しておく必要があります。

ノードが検出できない場合は、そのノードが停止していないか、またはノードで Intelligent Agent が稼動しているかを確認してください。TCP/IP ネットワーク・プロトコルを使用しているかどうかを確認することもできます。サービスの検出の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

管理者アカウントの作成

Enterprise Manager リリース 2.1 は、複数管理者システムです。つまり、Enterprise Manager を使用してシステムを管理する人は、各自がコンソールやスタンドアロン・アプリケーションへのログインに使用する管理者アカウントを持ちます。

Enterprise Manager をインストールすると、デフォルトのスーパー管理者アカウントが1つ作成されます。このスーパー管理者アカウント名は `sysman`、初期パスワードは `oem_temp` です。

スーパー管理者 `sysman` は、「システム」メニューの「管理者の管理」項目を使用して管理者を作成できます。ユーザー名とパスワードの他に、各アカウントを `super administrator` アカウントまたは `regular` アカウントとして作成できるかどうかを指定できます。

スーパー管理者には、すべてのオブジェクトに対する完全な権限が自動的に設定されます。大半のスーパー管理者は、日常の操作用に別のアカウントも持っていますが、Management Server の起動や停止、または新規の Enterprise Manager 管理者の作成など、スーパー管理者にしかできない特殊な操作には、スーパー管理者アカウントを使用します。

注意： 日常の管理作業に `sysman` アカウントを使用することは、お薦めできません。

レギュラー管理者は、コンソールの他のすべての操作に完全にアクセスできますが、参照し、変更できるのは、アクセス権のあるジョブ、イベントまたはグループに限られます。

コンソールの「システム」メニューの「管理者の管理」で、Enterprise Manager の管理者を作成、編集および削除する方法の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager の実行

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 では、管理者は、任意のマシンでサービスを管理できます。管理者は、Oracle Enterprise Manager を、ファット・クライアントまたはシン・クライアントとして実行できます。

注意： ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager は、Windows NT、Windows 95 および Windows 98 のオペレーティング・システムでサポートされています。

ファット・クライアントは、ローカルにインストールされている Oracle Enterprise Manager ファイルを使用します。シン・クライアントは、Web ブラウザを使用して、Oracle Enterprise Manager ファイルがインストールされている Web サーバーに接続します。いずれのタイプのクライアントでも、使用できる機能は同じです。つまり、管理者はファット・クライアントまたはシン・クライアントのどちらからでも、同じ管理タスクを行うことができます。ただし、Oracle Enterprise Manager の製品ファミリのすべてのコンポーネントが、Web ブラウザでサポートされているわけではありません。詳細は、次の表を参照してください。

製品	ブラウザで 実行可	ブラウザで 実行不可
Oracle Enterprise Manager コンソール	<input type="radio"/>	
Oracle DBA Management Pack	<input type="radio"/>	
Oracle Diagnostics Pack または Oracle Management Pack for Oracle Applications で使用できる Oracle Advanced Events	<input type="radio"/>	
Oracle Tuning Pack		<input type="radio"/>
Oracle Diagnostics Pack		<input type="radio"/>
Oracle Change Management Pack		<input type="radio"/>
Oracle Management Pack for Oracle Applications		<input type="radio"/>
Oracle Management Pack for SAP R/3		<input type="radio"/>
Oracle Standard Management Pack		<input type="radio"/>

製品	ブラウザで 実行可	ブラウザで 実行不可
Oracle Parallel Server Management (統合アプリケーション)	○	
Oracle Application Manager (統合アプリケーション)	○	

注意： Oracle Parallel Server Management および Oracle Application Manager は、Web ブラウザからの実行をサポートする統合アプリケーションです。

Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager を実行するには、次のインストールおよび構成ステップを実行します。

1. Web ブラウザをインストールします。

サポートされている Web ブラウザは次のとおりです。

- Netscape Navigator 4.6 (Windows NT、Windows 95 および Windows 98)
- Microsoft Internet Explorer 5.0 (Windows NT、Windows 95 および Windows 98)

注意： Microsoft Active Desktop から実行されている Microsoft Internet Explorer の使用はサポートされていません。

2. Oracle Enterprise Manager Web サイトをインストールします。

Oracle Enterprise Manager Web サイトは、次のようにインストールされます。

- デフォルトでは、最上位レベル・コンポーネントである Oracle8i Management Infrastructure、およびインストール・タイプの Oracle Management Server とともにインストールされます。この場合には、Oracle Application Server リスナーが自動的にインストールされます。
- 最上位レベル・コンポーネントのカスタム・インストール・タイプでは、Oracle8i Enterprise Edition または Oracle8i Management Infrastructure とともにインストールされます。カスタム・インストールでは、デフォルトで Oracle Application Server リスナーが選択されますが、必要な場合は、この選択を解除して別の Web サーバーを使用できます。

Oracle Enterprise Manager Web サイトには、Oracle Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、統合アプリケーション、Quick Tour、ドキュメントおよび Readme のファイルがインストールされます。

3. Web サーバーをインストールし、構成します。

Oracle Application Server リスナーがすでにインストールされている場合は、Web サイトは自動的に構成されています。一度 Web サイトとリスナーをインストールすれば、それ以降は URL を入力する必要はありません。

コマンド・ラインに次のコマンドを指定して、Windows NT および Solaris に対して Oracle Application Server リスナーを起動できます。

```
emwebsite start
```

コマンド・ラインに次のコマンドを指定して、Windows NT および Solaris に対して Oracle Application Server リスナーを停止できます。

```
emwebsite stop
```

他の Web サーバーを使用する場合は、次の Web サーバーがサポートされています。

- Apache 1.3.9 (Solaris)
- Oracle Application Server 4.0.8 (Windows NT および Solaris)
- Internet Information Server (IIS) 4.0 (Windows NT)

前述の Web サーバーの構成に関する情報は、付録 E 「Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング」を参照してください。

前述のステップを実行すると、ブラウザベースで Oracle Enterprise Manager を実行できるようになります。

注意： Web ブラウザから Enterprise Manager を実行するには、各自の Web ブラウザで使用する目的で構成されているプロキシを削除する必要があります。プロキシを削除するには、次の方法があります。

- Web ブラウザのプロキシ設定を使用して、ネットワークに直接接続するように選択します。または、
- プロキシを手動で構成するように選択します。ここでは、Enterprise Manager Web サイトを実行している Web サーバーのプロキシを使用しないように指定します。

プロキシで問題が発生した場合は、C-12 ページの「Web ブラウザのトラブルシューティング」を参照してください。

1. Web ブラウザを起動して、Web サーバーがインストールされている場所に関係なく、次の URL を指定します。

```
http://<webserver hostname>:<port number>/  
oem_webstage/EMWebSite.html.
```

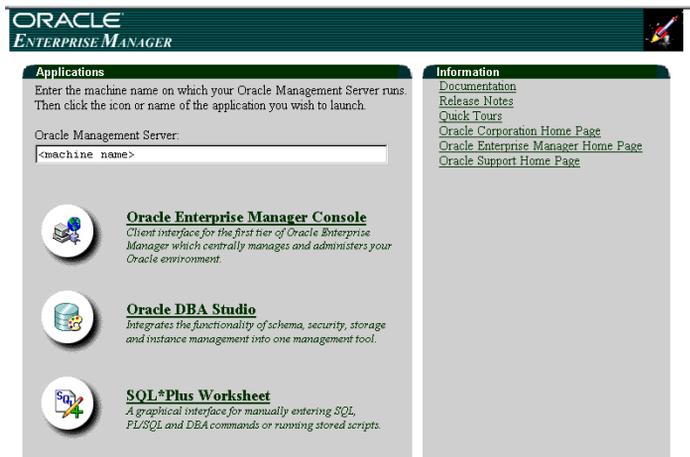
たとえば、次のようになります。

http://jfox-sun:3339/oem_webstage/EMWebSite.html

注意： Oracle Application Server リスナーのポート番号は 3339 です。

索引ページが表示され、ここから様々な製品、ドキュメントおよび Web サイトを起動できます。

2. この索引ページで、接続する Management Server のマシン名を入力して、起動するアプリケーションのアイコンまたはアプリケーション名をクリックします。



最初に URL を入力する場合には、Oracle JInitiator リリース 1.1.7 以上をインストールする必要があります。

- Netscape では、プラグインのインストールを自動的に要求されます。

注意： 初回のみ、プラグインをインストールするように要求されますが、これを終了または取り消すと、次回にブラウザベースの Enterprise Manager を起動しても、インストールは要求されなくなります。この場合に、プラグインをインストールするには、次の URL を指定します。

http://<webserver hostname>:<port number>/oem_webstage/java-plugin/install_win32.html

- Microsoft Internet Explorer では、次の URL を入力して、プラグインをインストールします。

```
http://<webserver hostname>:<port number>/  
oem_webstage/java-plugin/install_win32.html
```

3. プラグインのページの指示に従って、プラグインをインストールします。ご利用のマシンおよびネットワーク環境によっては、プラグインのインストールに時間がかかることがあります。

Java プラグインをインストールすると、「Oracle Enterprise Manager ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されます。

注意： ブラウザベースの Oracle Enterprise Manager を最初に起動するときは時間がかかることがあります。また、ダイヤル・アップ接続を行っている場合には、ダウンロード時間が長くなりますが、回線スピードによって時間は異なります。

4. Oracle Enterprise Manager に初めてログインする場合は、デフォルトの接続情報（管理者名とパスワード）を入力します。

管理者 = sysman

パスワード = oem_temp

これらの接続情報は、デフォルトのスーパー管理者アカウントのもので、Enterprise Manager を最初に起動する場合は、スーパー管理者としてログインしてください。スーパー管理者アカウントを使用して別の管理者アカウントがすでに作成されている場合は、別の管理者としてログインできます。

注意： 指定した Management Server に接続できない場合は、EmWebSite.html のページに戻って、Management Server の別のマシン名を指定してください。Oracle Enterprise Manager ログイン画面で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

5. URL のブックマークを作成します。

一般設定

この項では、ジョブ、電子メールとポケットベルによる通知、およびリモート SYSDBA 管理用のコンソールの設定に関する次の情報を提供します。

- ジョブ制御システムの設定
- 電子メール通知の設定
- ポケットベル・サービスの構成および起動
- Management Server 接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成
- バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成

ジョブ制御システムの設定

この項の項目は、次のとおりです。

- ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成
- 管理対象サービスの優先接続情報リストの設定

ジョブ実行のための Windows NT ユーザー・アカウントの作成

Intelligent Agent によって、管理対象ノードでジョブを実行するには、次の要件を満たす必要があります。

- 拡張ユーザー権限「バッチ ジョブとしてログオン」を持つ NT ユーザー・アカウントが必要です。権限は、既存のローカル・ユーザーまたはドメイン・ユーザー、あるいは新規 NT ユーザーに割り当てられます。
- Oracle Enterprise Manager コンソールで、そのユーザーにノードの優先接続情報リストが設定されています。6-13 ページの「[管理対象サービスの優先接続情報リストの設定](#)」を参照してください。
- ユーザーには、ORACLE_HOME\NET80 ディレクトリに対する読み込み / 書き込み許可と、TEMP ディレクトリまたは ORACLE_HOME ディレクトリに対する書き込み許可が必要です。

多くのコンポーネントで、Intelligent Agent ノードからサーバー・ノードに対してジョブを発行できるようにするには、Windows NT のユーザー・アカウントが必要です。

注意：「バッチ ジョブとしてログオン」権限を設定しない場合、ノードでジョブを実行すると、「ユーザー認証に失敗しました。」というメッセージが表示されます。

管理対象ノードごとに、Windows NT ユーザー・アカウントを作成する必要があります。次の3つの手順のいずれかに従ってください。

新規 Windows NT ユーザー・アカウントの作成 Intelligent Agent がインストールされている NT マシン上に新規の NT ユーザー・アカウントを作成し、このユーザーに「バッチ ジョブとしてログオン」権限を付与するには、次の手順を実行してください。

1. Windows NT の「スタート」メニューで、「管理ツール」から「ユーザー マネージャ」を選択します。このツールの詳細は、Windows NT のドキュメントを参照してください。
2. 「ユーザー」メニューから「新しいユーザー」を選択して、次のことを確認します。
 - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていません。
 - ユーザー名として「SYSTEM」または「system」が使用されていません。
3. 「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
4. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
5. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
6. 選択したユーザーにこの権限を付与します。

既存の NT ユーザー・アカウントへの権限の割当て 既存のローカル・ユーザー・アカウントに権限を割り当てるには、次の手順を実行してください。

1. 「ユーザー マネージャ」パネルでユーザーを選択し、次のことを確認します。
 - 「ユーザーは次回のログイン時にパスワード変更が必要」オプション・ボックスがチェックされていません。
 - ユーザー名として「SYSTEM」または「system」が使用されていません。
2. 「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
3. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
4. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
5. このユーザーに、高度なユーザー権利を追加します。
6. 「追加」ボタンをクリックします。
 - a. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します。(自分のドメインを選択)
 - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
 - c. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
 - d. 「追加」をクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。
7. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

Intelligent Agent ユーザーとしての NT ドメイン・ユーザーの構成

注意： NT ドメイン・ユーザーは、マシンがプライマリ・ドメイン・コントローラ（PDC）の場合のみ機能します。これ以外の場合は、VNI-2015「認証エラー」でジョブが失敗します。PDC 以外のすべての環境では、アカウントはマシンに対してローカルにしてください。

Intelligent Agent ユーザーとしてドメイン・ユーザーを構成するには、次の手順を実行してください。

1. 「ユーザー マネージャ」ユーティリティの「原則」メニューで、「ユーザーの権利」オプションを選択します。
2. 「高度なユーザー権利の表示」ボックスをチェックします。
3. 権限リストから「バッチ ジョブとしてログオン」を選択します。
4. 「追加」ボタンをクリックします。
 - a. 「ドメインまたはコンピュータ」フィールドに入力します。（自分のドメインを選択）
 - b. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックします。
 - c. リストボックスでドメイン・ユーザーを選択します。
 - d. 「追加」をクリックします。
 - e. 「OK」をクリックします。
5. 「ユーザー権利の原則」ウィンドウで「OK」をクリックします。

注意： ローカル・ユーザーとドメイン・ユーザーの名前が同じである場合、ローカル・ユーザーが優先されます。

注意： ドメイン・ユーザーを設定する場合には、ドメイン・パスワードにローカル・パスワードと同じものを設定して、このドメイン・ユーザー・アカウントを使用してジョブを発行したときに、スケジュールされたジョブを実行できるようにします。

管理対象サービスの優先接続情報リストの設定

管理対象ノードで Intelligent Agent によってジョブの実行またはイベントの監視を行うには、そのノードで実行されているサービスに対して、各管理者が有効な接続情報を指定する必要があります。優先接続情報リストは、管理対象サービスごとにコンソールから設定されます。

コンソールで優先接続情報リストを設定するには、次の手順に従ってください。

1. 「システム」→「作業環境」→「優先接続情報リスト」を選択して、Intelligent Agent による管理が可能なサービスを表示します。
2. 認証が必要な管理対象サービスには、ユーザー名、パスワードおよびロールなど、そのサービスに該当する接続情報を入力します。
3. あるタイプの複数のサービスに同じ接続情報が必要な場合、そのサービス・タイプに <デフォルト> の接続情報を選択して、同じタイプのすべてのサービスにその接続情報が使用されるようにします。

たとえば、Administrator_1 が、管理対象のすべてのデータベースで admin1 というユーザー名と pass1 というパスワードを持っているとすると、<デフォルト> データベースのエントリには、接続情報として admin1/pass1 のみを入力することになります。データベース管理作業では、すべてこの <デフォルト> の接続情報が使用されます。

また、admin1 および pass1 以外の接続情報が必要なデータベースが 1 つしかない場合は、その特定のデータベースを選択して、異なる接続情報を入力できます。

Intelligent Agent では、実行するすべてのジョブと多くのイベントに対して、ユーザー名とパスワードの認証が行われます。優先接続情報リストを正しく設定しないと、ジョブやイベントは失敗する可能性があります。

NT ユーザーの場合は、(NT の Intelligent Agent が常駐する) ノードの優先接続情報リストを、「バッチジョブとしてログオン」に設定されたユーザーと同じに設定する必要があります。

電子メール通知の設定

SMTP ゲートウェイの設定

Oracle Enterprise Manager では、SMTP を使用した電子メール通知の送信がサポートされています。管理者が電子メール通知を使用できるようにするには、SMTP 電子メール・システムで使用される SMTP メール・ゲートウェイを指定する必要があります。

SMTP は、TCP/IP ベースのメール・プロトコルで、これを使用するには、コンソール・マシン上で TCP/IP サービスを設定しておく必要があります。

Enterprise Manager コンソールで、「システム」メニューの「SMTP ゲートウェイを構成」を選択して、次の情報を指定します。

フィールド	説明
SMTP メール・ゲートウェイ	SMTP メール・ゲートウェイが常駐するマシン名 (mailserver.company.com など) を入力します。
送信者の SMTP メール・アドレス	(Enterprise Manager Mail など) 自身を識別するための送信者の名前を指定します。 注意: SMTP サーバーには、空白を処理できないものがあります。このような場合には、“Enterprise Manager Mail” のように、引用符で囲んで指定します。ここで指定した名前が、電子メール通知の送信者として表示されます。

前述の情報を指定しない場合は、管理者がこの電子メールを構成しようとしたときに、エラー・メッセージが表示されます。

電子メールとポケットベルの通知の設定

管理者は、それぞれの電子メールまたはポケットベルの通知に対する作業環境を定義する必要があります。Enterprise Manager コンソールで、「システム」メニューの「作業環境」を選択します。「編集 管理者作業環境」プロパティ・シートが表示されます。

このプロパティ・シートのページを完了して、管理者のポケットベルおよび電子メールの通知方法を設定します。このページの「テスト」オプションを使用して、テスト用のポケットベルや電子メールを送信することもできます。

ポケットベルの情報

項目	説明
キャリア	ポケットベル・サービスが含まれているノードが検出された後、プルダウン・リストからポケットベル・キャリア・サービスの名前を選択します。
Pin	ポケットベルの個人識別番号 (PIN) を指定します。PIN は、英数字のポケットベルでのみ必要で、数値のポケットベルの場合には不要です。このエントリは、英数字のポケットベルの GSM、TAP および FLEXTD のプロトコルで必要になります。GSM の場合は、PIN は管理者の実際の電話番号になります。数値のポケットベルの場合は、ポケットベルの番号を指定します。

項目	説明
テスト	ポケットベル情報の有効性をテストするには、プルダウン・メニューから対象のポケットベル・サービスを選択し、(必要な場合は) PIN 番号を指定して、「テスト」ボタンをクリックします。ポケットベルの状態を示すメッセージが表示されます。テストが失敗した場合は、ポケットベル・サービスの構成ファイル (paging.cfg) を確認してください。ポケットベルの設定および構成の具体的な指示は、6-16 ページの「 ポケットベル・サービスの構成および起動 」を参照してください。Intelligent Agent Paging Extension が定義されているマシンのポケットベルでトレース機能が使用できる場合には、ORACLE_HOME¥sysman¥log ディレクトリにあるポケットベルのトレース・ログ・ファイルを参照することもできます。

電子メールのパラメータ

項目	説明
受信者の電子メール	電子メール通知を送信する管理者の電子メール・アドレスを指定します。
テスト	「テスト」ボタンをクリックして、メール情報が正しいことを確認します。テスト電子メールの状態を示すメッセージが表示されます。テストが失敗した場合は、電子メールの構成を確認してください。Management Server でトレース機能が使用できる場合は、ORACLE_HOME¥sysman¥log ディレクトリにあるメール・トレース・ログ・ファイルを参照することもできます。
サブジェクトの接頭辞	電子メール通知に付加するオプションの接頭辞を指定します。この接頭辞によって、Enterprise Manager コンソールから管理者に送信される通知を区別できます。

イベント通知フィルタ

イベント通知フィルタを使用して、管理者へ送信する電子メールやポケットベルを、イベントの重大度レベルに基づいてフィルタできます。フィルタは、「管理者作業環境」ダイアログ・ボックスによってユーザー・レベルに設定されます。次のイベント重大度を任意に組み合わせることができます。重大度のすべてのレベルを選択すると、フィルタは行われません。

- 警告
- 警戒
- 消去
- ノード停止
- 再割当て

ジョブ通知フィルタ

ジョブ通知フィルタを使用して、管理者に送信された電子メールやポケットベルを、ジョブの状態に基づいてフィルタできます。イベント通知フィルタでは、フィルタは、「管理者作業環境」ダイアログ・ボックスによってユーザー・レベルに設定されます。すべてのジョブの状態を選択すると、フィルタは行われません。

- 起動
- 完了
- 失敗
- 削除（ジョブ削除）

ポケットベル・サービスの構成および起動

Oracle Enterprise Manager のポケットベル機能で通知を行う場合は、Paging Service Agent Extension をインストールする必要があります。このポケットベル・サービスは、ベースの Oracle Enterprise Manager のインストールの一部としてはインストールされずに、Oracle Intelligent Agent とともにインストールされます。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。

注意： Paging Service Agent Extension は、Windows NT でのみサポートされています。

Oracle Enterprise Manager 内の通知用にポケットベルを利用する場合、インストールが必要なポケットベル・サービスは1つだけです。

ポケットベル・サービスでは、数値または英数字のポケットベルをサポートしており、次のポケットベル・サービス・プロトコルを使用しています（英数字のポケットベルのみ）。

- TAP (Telocator Alphanumeric Protocol)
- GSM (Global System for Mobile Communications)
- FLEXTD

ポケットベル・サービスは自動的に構成されません。ポケットベルを構成するには、次の手順に従います。

ポケットベルの設定

ポケットベル・サービスを実行するマシンで、次の指示に従ってください。

1. モデムをインストールします。

注意： モデムは、ポケットベル・サービスを実行する Windows NT マシンにインストールしてください。

2. モデム設定を指定します。
 - a. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「モデム」を選択します。
 - b. 「モデム プロパティ」 ページで「ダイヤルのプロパティ」 をクリックし、次のパラメータを設定して、ダイヤル方法を指定します。
 - * ダイヤルする市外局番。
 - * ダイヤルする国。
 - * 外線にアクセスする方法。外線にアクセスする際にダイヤル番号が必要ない場合は、このフィールドは空白にしておいてください。
 - c. 「モデム プロパティ」 ページの「プロパティ」 をクリックして「最高速度」を設定します。最高速度は 9600K ボーに設定することをお勧めしますが、各自のシステムに最適なボー・レートを設定してください。

注意： ボー・レートを 9600 よりも大きな値に設定すると、ポケットベル・サービス・キャリアでデータが失われることがあります。9600 というモデムのボー・レートは、推奨値にすぎません。ご使用のシステムに最適のボー・レート設定を見つけてください。

3. Paging Service Agent Extension をインストールします。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドを参照してください。
4. Paging Service Agent Extension をインストールするために、ORACLE_HOME¥sysman¥config ディレクトリには、paging.cfg.template というテンプレート構成ファイルが用意されています。このテンプレートには、ご利用のキャリアとサービス・プロバイダ特有の構成プロパティの定義方法について、詳細な指示と例が含まれていますので、参照してください。
5. paging.cfg.template ファイルを paging.cfg ファイルにコピーします。このファイルも ORACLE_HOME¥sysman¥config ディレクトリにあります。これはデータベースの Oracle ホーム・ディレクトリであり、ここに Intelligent Agent がインストールされています。このファイルの名前を変更せずにコピーして、ポケットベルの構成情報を保持しておくことをお勧めします。このファイルをコピーしない場合は、ポケットベル構成に関するコメントがすべて削除されます。また、Enterprise Manager が更新された場合は、すべての構成が失われ、元に戻すことはできません。
6. paging.cfg.template ファイルの指示に従って、ポケットベルの使用の要件に合わせて paging.cfg ファイルを変更し、保存します。ポケットベル構成プロパティの概要

は、表 6-1 「ポケットベルの構成プロパティ」を参照してください。

paging.cfg.template ファイルには、14 のプロパティが含まれています。ただし、これらのプロパティのすべてに値を設定する必要はなく、(数値または英数字の) いずれかのタイプのポケットベルでのみ使用するプロパティもあります。

7. Intelligent Agent を再起動します。
 - a. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」 → 「サービス」 を選択します。
 - b. 「Oracle<ORACLE_HOME_NAME>Agent」 サービスを選択し、「停止」をクリックした後で「開始」をクリックします。

注意： ポケットベルの構成を変更（追加または削除）した場合は、必ず Intelligent Agent を再起動してください。

Management Server が稼動しているマシンで、次の指示に従ってください。

8. Oracle Management Server が実行中であることを確認します。実行していない場合は、起動します。
 - a. 「スタート」 → 「設定」 → 「コントロール パネル」 → 「サービス」 を選択します。
 - b. 「Oracle<ORACLE_HOME_NAME>ManagementServer」 サービスを選択し、「開始」をクリックします。

注意： ポケットベル・サービスの構成は、Management Server には依存しません。ポケットベル・サービスを起動する場合のみ、Management Server を実行する必要があります。

表 6-1 ポケットベルの構成プロパティ

プロパティ	数値 ポケット ベルに 設定可能	英数字 ポケット ベルに 設定可能	必須	コメント
CARRIER_NAMES	はい	はい	はい	空白文字は使用できません。
PAGER_TYPE	はい	はい	はい	有効値は NUMERIC または ALPHANUMERIC です。
COUNTRY	はい	はい	はい	<p>ポケットベル・キャリアとして同じ国内の DBA にダイヤルする場合は、同じ国コードを設定します。</p> <p>たとえば、米国の DBA にダイヤルする際に、ポケットベル・キャリアが米国にある場合は、1 の値を設定します。</p> <p>インドの DBA にダイヤルする際に、ポケットベル・キャリアがインドにある場合は、91 の値を設定します。</p> <p>ポケットベル・キャリアとして別の国の DBA にダイヤルする場合は、DBA の国コードだけでなく、ポケットベル・キャリアの国のダイヤル・コードも指定する必要があります。</p> <p>たとえば、米国（国コード 1）の DBA にダイヤルする際に、ポケットベル・キャリアがブラジルにある場合は、001 の値を設定します。</p> <p>スペイン（国コード 34）の DBA にダイヤルする際に、ポケットベル・キャリアがドイツにある（00 を使用してダイヤルする）場合は、0034 の値を設定します。</p> <p>特殊文字や空白は使用できません。</p>
AREA_CODE	はい	はい	はい	<p>DBA の市外局番を設定します。</p> <p>カッコ（'()'）などの余分な特殊文字は使用できません。</p>

表 6-1 ポケットベルの構成プロパティ (続き)

プロパティ	数値 ポケット ベルに 設定可能	英数字 ポケット ベルに 設定可能	必須	コメント
PHONE_NUMBER	はい	はい	はい	<p>ポケットベルを送信するためのダイヤル番号を設定します。</p> <p>この番号は、ポケットベル・キャリアの番号またはポケットベル自身の番号となります (ポケットベル自身の番号の場合は、PIN がありません)。</p> <p>ダッシュ ('-'), ピリオド ('.'), 空白などの特殊文字は使用できません。</p>
TIMEOUT	はい	はい	いいえ	<p>ポケットベルの通信が完了するまでの合計時間。数値ポケットベルで、ポケットベルの通信が完了していない場合は、TIMEOUT プロパティで指定した秒数が経過した後でタイムアウトとなります。</p> <p>タイムアウトの値は、ポケットベルの通信にかかる時間よりも長く設定します。</p> <p>数値ポケットベルでは、タイムアウトの秒数が経過するまで終了しないため、タイムアウトには大きい値を設定しないでください。</p> <p>値に何も指定しない場合は、ポケットベル・サービスでは、モデムのデフォルト設定が使用されます。</p> <p>この値は 60 に設定することをお勧めします。</p>
CONNECTION_DELAY	はい	いいえ	いいえ	<p>ポケットベル・メッセージが送信されるまでに、電話回線上で確立される停止時間を設定します。</p> <p>停止時間はモデムに固有で、通常は、ポケットベル・キャリアのスピードが遅くてメッセージを受信できない場合に使用します。</p>

表 6-1 ポケットベルの構成プロパティ (続き)

プロパティ	数値 ポケット ベルに 設定可能	英数字 ポケット ベルに 設定可能	必須	コメント
SUFFIX	はい	いいえ	はい	<p>ポケットベル・キャリアで音声によるメッセージがある場合に、設定します。</p> <p>カンマを使用して、オプションを選択するまでの待機時間を表します。</p> <p>たとえば、メッセージを送信するまでに 4 秒停止して、1 回送信する場合は、,,,1 と設定します。</p> <p>音声によるメッセージで、メッセージの送信を開始するオプション選択の後でシャープが必要な場合は、,,,1# と設定します。</p>
PROTOCOL	いいえ	はい	はい	TAP、FLEXTD または GSM を指定します。
OEM.MANAGEMENT_SERVER	はい	はい	いいえ	<p>リモート Management Server を使用している場合のみ設定します。</p> <p>Management Server が稼動しているマシン名を指定します。これは、ログインしている Management Server となります。</p> <p>OEM.MANAGEMENT_SERVER=<oms-hostname></p> <p>複数 Management Server の場合の注意：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. paging.cfg ファイルに複数の Management Server を構成することはできません。2 つの Management Server を指定した場合は、ポケットベルの起動時には、2 番目の Management Server のみが読み込まれます。

表 6-1 ポケットベルの構成プロパティ (続き)

プロパティ	数値 ポケット ベルに 設定可能	英数字 ポケット ベルに 設定可能	必須	コメント
OEM.MANAGEMENT_SERVER (続き)				<ol style="list-style-type: none"> 2. 情報はリポジトリに保存されているため、複数の Management Server では、paging.cfg ファイルの内容に関係なく同じポケットベル・サービスを使用します。 3. paging.cfg に設定されている Management Server が、複数 Management Server 環境で失敗した場合は、再起動せずにポケットベル通信を続行できます。これは、起動時に、paging.cfg に設定されている Management Server に接続されているためです。 4. paging.cfg に設定されている Management Server が、複数 Management Server 環境で失敗し、あるポイントで他の Management Server も失敗した (またはポケットベル・サービスが失敗した) 場合は、paging.cfg ファイルに 2 番目の Management Server が設定されるまで、ポケットベル・サービスは開始されず、最初の Management Server も失敗の前の時点では、再開されていないと見なされます。
OEM.MANAGEMENT_SERVER.BOOTPORT	はい	はい	いいえ	<p>デフォルト値の 7771 を使用しない場合のみ、値を設定します。必ず整数を指定してください。</p>

表 6-1 ポケットベルの構成プロパティ (続き)

プロパティ	数値 ポケット ベルに 設定可能	英数字 ポケット ベルに 設定可能	必須	コメント
TRACING.ENABLED	はい	はい	いいえ	<p>デバッグで使用するための値を設定します。ポケットベル・サービスは、電話回線操作に対するトレース文と、成功または失敗を書き込むことにより、ポケットベル通信で発生した内容をトレースします。</p> <p>有効値は TRUE または FALSE です。</p> <p>値が TRUE の場合は、プロパティ TRACEFILENAME および TRACING.LEVEL に値を指定してください。</p> <p>値が FALSE の場合は、TRACEFILENAME および TRACING.LEVEL に値を指定する必要はありません。</p>
TRACING.LEVEL	はい	はい	いいえ	<p>トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。</p> <p>有効値は 5 (重要なメッセージおよびエラー・メッセージを収集するユーザー・レベル)、3 (重要なメッセージ、エラー・メッセージ、警告メッセージを収集する管理者レベル) または 2 (すべてのトレース情報を収集するレベル) です。</p>
TRACEFILENAME	はい	はい	いいえ	<p>トレース可能な場合に、トレースの出力結果を書き込む場所を設定します。</p> <p>この値には、PAGING_LOG.TRC を設定することをお勧めします。</p> <p>デフォルトでは、このファイルは Intelligent Agent の ORACLE_HOME¥SYSMANY LOG¥ ディレクトリに保存されています。</p>

注意： ポケットベル・サービスと DBA が同じ国の場合、またはポケットベル・サービスと DBA が同じ市外局番であっても、COUNTRY プロパティと AREA_CODE プロパティのエントリは空白にできません。これらのエントリを空白にすると、ポケットベル通知は機能しません。

例 1

たとえば、次の場合について考えてみます。

- 数値ポケットベル。
- ポケットベル・サービスは、デフォルト以外のブート・ポート 7774 にリモートの Oracle Management Server を登録します。
- DBA はオーストラリア（国コード 61）にあります。
- ポケットベル・サービスは、ニュージーランドにあります（00 を使用して国外にダイヤルします）。
- 市外局番を含む DBA のポケットベル番号を、(800) 555-1234 とします。
- ポケットベル・サービスは、ポケットベル・メッセージを送信する前に 4 秒待機します。
- ポケットベル・サービスは、ポケットベル・キャリアへの送信に 60 秒かかります。
- ポケットベル・キャリアに音声によるメッセージがあり、ポケットベル・サービスで、4 秒の停止の後オプション 1 を選択します。
- トレースは不可とします。

PAGING.CFG ファイルは次のようになります。

```
CARRIER_NAMES=CARRIER_NUMERIC_PAGER
OEM.MANAGEMENT_SERVER=nsulliva.us.oracle.com
OEM.MANAGEMENT_SERVER.BOOTPORT=7774
CARRIER_NUMERIC_PAGER.COUNTRY=0061
CARRIER_NUMERIC_PAGER.AREA_CODE=800
CARRIER_NUMERIC_PAGER.PHONE_NUMBER=5551234
CARRIER_NUMERIC_PAGER.CONNECTION_DELAY=4
CARRIER_NUMERIC_PAGER.TIMEOUT=60
CARRIER_NUMERIC_PAGER.PAGER_TYPE=NUMERIC
CARRIER_NUMERIC_PAGER.SUFFIX=,,,1
CARRIER_NUMERIC_PAGER.TRACING.ENABLED=FALSE
```

例 2

たとえば、次の場合について考えてみます。

- 英数字のポケットベルを GSM プロトコルで使用します。
- DBA はノルウェー（国コード 47）にあります。

- ポケットベル・サービスはスウェーデンにあります（009 を使用して国外にダイヤルします）。
- 市外局番を含む DBA のポケットベル番号を、(800) 666-1234 とします。
- ポケットベル・サービスは、ポケットベル・キャリアへの送信に 75 秒かかります。
- 最大レベルのトレースを可能とし、トレース内容は、PAGINGLOG.TRC ファイルに書込まれます。

PAGING.CFG ファイルは次のようになります。

```
CARRIER_NAMES=CARRIER_ALPHANUMERIC_PAGER
CARRIER_ALPHANUMERIC_PAGER.COUNTRY=00947
CARRIER_ALPHANUMERIC_PAGER.AREA_CODE=800
CARRIER_ALPHANUMERIC_PAGER.PHONE_NUMBER=6661234
CARRIER_ALPHANUMERIC_PAGER.TIMEOUT=75
CARRIER_ALPHANUMERIC_PAGER.PAGER_TYPE=ALPHANUMERIC
CARRIER_ALPHANUMERIC_PAGER.PROTOCOL=GSM
OEM.TRACING.ENABLED=TRUE
OEM.TRACING.LEVEL=2
TRACEFILENAME=PAGINGLOG.TRC
```

例 3

次のようにモデムが設定されているとします。

- 外線： 5（市内）
- 外線： 9（市外）
- 市外局番： 650
- 場所： 米国

PAGING.CFG ファイルは次のようになります。

```
COUNTRY=1
AREA_CODE=650
PHONE_NUMBER=6380899
```

ダイヤル番号は 5 6380899 となります。

モデム設定で市外局番が 210 の場合は、ダイヤル番号は 9 1 650 6380899 となります。

長距離の場合は、「コントロールパネル」→「モデム」→「ダイヤルのプロパティ」で指定した市外局番と国の設定に基づいて、1 が自動的にダイヤルされます。

注意： 例 3 の内容は完全には設定されていません。ここでは、COUNTRY、AREA_CODE および PHONE_NUMBER の設定のみを示しています。

例 4

たとえば、次の場合について考えてみます。

- 数値ポケットベル。
- DBA は米国（国コード 1）にあります。
- ポケットベル・サービスは米国にあります。
- 市外局番を含む DBA のポケットベル番号を、(650) 645-8989 とします。
- ポケットベル・サービスは、ポケットベル・メッセージを送信する前に 4 秒待機します。
- ポケットベル・サービスに音声によるメッセージがあり、ポケットベル・サービスで、4 秒の停止後オプション 1 を選択し、次に 5 秒の停止後オプション 3 を選択します。

```
CARRIER_NAMES=SERVICE1
PAGER_TYPE=NUMERIC
SERVICE1.SUFFIX=,,,1#,,,3#
SERVICE1.CONNECTION_DELAY=4
SERVICE1.COUNTRY=1
SERVICE1.AREA_CODE=650
SERVICE1.PHONE_NUMBER=6458989
```

前述の例では、次の番号にダイヤルされます。

```
16506458989 , , , , 1# , , , , 3# , , , , 123456
<--number--><-----suffix-----><|><--message-->
                    connection Delay
```

注意： 例 4 は完全な例ではないため、設定されていないプロパティもあります。必要なプロパティをすべて追加してください。

ポケットベル・サービスの起動

ポケットベル・サービスを実行するマシンに戻って、次の指示に従ってください。

1. ポケットベル・サービスを起動します。
 - a. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「サービス」を選択します。
 - b. 「Oracle<ORACLE_HOME_NAME>PagingService」を選択し、「開始」をクリックします。

コマンド・プロンプトで次のように入力して、ポケットベル・サービスを起動することもできます。

```
oemctrl start paging
```

Enterprise Manager コンソールを実行するマシンで、次の指示に従ってください。

2. コンソールにログインします。
3. ポケットベル・サービスを構成したノードを検出するか、またはノードの検出をリフレッシュします。ポケットベル・サービスは、検出またはリフレッシュされたノードの下、および新しいポケットベル・サービス・フォルダの下に表示されます。

検出を行う方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

4. ポケットベル通知の作業環境を設定します。ポケットベルで通知を行う管理者は、次のステップに従って実行します。

- a. コンソールの「システム」→「作業環境」→「通知」を選択します。
- b. ドロップダウン・リストからポケットベル・サービス・キャリアを選択します。このリストに表示されている内容は、Intelligent Agent マシンの PAGING.CFG ファイルで設定された内容に基づいています。
- c. 英数字のポケットベルの場合は、Pin 番号を入力します。数値ポケットベルの場合は、このフィールドは空白のままとします。
- d. 「テスト」をクリックしてポケットベル通知をテストします。

通知の作業環境を設定する方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

5. 管理者の通知スケジュールを設定します。ポケットベルで通知を行う管理者は、次のステップに従って実行します。

- a. コンソールの「システム」→「作業環境」→「スケジュール」を選択します。
- b. ポケットベルで通知を行うタイミングを選択します。ポケットベルで通知される日付や時刻を選択しない場合は、通知を受け取ることはできません。

通知のスケジュールを設定する方法は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

ポケットベル・サービスの状態の問合せ

ポケットベルの状態をチェックするには、キャリア名をマウスで右クリックし、ポップアップ・メニューの「ポケットベル・サービスへの Ping」項目にアクセスします。

ポケットベル・サービスの停止

NT サービスの「コントロールパネル」から、ポケットベル・サービスを停止します。

ポケットベル・サービスは、次のコマンドを入力しても停止できます。

```
oemctrl stop paging
```

数値ポケットベルのポケットベル状態コード

数値ポケットベルは、次のように解釈されます。

ジョブ通知の場合、6桁の数値を受信します。最初の3桁がジョブID、後の3桁がジョブの状態を示します。

イベント通知の場合、イベントIDと状態コードを受信します。

ジョブIDとイベントIDは内部番号のため、コンソールには表示されません。

イベントの状態コードおよびジョブの状態コードは、次のようになります。

100 = ジョブ実行中

200 = ジョブ完了

300 = ジョブ失敗

400 = ジョブ削除

500 = イベント消去

600 = イベント待機中

700 = イベント警告

800 = イベント・ノード停止

900 = イベント不明

1000 = イベントの受取先変更

ジョブIDがJJJの場合、

JJJ100 => job started for job# JJJ

JJJ200 => job completed for job# JJJ

JJJ300 => job failed for job# JJJ

たとえば、数値ポケットベルに001100と表示された場合は、ジョブID001が開始されたことを表します。001300と表示された場合は、ジョブID001が失敗したことを表します。

イベントIDがEEの場合、

EE500 => event cleared for event # EE

たとえば、7500が表示された場合は、イベント番号7の状態が変更されており、状態が消去されていることを表します。

Management Server 接続にダイヤルアップ回線を使用する場合のコンソールの構成

注意： Management Server または Intelligent Agent が稼動しているノードの Oracle Enterprise Manager では、DHCP はサポートしていません。クライアントでのみサポートされます。

コンソールの接続にダイヤルアップ回線を使用する場合は、コンソール・マシンで動的な IP アドレスが取得されます。この動的 IP アドレスは、オペレーティング・システム (Windows NT、Windows 95、Windows 98) によってアプリケーション (コンソール) に送信されます。

オペレーティング・システムが正しい IP アドレスを返すには、ネットワーク通信プロトコル (TCP-IP) を、Dynamic Host 構成プロトコル (DHCP) を使用して、IP アドレスが取得されるように構成する必要があります。この設定は、次のように指定します。

1. 「コントロールパネル」→「ネットワーク」を選択します。
2. 「プロトコル」を選択します。
3. 「TCP-IP プロトコル」→「プロパティ」を選択します。

重要： イーサネットを介して同じマシンをネットワークに接続するときに、設定を元に戻せるように、前の設定を控えておいてください。「IP アドレス」、「サブネットマスク」および「デフォルトゲートウェイ」で指定した設定は、ファイルにコピーしてください。

1. 「DHCP サーバーから IP アドレスを取得する」を選択します。
2. 変更を適用します。
3. マシンで取得した新しい動的 IP アドレスを使用して、listener.ora ファイルを構成します。次のエントリを追加します。

```
(ADDRESS=  
  (PROTOCOL= TCP)  
  (HOST= dynamic host name)  
  (Port= 1521)  
)
```

注意： リポジトリでダイヤルアップ回線を使用している場合は、listener.ora ファイルを構成する必要があります。

4. ダイヤルアップ回線を介して、ネットワークに接続します。これで、コンソールを起動できるようになりました。

注意： Web ブラウザから実行していない場合には、変更後、システムを再起動する必要があります。

バックアップまたは SYSDBA 管理のためのリモート・データベースの構成

バックアップ管理ウィザードを使用する前、または Oracle Enterprise Manager によってデータベースを停止する前に、リモート SYSDBA 管理のデータベースを設定する必要があります。

次の手順は、サーバーとクライアントが Database Configuration Assistant によってすでに実行されている場合に、サーバーとクライアントの両方で必要な処理の概要です。

追加情報： システムのパスワード・ファイル作成ユーティリティの正確な名前は、ご使用の Oracle データベースのオペレーティング・システム固有のドキュメントを参照してください。

サーバー側 (NT)

1. コマンド・プロンプトから、ORAPWD 実行ファイルを実行して、新規パスワード・ファイルを作成します。

```
$ORACLE_HOME/bin/orapwd file=<fname> password=<password> entries=<users>
```

ここで

fname はパスワード・ファイルの名前です (必須)。

password は、SYS のパスワードです (必須)。

entries は、異なる DBA および OPER の最大数です (オプション)。

等号 (=) の前後には空白を入れません。

<fname> は、Oracle_Home/Database ディレクトリに作成されます。

2. Oracle_Home/Admin/<SID>/pfile ディレクトリの init.ora ファイルを編集します。init.ora ファイルのパラメータ remote_login_passwordfile=exclusive を追加または変更します。
3. データベースを停止し、「コントロールパネル」→「サービス」で再起動します。
4. リモート DBA 操作を実行するユーザーに、SYSDBA または SYSOPER のロール (あるいはその両方) を付与します。

サーバー側 (UNIX)

1. ORACLE でログインし、ご使用の環境変数を設定します。

```
setenv ORACLE_HOME your_oracle_home  
setenv ORACLE_SID your_oracle_sid
```

注意： この例では、データベースを ORACLE として設定したものと想定しています。

2. Oracle ホームの dba ディレクトリに移ります。

```
cd $ORACLE_HOME/dba
```

3. ORAPWD 実行可能ファイルを実行して、新しいパスワード・ファイル \$ORACLE_HOME/bin/orapwd file=<fname> password=<password> entries=<users> を作成します。

fname はパスワード・ファイルの名前です (必須)。

password は、SYS のパスワードです (必須)。

entries は、異なる DBA および OPER の最大数です (オプション)。

等号 (=) の前後には空白を入れません。

<fname> は、\$Oracle_Home/dba ディレクトリに作成されます。

4. *init.ora* ファイルを編集します。 *init.ora* ファイルのパラメータ `remote_login_passwordfile=exclusive` を追加または変更します。
5. データベースをいったん停止してから再起動します。
 - a. SQL*Plus Worksheet を起動します。
 - b. SYSDBA ロールを持つユーザーとしてログインします。
 - c. 次のコマンドを入力します。

```
shutdown immediate
startup
```
6. リモート DBA 操作を実行するユーザーに、SYSDBA または SYSOPER のロール (あるいはその両方) を付与します。

リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへの移行

Oracle Enterprise Manager Migration Assistant では、Oracle Enterprise Manager と Oracle Enterprise Manager Management Pack のデータの移行をサポートしています。

この章では、リリース 1.x の複数のリポジトリ・スキーマを、リリース 2.1 の既存の 1 つの共有リポジトリ・スキーマに移行する方法について説明します。

注意： 移行の前に、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用してリリース 2.1 のリポジトリを作成しておく必要があります。移行は、リリース 1.x のリポジトリから、既存の 2.1 のリポジトリに対して行われます。

Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリ・スキーマは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 の共有リポジトリ・スキーマとは異なります。Enterprise Manager リリース 1.x では、各管理者が個別のリポジトリ・スキーマを持っており、そこにネットワーク内の現行のビューとユーザー固有の情報が格納されていました。Enterprise Manager リリース 2.1 では、1 つの共有リポジトリ・スキーマに、それぞれの管理者がアカウントを持ち、アカウントの中に作業環境が保存されています。

注意： リリース 1 のリポジトリがない場合は、この章を省略してください。

Migration Assistant では、リリース 2.1 の既存のリポジトリに対する次の情報の移行をサポートしています。

- 検出情報
- 優先接続情報リスト

- ジョブ情報
- イベント情報
- グループ

注意： Migration Assistant は Windows NT でのみ稼動します。

重要な注意

注意： 移行を開始する前に、データベースおよびリリース 1.x のリポジトリをバックアップして、移行が失敗した場合でも、現在の Oracle Enterprise Manager リリース 1.x の環境とリリース 2.1 の環境を確実に回復できるようにしておいてください。

注意： リリース 1.x のリポジトリをリリース 2.1 に完全に移行した後で、リリース 2.1 で操作を行うと、リリース 1.x のリポジトリでは操作できなくなります。リリース 2.1 へのリポジトリの移行で問題が発生した場合は、移行前のステップが完了しており、リリース 2.1 の環境で作業を開始していない場合のみ、リリース 1.x へロールバックできます。

移行の段階

リリース 1.x のリポジトリの移行の段階は、次のとおりです。

1. [リポジトリ移行の準備](#)
 - a. [リリース 2.1 の新しい管理者の作成](#)
 - b. [リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ](#)
 - c. [リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認](#)
 - d. [リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ](#)
2. [Migration Assistant を使用したリポジトリの移行](#)
3. [リリース 1.x のコンソールからのすべてのアクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除](#)
4. [移行成功の確認](#)

リリース 1.x とリリース 2.1 の違いが移行に与える影響

リポジトリを移行すると、リリース 1.x の既存のリポジトリは、いくつかの点で変更されません。

リリース 1.x のオブジェクトの包括的なリストとそれらのリリース 2.1 への移行の可否は、7-16 ページの「[リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス](#)」を参照してください。

リポジトリ

Oracle Enterprise Manager Migration Assistant は、リリース 1.6.5 のリポジトリをリリース 2.1 に移行します。リリース 1.6.5 より前のリポジトリで Oracle Enterprise Manager Migration Assistant を実行する場合は、まずリポジトリがリリース 1.6.5 にアップグレードされ、次にリリース 2.1 にアップグレードされます。Oracle Enterprise Manager では、リリース 1.2 以降のもののみがリリース 1.6.5 へのアップグレードでサポートされます。対象のリポジトリがリリース 1.6.5 より古い場合は、移行の後では、Oracle Enterprise Manager リリース 1.x では機能しなくなります。リポジトリを移行する前に、スキーマまたは表領域（あるいはその両方）をバックアップしておいてください。

優先接続情報リスト

ユーザー名、パスワードおよびロールが移行されます。リリース 1.x の複数のリポジトリを、リリース 2.1 の 1 人の管理者の 1 つのリポジトリに移行する場合には、リリース 1.x の複数のリポジトリに存在していたサービスに最初に移行された優先接続情報リストが、リリース 1.x のリポジトリから最初に移行される優先接続情報リストとなります。

グループ

リリース 1.x では、複数のジョブやイベントを 1 つのグループに登録することが可能で、登録されたものは、1 つのジョブやイベントとしてコンソールに表示されます。リリース 2.1 では、1 つのジョブまたはイベントを 1 つのグループに登録すると、コンソールには、そのジョブやイベントが登録されたサービスごとに、個別のジョブまたはイベント・オブジェクトが表示されます。リリース 1.x で 1 つのグループに登録されたジョブまたはイベントを、リリース 2.1 に移行すると、リリース 2.1 のコンソールには、そのジョブまたはイベントが登録されたグループのサービスごとに、個別のジョブまたはイベント・オブジェクトが表示されます。

ジョブ

- 修正ジョブ以外のアクティブ・ジョブと、リリース 2.1 の頻度制限内のアクティブ・ジョブのみが、Oracle Enterprise Manager のジョブ制御システムに自動的に発行されます。
- すでに NAME と名付けられたジョブがあるターゲット・データベースに同じ名前のジョブを移行すると、そのジョブは移行時に NAME(1) と名前が変更されます。すでに NAME(1) がある場合は NAME(2) というように、順次名前が変更されます。

バックアップ・ジョブ

リリース 1.x でバックアップ・ジョブの実行中に、そのデータを移行すると、ジョブはリリース 2.1 で tcl ジョブとして表示されます。**注意：** ジョブ・ライブラリ内のバックアップ・ジョブは、移行されません。Oracle Enterprise Manager コンソールでは、マネージャのバックアップ・ジョブと表領域のバックアップ・ジョブは異なります。

修正ジョブ

リリース 1.x の修正ジョブは、リリース 2.1 のジョブ・ライブラリに移行されますが、この移行は自動的に発行されません。リリース 2.1 の修正ジョブは、移行後に、リリース 2.1 のジョブ・ライブラリから手動で再発行する必要があります。リリース 1.x のイベントとそれに関連付けられたリリース 1.x の修正ジョブは分離され、リリース 2.1 のイベント・ライブラリとリリース 2.1 のジョブ・ライブラリに、それぞれ（発行されずに）格納されます。移行後に、リリース 2.1 のイベント・ライブラリでリリース 2.1 のイベントを編集し、リリース 2.1 で手動で再発行した修正ジョブにもう一度関連付ける必要があります。

イベント

- 修正ジョブに関連付けられていない登録済イベントと、リリース 2.1 の頻度制限内のイベントのみが、自動的に発行されます。
- すでに NAME と名付けられたイベントがあるターゲット・データベースに同じ名前のイベントを移行すると、そのイベントは移行時に NAME(1) と名前が変更されます。すでに NAME(1) がある場合は NAME(2) というように、順次名前が変更されます。
- 修正ジョブをイベントに関連付けるには、イベントの宛先タイプをリリース 2.1 と同じものにします。たとえば、リリース 1.x のイベントをサービス・タイプ「データベース」で作成し、それをリリース 1.x の修正ジョブに、サービス・タイプ「ノード」の「メッセージの配布」などで関連付けたとします。サービス・タイプの異なるリリース 1.x のイベントとリリース 1.x の修正ジョブは、関連付けて一緒に登録できます。リリース 2.1 では、イベントと修正ジョブを関連付けて一緒に登録するには、修正ジョブの宛先タイプと同じにする必要があります。

前述の例のように、イベントと修正ジョブを移行する場合は、リリース 1.x の修正ジョブで「類似作成」を実行し、このジョブのリリース 2.1 の宛先タイプを、リリース 2.1 のイベントと同じになるように変更してください。

イベント・セット

- リリース 1.x のアーキテクチャでは、検出されたサービスに登録されていた個別のイベントの集合をイベント・セットといいます。リリース 2.1 のアーキテクチャでは、イベントは、個別のテストの集合を表します。リリース 2.1 のイベントは、リリース 1.x のイベント・セットに類似しています。リリース 2.1 では、リリース 1.x の個々のイベントをテストといいます。それぞれのテストは、リリース 1.x のイベントと同じ機能や設定を持ち、イベントは、リリース 1.x のイベント・セットと同じように定義できます。リリース 1.x のイベント・セットを移行すると、イベント・セット内の各イベントは、リリース 2.1 に別のイベントとして移行されます。
- リリース 2.1 のイベントの場合、頻度、頻度の単位および修正ジョブがイベント（最上位）レベルに割り当てられます。これらの項目は、リリース 1.x ではイベント（下位）レベルに割り当てられていました。リリース 1.x のイベント・セットで、すべてのイベントについてこれらの項目が異なる場合は、各イベントは、リリース 2.1 の個別のイベントに移行されます。リリース 1.x のイベント・セットで、すべてのイベントについてこれらの項目が同じ場合は、リリース 1.x のイベント・セット全体が、リリース 2.1 の 1 つのイベントに移行されます。

頻度

リリース 2.1 のジョブとイベントに対する頻度のオプションは、リリース 1.x と異なります。リリース 1.x でのみサポートされており、リリース 2.1 ではサポートされていない頻度が定義されているジョブまたはイベントは、リリース 2.1 の環境でもう一度発行またはスケジューリングしてください。たとえば、次のようになります。リリース 2.1 のイベントでは、24 時間未満のポーリング間隔をサポートしています。リリース 1.x では、24 時間を越えるポーリング間隔もサポートしています。

Performance Manager/Capacity Planner

リリース 1.x の Performance Manager と Capacity Planner では、任意の数のリポジトリを、リリース 2.1 のリポジトリに移行できますが、それぞれリリース 2.1 の一意の管理者に関連付けられている必要があります。

Oracle Change Management Pack

- **注意：** Change Manager リリース 1.5.5 のリポジトリを移行する場合は、最初の移行プロセスとして、移行前に、リポジトリがリリース 1.6.5 にアップグレードされます。このアップグレードは元に戻すことはできません。このリポジトリで Change Manager リリース 1.5.5 は使用できなくなります。したがって、Change Manager リリース 1.5.5 でリリース 1.5.5 リポジトリを継続して使用するには、リリース 1.5.5 のリポジトリをバックアップし、移行後に復元します。
- Oracle Change Management Pack リリース 1.x のそれぞれのリポジトリは、リリース 2.1 のリポジトリの中で、どの管理者についても変更計画やベースラインがないものに移行する必要があります。管理者に変更の計画またはベースラインがある場合は、Change Management Pack リリース 1.x のリポジトリを移行する前に、その計画またはベースラインを削除してください。削除しないと、Change Management Pack の移行は失敗します。この場合には、`sysman\temp\vobmgr.log` ファイルに、リリース 2.1 のリポジトリの中で、削除する必要がある計画またはベースラインがどの管理者に定義されているのかを示すメッセージが含まれます。変更計画の削除には Plan Manager を、基準の削除には DB Capture を使用します。

Expert

Oracle Expert リリース 1.x のリポジトリの表は、Oracle Expert チューニング・セッションのエクスポートおよびインポートの方法を使用して、リリース 2.1 のリポジトリに移行されます。リリース 1.x のリポジトリにあるすべてのデータベースのチューニング・セッションは、すべて（データベースに対して 1 つの）.xdl ファイルにエクスポートされ、リリース 2.1 の選択された Oracle Enterprise Manager ユーザーのリポジトリにインポートされます。

ポケットベル・サービス

- リリース 1.x ユーザーのスケジュール情報は、リリース 2.1 の管理者に移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.1 の環境でポケットベルの新しいスケジュールを定義する必要があります。
- ポケットベルの構成情報は、リリース 2.1 には移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.1 の環境でポケットベルの新しい構成情報を定義する必要があります。

電子メール・サービス

- リリース 1.x ユーザーのスケジュール情報は、リリース 2.1 の管理者に移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.1 の環境で電子メールの新しいスケジュールを定義する必要があります。
- 電子メールの構成情報は、リリース 2.1 には移行されません。それぞれのユーザーは、リリース 2.1 の環境で電子メールの新しい構成情報を定義する必要があります。

リポジトリ移行の準備

移行を成功させるためには、次の手順を完了してください。

- Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 をインストールします。詳細は、対象のデータベース・リリースのインストレーション・ガイドを参照してください。
- リリース 2.1 の新しい管理者の作成。
- リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ。
- リリース 1.x のコンソールとリリース 2.1 の Management Server の停止。
- リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認。
- リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ。

リリース 2.1 の新しい管理者の作成

Migration Assistant を使用して、リリース 1.x の 1 つのリポジトリを、リリース 2.1 の 1 つのリポジトリへ移行することも、リリース 1.x の複数のリポジトリをリリース 2.1 の 1 つのリポジトリへ移行することもできます。

いずれの場合も、最初に新しい管理者を作成し、リリース 1.x のリポジトリ情報が、管理者のリリース 2.1 のアカウントに移行されるようにします。

各 Enterprise Manager 管理者は、そのリポジトリ・データベース・アカウントでは、個別のユーザーです。

注意： リリース 2.1 の新しい管理者を作成しない場合は、移行オブジェクトは、すべて SYSMAN アカウントに移行されます。SYSMAN アカウントは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 をインストールすると提供される、デフォルトのスーパー管理者アカウントです。

新規管理者を作成するには、次の手順に従ってください。

1. Management Server を起動します。

Management Server 起動の詳細は、第3章「Management Server の管理」を参照してください。

2. SYSMAN アカウントを使用して、Oracle Enterprise Manager コンソールのリリース 2.1 にログインします。Enterprise Manager コンソール起動の詳細は、第6章「コンソールの設定」を参照してください。
3. コンソールの「システム」メニューから、「管理者の管理」を選択します。「管理者の管理」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「管理者の管理」ダイアログ・ボックスの「追加」ボタンをクリックします。「管理者アカウントの作成」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. Enterprise Manager 管理者の一意のユーザー名とパスワードを入力し、その管理者に使用可能なアクセス権を確認します。

Enterprise Manager 管理者の管理の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』第2章を参照してください。

リリース 1.x のコンソールの全サービスのリフレッシュ

移行前に、移行に必要なサービスがすべて、リリース 1.x のコンソールによって正常にリフレッシュされていることを確認してください。

リフレッシュされなかったサービスは、移行できません。

リリース 1.x のコンソールとリリース 2.1 の Management Server の停止

リリース 1.x のコンソールと Management Server が稼動している場合は、停止してください。リモート Agent は実行されたまま、既存のキュー・ファイルはそのまま残ります。

リリース 1.x の現在のリポジトリの情報確認

移行の際に情報が消失しないように、リリース 1.x のリポジトリの現在の情報を確認してください。この情報は、リリース 2.1 へ移行した後に情報が現在のものであるかどうかを確認するために使用します。

リリース 1.x リポジトリでは、次の情報を確認してください。

1. 検出情報について、リリース 1.x の環境で検出されたホストとサービスの数をカウントします。
2. 最低 1 つのノードの接続情報を参照します。
3. ジョブ情報については、注意すべき関連情報として次のものがあります。
 - ジョブ数
 - ジョブのタイプ

- ジョブの状態
 - ジョブの履歴情報
4. イベント情報については、次のような関連情報に注意してください。
- イベント・グループ数
 - 各グループ内のイベント数
 - 各グループが登録されているノード
 - イベントの現在の状態

リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ

移行中に予期せぬエラーが発生した場合、Migration Assistant では自動リカバリはサポートされていません。リリース 1.x のリポジトリとリリース 2.1 のリポジトリをバックアップし、移行が失敗した場合でも、現在の Oracle Enterprise Manager リリース 1.x の環境とリリース 2.1 の環境を確実に回復できるようにしておいてください。

注意： SYS ユーザーで作成したリポジトリは、エクスポートできません。

リポジトリのバックアップには、Enterprise Manager のエクスポート・ウィザード、または Oracle データベース・サーバーに同梱されている基本ユーティリティ、EXPORT ユーティリティのどちらを使用してもかまいません。データ管理の各種ウィザード使用の詳細は、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

次の例は、Oracle 8.0 サーバーが 1 つ稼動している NT 環境のものです。

```
exp user/password@service owner=oemv1schema file=oemv1.dmp
```

ここで、USER は移行する Oracle Enterprise Manager リポジトリのユーザー名、PASSWORD はそのユーザーのパスワードです。

この例では、保存されたリポジトリは、oemv1.dmp に書き込まれます。

エクスポートの終了時には、エクスポートが無事完了したかどうかを知らせる次のメッセージが表示されます。

```
Export terminated successfully without warnings.
```

エクスポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle8i ユーティリティ・ガイド』を参照してください。

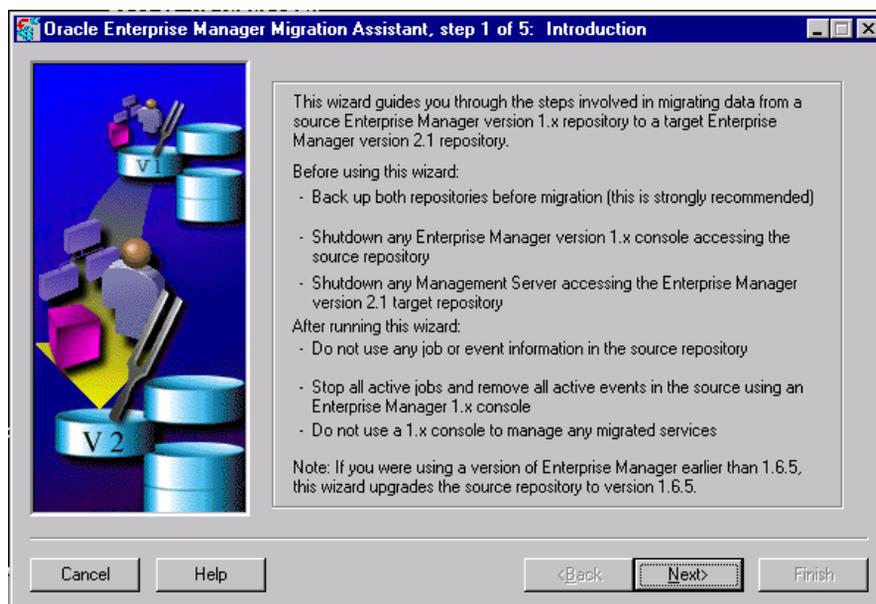
Migration Assistant を使用したリポジトリの移行

移行対象のリリース 1.x の Oracle Enterprise Manager の環境のそれぞれのデータベースの指示に従ってください。

Windows NT の「スタート」メニューから、Enterprise Manager Migration Assistant を起動します。

ステップ1「イントロダクション」

Migration Assistant を起動すると、「イントロダクション」ページが現れ、Migration Assistant の目的と、移行を成功させるために必要な前提条件についての重要情報が表示されます。



概要を読み、「次」を押して操作を続けます。

1つ以上の Management Pack がインストールされている場合は、7-10 ページの「ステップ2「コンポーネントの選択」」に進んでください。

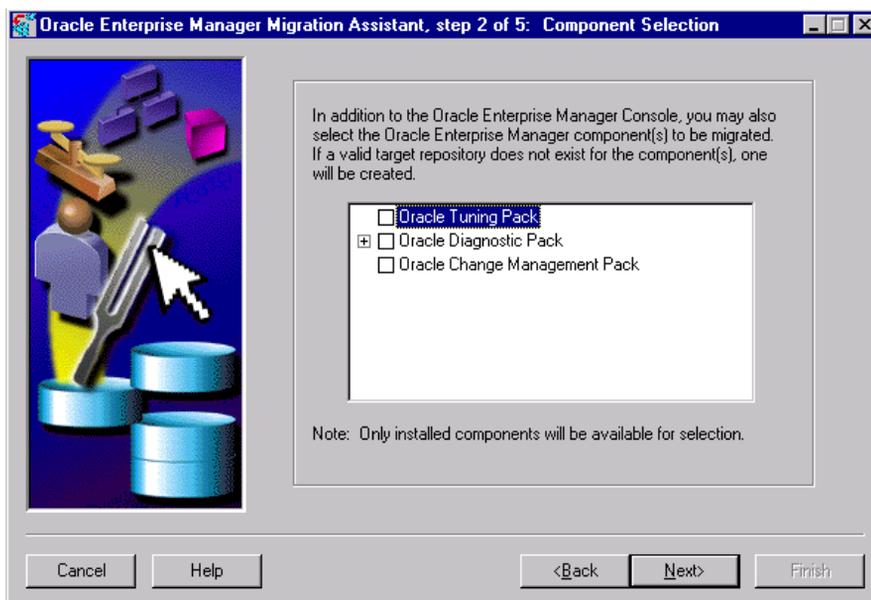
Management Pack がインストールされていない場合は、7-11 ページの「ステップ3「ソース・リポジトリ・ログイン」」に進んでください。

ステップ 2 「コンポーネントの選択」

注意： 1つ以上の Management Pack がインストールされている場合にのみ、「コンポーネントの選択」 ページが現れます。

移行するリポジトリ・コンポーネントを選択します。

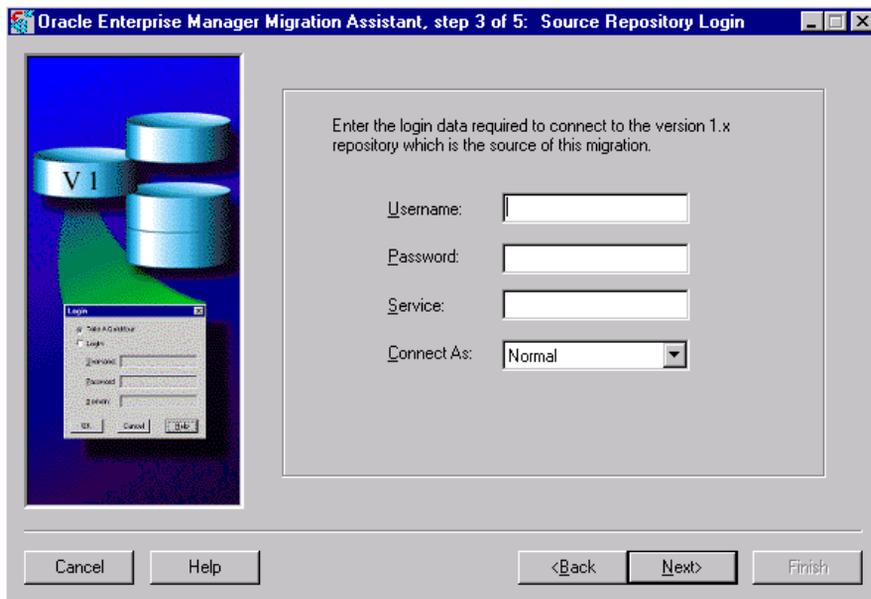
選択できるのはインストールされているコンポーネントのみです。コンポーネントに有効なターゲット・リポジトリがない場合は、1つ作成されます。



選択が終了したら、「次」を押して操作を続けます。

ステップ3 「ソース・リポジトリ・ログイン」

リリース 1.x のリポジトリが格納されているデータベースにログインします。



ユーザー名とパスワード： リリース 1.x のリポジトリが格納されているデータベースの有効なユーザー名を指定します。

サービス： 標準の SQL*Net リリース 2 または Net8 の構文を使用します。サービス名は、tnsnames.ora ファイルに示されるとおりのデータベース名です。

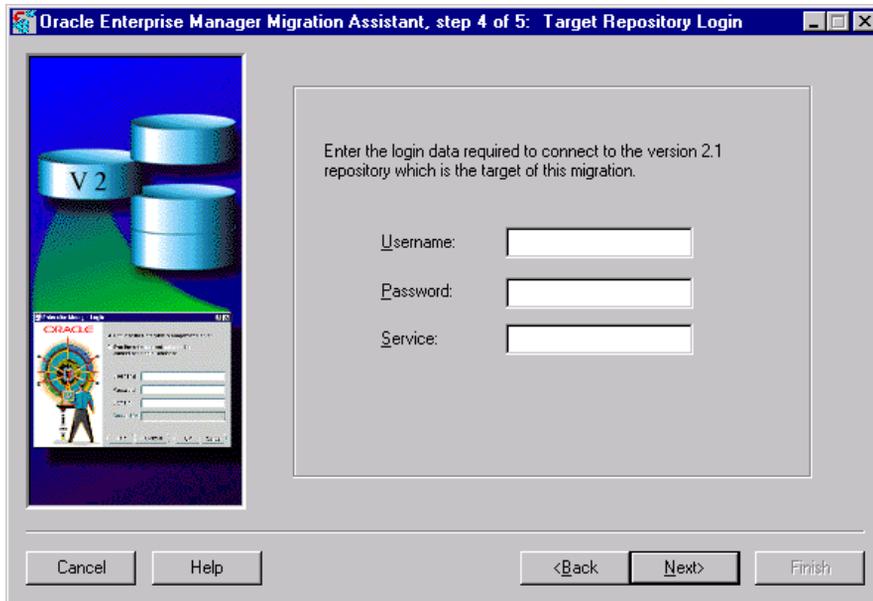
接続モード： 「標準」で接続します。

「次」を押して、操作を続けます。

入力した情報が有効で、これに該当する有効なリリース 1.x のリポジトリが存在する場合は、7-11 ページの「ステップ4 「ターゲット・リポジトリ・ログイン」」に進みます。

ステップ4 「ターゲット・リポジトリ・ログイン」

リリース 2.1 の新しいリポジトリに対するユーザー名、パスワードおよびサービス名を入力します。



ユーザー名とパスワード： Oracle Enterprise Manager のユーザー名は、リリース 2.1 のリポジトリを作成したユーザー名と同じものを使用してください。つまり、ユーザー名とパスワードは、リポジトリ・スキーマの所有者の接続情報となります。Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のリポジトリは、Oracle データベース・スキーマです。ユーザー名とパスワードは、Oracle Enterprise Manager のユーザー・ログイン時のものではありません。

サービス： 標準の SQL*Net リリース 2 または Net8 の構文を使用します。サービス名は、tnsnames.ora ファイルに示されるとおりのデータベース名です。

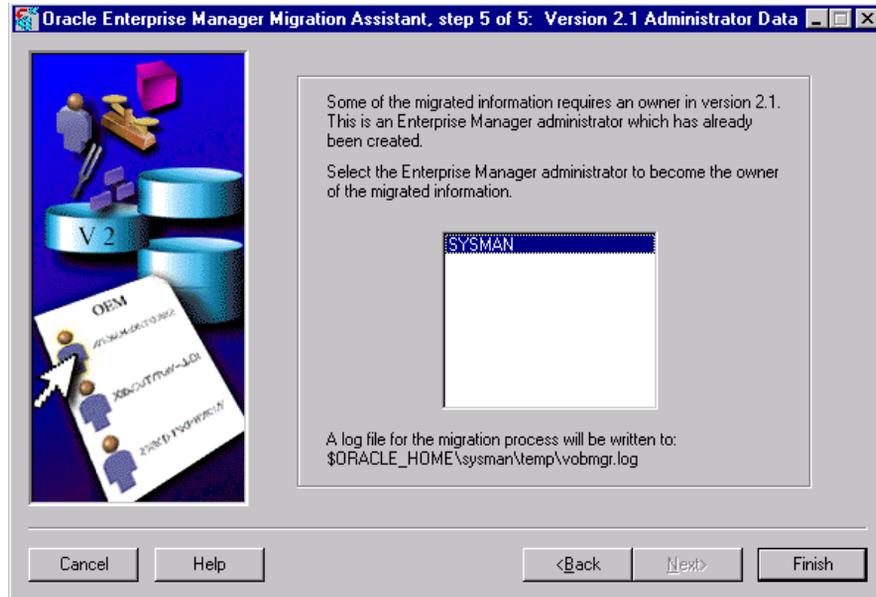
「次」を押して、操作を続けます。

リリース 2.1 の有効なリポジトリに対して、有効なリポジトリ名、パスワードおよびサービスを入力した場合は、7-12 ページの「ステップ 5 「管理者データ」」へ進みます。Oracle Enterprise Manager Migration Assistant では、移行する情報がリリース 2.1 のリポジトリにすでに存在しているかどうか、情報の書式がリリース 1.x の書式と異なるかどうか、この情報がどのように変換されたか、ダイアログ・ボックスによって通知されます。

ステップ 5 「管理者データ」

リリース 2.1 で情報の移行先となる管理者を指定します。

注意： リリース 2.1 で新しい管理者を作成していない場合は、移行オブジェクトはすべて、SYSMAN 管理者アカウントに移行されます。



「終了」をクリックして移行プロセスを開始するか、「前」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

進行中の作業

「進行中の作業」ウィンドウが現れ、作業の進捗状況が知らされます。「進行中の作業」ウィンドウの情報は、`%oracle_home%\sysman\temp` ディレクトリにある `vobmgr.log` ファイルにすべて記録されます。

注意：（インストールした後に使用していない）Change Management Pack アプリケーションによってリリース 1.x のリポジトリを移行すると、Change Management のオブジェクトによって、リリース 2.1 の新しいリポジトリが自動的に作成されます。

リリース 1.x のコンソールからのすべてのアクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除

リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.1 環境のリポジトリへ移行するには、調整が必要です。移行プロセスには、リリース 1.x のアクティブなジョブとイベントをすべて手動で削除および登録解除するプロセスが含まれます。

リリース 1.x のリポジトリで定義されたジョブとイベントの情報は、リリース 2.1 のリポジトリにコピーされます。

リポジトリの移行を実行したら、次の手順に従ってください。

1. リリース 1.x のコンソールを起動し、移行されたリリース 1.x のリポジトリに接続します。
2. アクティブなジョブとイベントをすべて、手動で削除または登録解除します。アクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除を行わないと、その Agent で実行されるジョブに重複が生じる可能性があります。イベントは「not unique」エラーのために、登録に失敗します。

注意： Management Server を起動する前に、情報を移行し、リリース 1.x のコンソールを起動せずに、ジョブおよびイベントを削除すると、最初の起動時に、イベントの登録とジョブの発行が試行されます。ジョブは登録されますが、イベントは、リリース 1.x のコンソールからすでに登録されているため、失敗することがあります (Intelligent Agent のイベントの一意性に対する制約)。

コンソールでは失敗したことが表示されます。リリース 1.x のイベントを登録解除し、リリース 2.1 のコンソールで、失敗したイベント登録から「類似作成」を使用して、再登録を行います。

3. リリース 1.x のコンソールを停止します。
4. Management Server を起動します。

注意： リリース 1.x のそれぞれのリポジトリを、リリース 2.1 の 1 つのリポジトリへ移行するには、同じステップを繰り返します。

移行成功の確認

Migration Assistant によって、リリース 1.x のリポジトリ情報が、リリース 2.1 の指定された管理者に移行された後、その管理者でリリース 2.1 のコンソールにログインして移行を確認します。

検出、優先接続情報リスト、ジョブおよびイベント情報の移行成功をチェックして、リポジトリの移行後にすべての情報があることを確認してください。

1. 検出情報について、移行後にコンソールのナビゲータに、ホストとサービスが表示されていることを確認します。

注意： Migration Assistant は、手動で検出された対象は移行しません。

2. 移行された接続情報を使用してデータベースにアクセスするために、リリース 2.1 のコンソールのナビゲータで、最低 1 つのノードの接続情報が表示されるようにします。

注意： リリース 2.1 のコンソールで、移行されたサービス名と、リリース 1.x のコンソールで使用された接続情報の表に格納されているサービス名が一致しない場合は、移行後にリリース 2.1 のコンソールを使用して、関連するサービスに対して優先接続情報リストを再入力してください。

3. ジョブ情報については、チェックすべき関連情報として、ジョブ数、ジョブのタイプ、ジョブの状態、および関連のジョブ履歴情報があります。リリース 1.x のジョブの中には、リリース 2.1 に移行されないタスクが含まれているものもあります。これらのジョブについても考慮する必要があります。移行されないジョブ・タスクの情報は、7-16 ページの「[リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス](#)」を参照してください。
4. イベント情報については、注意すべき関連情報として、イベント数、各イベント内のテスト数、各グループが登録されているノード、およびイベントの現在の状態があります。移行されないイベント・テストの情報は、7-16 ページの「[リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス](#)」を参照してください。
5. 正常に移行された Performance Manager の記録とユーザー定義のグラフの数については、移行ログ・ファイル、`sysman¥temp¥vobmgr.log` を確認します。
6. Oracle Expert 移行プロセスの情報は、`sysman¥temp¥vobmgr.log` ファイルと、さらに詳細な `sysman¥temp¥xpomigr.log` ファイルを調べます。
7. Change Management については、リリース 1.x の Plan Manager と DB Capture のベースラインと変更計画の数をカウントし、リリース 2.1 に移行された数と比較する必要があります。

移行の取消し

移行中に予期せぬ問題が発生した場合、Oracle Enterprise Manager 環境を前の状態に復元しなければならないことがあります。Oracle Enterprise Manager 環境を復元するには、次のようにします。

1. DBA Studio の Security Management を使用して、リリース 1.x のリポジトリ・ユーザーを削除します。Security Management の詳細は、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。
2. インポート・ウィザードまたは IMPORT ユーティリティ (Oracle データベース・サーバーに付随している基本ユーティリティ) を使用して、リリース 1.x で保存されているリポジトリ・ユーザーをインポートします。ユーザーは、インポート時に再作成されます。インポート・ウィザードの使用の詳細は、Oracle Enterprise Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。次の例では、IMPORT ユーティリティを使用します。

```
imp user/password@service file=oemv1.dmp
```

スキーマをインポートすると、リリース 1.x のリポジトリが移行前の状態で再作成されます。

注意： ジョブとイベントが登録解除されている場合は、再登録する必要があります。

インポート・ユーティリティの詳細は、『Oracle8i ユーティリティ・ガイド』を参照してください。

リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス

リリース 1.x のオブジェクトの包括的なリストとそれらのリリース 2.1 への移行の可否は、次の項を参照してください。

リリース 2.1 へ移行されるリリース 1.x のオブジェクト

リリース 1.x の次のオブジェクトは、リリース 2.1 へ移行できます。

優先接続情報リスト

ユーザー名、パスワードおよびロールが移行されます。リリース 1.x の複数のリポジトリを、リリース 2.1 の 1 人の管理者の 1 つのリポジトリに移行する場合には、リリース 1.x の複数のリポジトリに存在していたサービスに最初に移行された優先接続情報リストが、リリース 1.x のリポジトリから最初に移行される優先接続情報リストとなります。

サービス

データベース、ノードおよびリスナーは、最後の検出およびリフレッシュの状態が成功であれば、移行されています。

グループ: リリース 1.x では、ジョブとイベントは 1 つのオブジェクトとしてグループに登録されます。リリース 1.x のグループに 1 つのジョブまたはイベントが登録されている場合は、そのジョブまたはイベントが登録されているサービスごとに個別のジョブまたはイベントが作成され、リリース 2.1 に移行されます。

グループは論理エンティティとして移行されないため、ジョブまたはイベントはグループには移行されません。リリース 2.1 にはグループはありません。リリース 1.x のすべてのグループ・メンバーは、リリース 2.1 に個別に移行されます。リリース 2.1 でグループを再作成し、移行されたメンバーをもう一度追加する必要があります。

ジョブ

DBA スクリプトの実行	データベースの起動	TCL の実行
SQL*Plus の実行	メッセージの配布	リスナーの停止
データベースの停止	OS コマンドの実行	リスナーの起動

修正ジョブ

すべてのスケジュール情報	優先接続情報リストの上書き	ジョブ履歴
従属ジョブ	ジョブ・ライブラリ	アクティブ・ジョブ

イベント

警告	プローブ	動作・停止 (データベース)	バッファ・キャッシュ
データ・ディクショナリ・キャッシュ	ディスク I/O	ライブラリ・キャッシュ	ネット I/O
SysStat 表	SysStat 表デルタ	データファイル制限	ロック制限
プロセス制限	セッション制限	ユーザー制限	アーカイブ満杯
小容量	ダンプ満杯	最大エクステント	ユーザー・ブロック
連鎖行	動作・停止 (リスナー /SQL*Net)	動作・停止 (ノード)	CPU ページング率
CPU 使用率	ディスク満杯	スワップ満杯	アーカイバの停止
中断したジョブ	データ・ブロック破壊	遅延トランザクション	エラー・トランザクション
失敗したジョブ	セッション終了	スケジュール解除されたジョブ	空きバッファ

メモリー・ソート	索引再作成	REDO ログ割当て	ロールバック競合
警告ファイル過大	セグメントの高速拡張	複数エクステンツ	スナップショット・ログ 満杯
表領域満杯	ユーザー監査	Data Gatherer 警告	Data Gatherer 動作・停止

その他

イベント・セット・ライブラリ	登録	サードパーティ・イベント
トリガー・イベントに関連付けられた修正ジョブ	頻度	バック・リポジトリ

再作成が必要なリリース 1.x のオブジェクト

次のオブジェクトは、再作成する必要があります。

ジョブ

Oracle Enterprise Manager ジョブ	エクスポート
からの表領域のバックアップ	
インポート	ロード

その他

SNMP トラップ	ポケットベル・サービス	電子メール・サービス
管理者リスト	手動で検出されたターゲット	

使用不可になるリリース 1.x のオブジェクト

リリース 1.x の次のオブジェクトは、リリース 2.1 では使用できません。

ジョブ

製品のアンインストール	パッケージの削除
パッケージの配布	パッケージのインストール

イベント

Rdb データベース・イベント	Rdb サービス・イベント
イベント履歴	未処理のイベント

その他
マップ

DBA Studio の設定

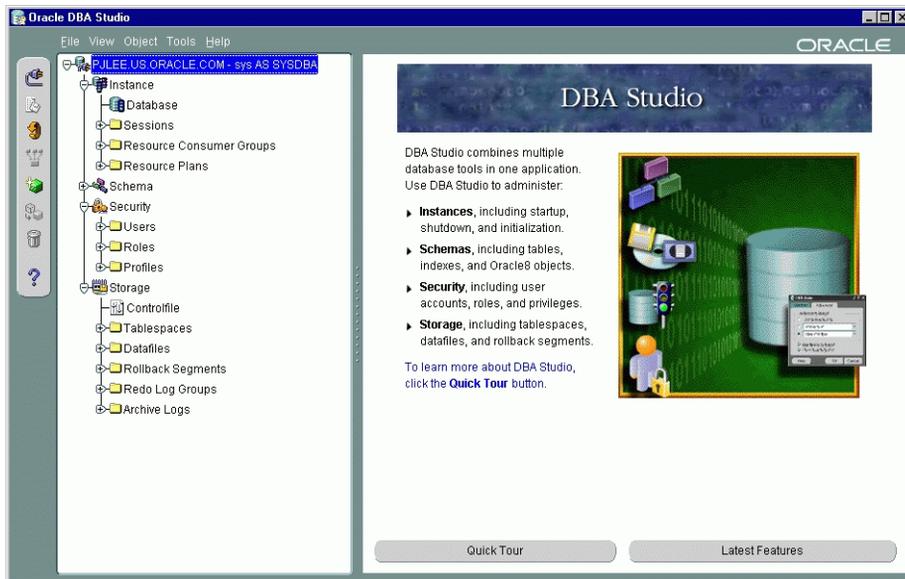
DBA Management Pack の中心機能は、DBA Studio と SQL*Plus Worksheet です。

DBA Studio は、複数のデータベース・ツールとマスター・ビューの詳細を組み合わせて、次のツールからデータベース管理者の機能にアクセスし、複数のデータベースを管理できるようにします。

- Instance Management: データベースの起動または停止、データベースの初期化パラメータの編集、リソースの割当てとユーザー・セッションの管理を行います。
- Security Management: ユーザー、権限およびプロファイルを管理します。
- Schema Management: スキーマ・オブジェクトの作成、編集および調査を行います。
- Storage Management: 表領域、データファイル、ロールバック・セグメントおよび REDO ログを管理します。制御ファイルとアーカイブ・ログ情報も参照できます。

Enterprise Manager の以前のリリースでは、個別のデータベース・ツール (Instance Manager、Schema Manager、Storage Manager および Security Manager) を使用して、前述の機能を実現していました。統合された DBA Studio を使用するかわりに、これらの個別のツールを引き続き使用する場合は、対象のデータベース・リリースのインストール・ガイドで、インストールの際の指示を参照してください。

DBA Studio を使用して、データベース管理タスクを実行します。Oracle データベースのリリースは、7.3.4 までサポートできます。分析、バックアップ管理、ディメンション作成、サマリー・アドバイザ、表作成、ビュー作成などのウィザードも使用できます。



この章の内容は、次のとおりです。

- スタンドアロンまたは Management Server モードの DBA Studio
- スタンドアロン・モードの DBA Studio の設定
- OMS モードの DBA Studio の設定
- DBA Studio のその他の手順

スタンドアロンまたは Management Server モードの DBA Studio

DBA Studio を起動する際には、データベースに直接接続することも（スタンドアロン・モード）、Oracle Management Server を介してデータベースに接続することも（OMS モード）できます。

データベースへの直接接続

ジョブ、イベント、グループ・システムを必要としない基本的な管理タスクを実行する場合は、DBA Studio をスタンドアロン・モードで実行します。スタンドアロン・モードで接続すると、DBA Studio は、データベースのローカル・レコードに設定したデータベースにアクセスできるようになります。

注意： データベースに直接接続された DBA Studio（スタンドアロン・モード）のみを実行する場合は、Management Server とリポジトリは必要ありません。

Oracle Management Server による接続

次の場合には、DBA Studio を OMS モードで実行します。

- Oracle Enterprise Manager のフレームワークを使用する場合
- イベントやグループが必要な基本的な管理タスクを実行する場合
- コンソールで以前に検出されたすべてのデータベースにアクセスする場合
- Web ブラウザを使用して DBA Studio を実行する場合
- 分析ウィザード、バックアップ・ウィザード、データ管理ウィザードを使用する場合

Oracle Management Server に接続すると、DBA Studio は、検出されたノードのすべてのデータベースにアクセスできるようになります。DBA Studio を接続するには、Oracle Management Server が稼動している必要があります。

スタンドアロン・モードの DBA Studio の設定

DBA Studio をスタンドアロン・モードで実行する場合は、Oracle Enterprise Manager またはリポジトリを設定する必要はありません。

DBA Studio をスタンドアロン・モードで設定するには、次の作業を実行します。

- DBA Studio の起動
- DBA Studio のナビゲータ・ツリーヘネット・サービス名（管理対象のデータベース）を追加
- データベースへの接続
- 必要な場合は、ローカルの優先接続情報リストの設定

スタンドアロン・モードでの DBA Studio の起動

1. DBA Studio を起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「DBA Management Pack」→「DBA Studio」
を選択して、DBA Studio を起動できます。

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動することもできます。

```
oemapp dbastudio
```

- UNIX の場合

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

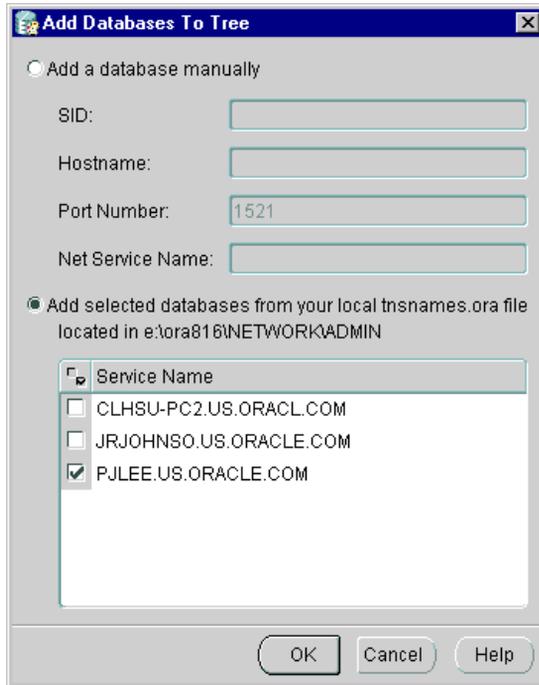
```
oemapp dbastudio
```

2. ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」を選択し、「OK」をクリックします。

DBA Studio を最初に起動した時点では、管理対象のデータベースが追加されていないため、DBA Studio の左側のパネルには何も表示されません。「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスが自動的に表示され、ここでナビゲータ・ツリーにデータベースを追加できます。

スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーにデータベースを追加

DBA Studio を最初に起動すると、「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスが自動的に表示されます。このダイアログ・ボックスは、「ファイル」メニューからも選択できます。



「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスを使用して、ネット・サービス名を手動で入力することも、ローカルの tnsnames.ora ファイルから追加することもできます。

手動によるデータベースの追加

次のフィールドに情報を指定して、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに手動でデータベースを追加できます。

- SID: データベース・システムの識別子で、通常は ORCL などのインスタンス名。
- ホスト名: データベースが格納されているマシン名またはノード名。
- ポート番号: データベース・リスナーのポート・アドレスで、通常は 1521 または 1526。
- ネット・サービス名: マシンに接続した際に、データベースを一意に識別する名前。通常はグローバル・データベース名です。たとえば、ORCL.world と指定します。

注意: データベースを手動で追加すると、
<Oracle_Enterprise_Manager_Home>/network/admin ディレクトリ
の tnsnames.ora ファイルが自動的に更新されます。

注意： 現在、手動で入力できるのは、TCP/IP サービス名のみです。

選択したデータベースをローカル tnsnames.ora ファイルから追加

Oracle Enterprise Manager ホームのローカル tnsnames.ora ファイルからデータベース・サービス名を読み込み、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに移入できます。「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスには、tnsnames.ora ファイルに保存されているデータベースがリスト表示され、ここでデータベースを選択または選択解除できます。「サービス名」の左側の列ヘッダーをクリックし、すべてのデータベースを選択または選択解除します。すべてのデータベースを選択解除した場合は、チェックボックスでデータベースを個別に選択できます。

注意： tnsnames.ora ファイルから選択したサービスをインポートする場合には、すべてのプロトコルがサポートされます。

スタンドアロン・モードの DBA Studio でデータベースへ接続

DBA Studio でデータベースに接続するには、次の 4 通りの方法があります。

- DBA Studio のナビゲータ・ツリーのコンテナの隣にあるプラス記号をクリックします。
- DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのアイコンをダブルクリックします。
- 「ファイル」メニューの「接続」を選択します。
- ツールバーの「接続」アイコンをクリックします。

「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスで、次の情報を指定してデータベースに接続します。

ユーザー名

接続するデータベースに対する Oracle ユーザー名を指定します。

たとえば、system と指定します。

パスワード

接続するデータベースに対する Oracle パスワードを指定します。

たとえば、manager と指定します。

サービス

接続するデータベースに対するネットワーク・サービス名を指定します。

たとえば、orcl.pjlee-pc などの Net8 のサービス名を使用します。これによって、pjlee.us.oracle.com マシンの orcl データベースに接続します。

接続モード

プルダウン・リストから、「NORMAL」、「SYSOPER」または「SYSDBA」のどの権限でデータベースに接続するかを選択できます。一般ユーザーとしてデータベースに接続する場合は、NORMAL を選択します。データベースの停止や起動など、特別な処理権限でデータベースに接続する場合は、SYSOPER を選択します。ユーザーに任意の権限を付与するなど、対象データベースに対してすべての権限を持つユーザーとしてデータベースに接続する場合は、SYSDBA を選択します。

SYSOPER 権限と SYSDBA 権限を使用するには、パスワード・ファイルまたは OS グループの認証を作成し、データベースに設定する必要があります。

ローカル優先接続情報リストとして保存

優先接続情報リストを保存するオプションも用意されており、これを使用して、ユーザー名、パスワード、ロール (NORMAL、SYSOPER または SYSDBA) などのログイン情報をローカル・ファイルに保存できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。

データベースへの接続が確立したときに、そのつどユーザー名とパスワードを入力するのではなく、かわりにこのログイン情報が使用されます。

「ローカル優先接続情報リストとして保存」チェックボックスを選択するか、「ファイル」メニューから「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスを使用して、優先接続情報リストを設定できます。

このチェックボックスはデフォルトで選択されています。

スタンドアロン・モードの DBA Studio のローカル優先接続情報リストの編集

優先接続情報リストを保存または編集するオプションも用意されており、これによって、ユーザー名、パスワード、ロール (NORMAL、SYSOPER または SYSDBA) などのログイン情報を格納できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。

注意： 他のマシンからファイルを使用されないようにするために、パスワードは暗号化されてローカル・ファイルに保存されます。

データベースへの接続が確立したときに、そのつどユーザー名とパスワードを入力するのではなく、かわりにこのログイン情報が使用されます。

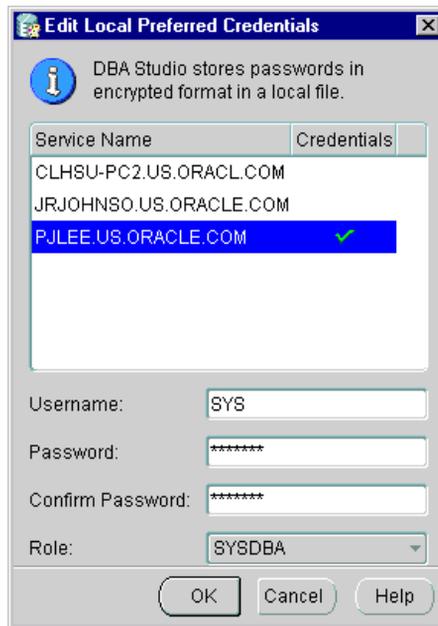
DBA Studio には、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに表示されるデータベースのリストが格納されています。これらのデータベースのいずれかの優先接続情報リストが指定されると、ユーザー名、暗号化されたパスワードおよびロールが、ローカル・ファイルに追加されます。

DBA Studio は、ログイン接続情報のローカル・レコードを、Oracle Management Server から個別に更新します。

注意： ローカルの優先接続情報リストを編集できない場合は、DBA Studio がスタンドアロン・モードになっているかどうかを確認してください。

サービスのローカル優先接続情報リストを保存または編集するには、次のステップを実行します。

1. 「ファイル」メニューの「ローカル優先接続情報リストの編集」を選択します。「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスに、サービスのリストが表示されます。



2. 「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスで、データベースのサービス名を選択し、データベースに接続するための接続情報を入力または更新します。
 - ユーザー名： ユーザー名を入力します。パスワードが入力されている場合は、このフィールドは必須です。
 - パスワード： パスワードを入力します。データベースへの接続時にパスワードを入力するように要求されない場合は、このフィールドは空白のままかまいません。
 - パスワード確認： パスワードを再入力します。

- ロール: プルダウン・リストからロールを選択します。データベースを起動または停止するには、SYSDBA または SYSOPER のロールでログインする必要があります。
3. 「ローカル優先接続情報リストの編集」ダイアログ・ボックスで「OK」ボタンをクリックし、更新した内容を保存します。

注意: 「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスで「ローカル優先接続情報リストとして保存」チェックボックスを選択し、優先接続情報リストを保存または上書きできます。

OMS モードの DBA Studio の設定

DBA Studio を OMS モードで実行するには、事前にリポジトリと Management Server を設定し、分散サービスが定義されているノードで Intelligent Agent を起動しておく必要があります。

DBA Studio を OMS モードで設定するには、次の作業を実行します。

- Management Server へ接続するための DBA Studio の設定
- DBA Studio の起動
- データベースへの接続

Management Server へ接続するための DBA Studio の設定

Oracle Management Server へ接続するための DBA Studio を設定するには、次の指示に従ってください。

1. 管理対象のノードで Oracle Intelligent Agent が起動されていることを確認します。Intelligent Agent の起動の詳細は、[第 5 章「Intelligent Agent の起動」](#)を参照してください。
2. Oracle Management Server が起動されていることを確認します。リポジトリおよび Management Server の設定の詳細は、[第 2 章「リリース 2.1 のリポジトリの作成」](#)を参照してください。Management Server の起動の詳細は、[第 3 章「Management Server の管理」](#)を参照してください。
3. コンソールを起動します。コンソールの起動の詳細は、[第 6 章「コンソールの設定」](#)を参照してください。

検出ウィザードを使用して、対象のデータベースが保存されているノードを検出します。ノード検出の詳細は、[第 6 章「コンソールの設定」](#)を参照してください。DBA Studio は、検出されたデータベースにアクセスできるようになります。

注意： Oracle Management Server に接続されている DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加する場合は、Oracle Enterprise Manager コンソールから検出ウィザードを使用してください。ナビゲータ・ツリーには、リポジトリからデータベースが移入されます。これは DBA Studio で変更することはできません。

4. Oracle Enterprise Manager コンソールを終了します。

OMS モードでの DBA Studio の起動

1. DBA Studio を起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「DBA Management Pack」→「DBA Studio」を選択して、DBA Studio を起動できます。

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動することもできます。

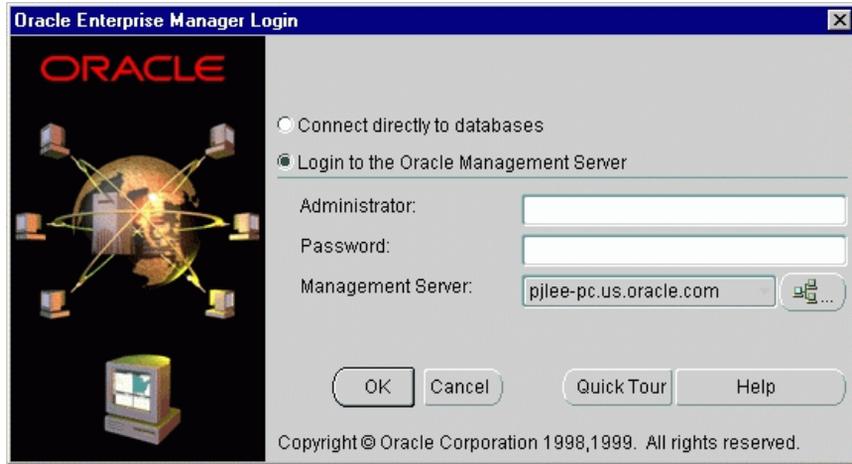
```
oemapp dbastudio
```

- UNIX の場合

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

2. ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「Oracle Management Server ヘロログイン」を選択します。



3. スーパー管理者アカウントの、次の接続情報を指定します。
管理者: sysman、またはスーパー管理者が作成したユーザーを入力します。
パスワード: oem_temp、または (oem_temp を変更した場合は) 新しいパスワードを入力します。
Management Server: Oracle Management Server が稼動しているノード名を入力します。
4. 「OK」 ボタンを押します。DBA Studio が表示されます。ナビゲータ・ツリーには、Oracle Enterprise Manager コンソールで検出されたデータベースが移入されます。

OMS モードの DBA Studio でデータベースへ接続

DBA Studio でデータベースに接続するには、次の 4 通りの方法があります。

- DBA Studio のナビゲータ・ツリーのコンテナの隣にあるプラス記号をクリックします。
- DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのアイコンをダブルクリックします。
- 「ファイル」メニューの「接続」を選択します。
- ツールバーの「接続」アイコンをクリックします。

Oracle Enterprise Manager コンソールで優先接続情報リストが設定されていない場合は、「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。優先接続情報リストが設定されている場合は、このログイン情報を使用してデータベースに接続します。

「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで、データベースに接続するための次の情報を指定します。

ユーザー名

接続するデータベースに対する Oracle ユーザー名を指定します。

たとえば、system と指定します。

パスワード

接続するデータベースに対する Oracle パスワードを指定します。

たとえば、manager と指定します。

サービス

接続するデータベースに対するネットワーク・サービス名を指定します。

たとえば、orcl.pjlee-pc などの Net8 のサービス名を使用します。これによって、pjlee.us.oracle.com マシンの orcl データベースに接続します。

接続モード

プルダウン・リストから、「NORMAL」、「SYSOPER」または「SYSDBA」のどの権限でデータベースに接続するかを選択できます。一般ユーザーとしてデータベースに接続する場合は、NORMAL を選択します。データベースの停止や起動など、特別な処理権限でデータベースに接続する場合は、SYSOPER を選択します。ユーザーに任意の権限を付与するなど、対象データベースに対してすべての権限を持つユーザーとしてデータベースに接続する場合は、SYSDBA を選択します。

SYSOPER 権限と SYSDBA 権限を使用するには、パスワード・ファイルまたは OS グループの認証を作成し、データベースに設定する必要があります。

優先接続情報リストとして保存

優先接続情報リストを保存するオプションも用意されており、これを使用して、ユーザー名、パスワード、ロール (NORMAL、SYSOPER または SYSDBA) などのログイン情報をリポジトリに保存できます。パスワードは、必ず暗号化されて保存されます。

データベースへの接続が確立したときに、そのつどユーザー名とパスワードを入力するのではなく、かわりにこのログイン情報が使用されます。

このチェックボックスはデフォルトで選択されています。

DBA Studio のその他の手順

この項では、次のトピックについて説明します。

- [DBA Studio の Quick Tour へのアクセス](#)
- [データベースに別のユーザーとして接続](#)
- [DBA Studio への接続で使用しているロールの参照](#)
- [スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーからデータベースを削除](#)
- [OMS モードのナビゲータからデータベースを削除](#)

- OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加
- OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更
- スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更

DBA Studio の Quick Tour へのアクセス

DBA Studio の Quick Tour にアクセスするには、まず、データベースまたは任意のノードを選択し、右側のウィンドウで「Quick Tour」ボタンをクリックします。

データベースに別のユーザーとして接続

DBA Studio では、別のユーザーとして再接続するために、データベースから切断する必要はありません。

あるデータベースに接続している場合に、別のユーザーとして再接続する場合には、次のいずれかの処理を行います。

- データベースのアイコンを右クリックし、コンテキスト依存メニューで「接続」を選択します。
- 「ファイル」メニューの「接続」を選択します。
- ツールバーの「接続」アイコンをクリックします。

「データベース接続情報」ダイアログ・ボックスが表示され、別のユーザー名を入力して「OK」をクリックします。

これで、データベースからの切断と再接続が自動的に行われます。

DBA Studio への接続で使用しているロールの参照

データベースへの接続が確立されると、DBA Studio のツリーのデータベース・アイコンの上部に、接続アイコンが表示されます。

データベース名の隣には、SYSDBA ロールで接続した場合と同じように、ユーザー名とロールが表示されます。たとえば、sys AS SYSDBA と示されます。

スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーからデータベースを削除

DBA Studio のナビゲータ・ツリーからデータベースを削除するには、次のステップを実行します。

1. 削除するデータベースを選択します。
2. 「ファイル」メニューの「データベースをツリーから削除」を選択します。

3. 「データベース <name> をツリーから削除します。実行しますか。」というメッセージが表示されます。「はい」をクリックします。

注意： データベースを削除すると、DBA Studio のナビゲータ・ツリーからエントリが削除されます。ただし、`tnsnames.ora` ファイルのエントリまたはデータベースが物理的に削除されるわけではありません。必要な場合は、ナビゲータ・ツリーにデータベースをもう一度追加できます。

注意： ナビゲータ・ツリーからデータベースを削除できるのは、スタンドアロン・モードで DBA Studio に接続している場合のみです。

OMS モードのナビゲータからデータベースを削除

Oracle Management Server に接続されている DBA Studio のナビゲータ・ツリーからデータベースを削除するには、Oracle Enterprise Manager コンソールからデータベースを削除してください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。
2. 削除するデータベースが定義されているノードを選択します。
3. 「ナビゲータ」メニューの「データベースの削除」を選択します。
4. Oracle Enterprise Manager コンソールを終了します。
5. DBA Studio の「表示」メニューの「リフレッシュ」を選択します。対象のデータベースが定義されているノードが、ナビゲータ・ツリーから消去されます。

OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加

Oracle Management Server に接続されている DBA Studio のナビゲータ・ツリーにデータベースを追加する場合は、Oracle Enterprise Manager コンソールから検出ウィザードを使用してください。

注意： Oracle Management Server または Oracle Intelligent Agent は停止しないでください。

1. Oracle Enterprise Manager コンソールを起動します。
2. 「ナビゲータ」メニューの「ノードの検出」を選択し、検出ウィザードを起動します。サービス・ディレクトリの詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。
3. 対象のデータベースが定義されているノードを指定し、そのノードを検出します。DBA Studio がデータベースにアクセスできるようになります。
4. Oracle Enterprise Manager コンソールを終了します。
5. DBA Studio の「表示」メニューの「リフレッシュ」を選択します。対象のデータベースが定義されているノードが、ナビゲータ・ツリーに表示されます。

OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更

DBA Studio が Oracle Management Server に接続されると、DBA Studio のナビゲータ・ツリーに、Enterprise Manager コンソールで検出されたデータベースが移入されます。

次のステップで、これらのデータベースをコピーして、スタンドアロン・モードで使用できるようにする方法について説明します。

ナビゲータ・ツリーに表示されているデータベースは、ローカル・ファイルに保存されている `tnsnames.ora` ファイル、およびそれに関連する優先接続情報リストに追加できます。

1. 「ファイル」メニューから「`tnsnames.ora` ファイルの更新」ダイアログ・ボックスを使用して、ローカルの `tnsnames.ora` ファイルにコピーするサービスを選択します。
2. 優先接続情報リストをローカル・ファイルに保存する場合は、「`tnsnames.ora` ファイルの更新」ダイアログ・ボックスの「優先接続情報リストをローカルに保存」チェックボックスを選択します。

注意： 他のマシンからファイルを使用されないようにするために、パスワードは暗号化されてローカル・ファイルに保存されます。

これらのデータベースをスタンドアロン・モードで使用できるようにするには、次のステップを実行します。

1. データベースに直接接続されている DBA Studio を起動します。
2. 「ファイル」メニューの「データベースをツリーに追加」を選択します。
3. 「データベースをツリーに追加」ダイアログ・ボックスで、追加するネット・サービス名をローカルの `tnsnames.ora` ファイルから選択します。

スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更

スタンドアロン・モードの DBA Studio を使用している場合は、ナビゲータ・ツリーに表示されるデータベースのリストは、ローカル・ファイルから取得されます。

将来、ジョブ、イベントおよびグループの管理において、Web ブラウザからの DBA Studio の実行、バックアップ作業、データ管理作業を行う可能性があります。これらの作業では、DBA Studio を Oracle Management Server に接続して実行します。

現在、DBA Studio を Oracle Management Server に接続して稼動している場合は、ナビゲータ・ツリーに表示されているデータベースは、スタンドアロン・モードで表示されるものとは異なる場合があります。Oracle Management Server に接続している場合は、データベースのリストは、ローカル・ファイルではなくリポジトリから取得されるためです。

スタンドアロン・モードの DBA Studio で有効になっていたデータベースを追加する際に、そのデータベースが、Oracle Management Server に接続されている DBA Studio で有効になっていない場合は、Oracle Enterprise Manager コンソールでサービスを検出する必要があります。サービス検出の詳細は、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』を参照してください。

注意： スタンドアロン・モードの DBA Studio から OMS モードへ切り替える場合は、DBA Studio をクローズして再起動する必要があります。

ディレクトリ構造

この付録では、Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 をインストールしたときに作成されるディレクトリ構造について説明します。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のディレクトリ構造

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 をインストールすると、次のディレクトリが作成されます。

`$ORACLE_HOME¥sysman` のディレクトリ構造

`$ORACLE_HOME¥sysman` のディレクトリ構造は、次のとおりです。

- `$ORACLE_HOME¥sysman¥admin`
- `$ORACLE_HOME¥sysman¥config`
- `$ORACLE_HOME¥sysman¥dbapp`
- `$ORACLE_HOME¥sysman¥log`
- `$ORACLE_HOME¥sysman¥temp`
- `$ORACLE_HOME¥sysman¥ifiles`

`$ORACLE_HOME¥sysman¥admin`

`$ORACLE_HOME¥sysman¥admin` ディレクトリには、Enterprise Manager Configuration Assistant で使用される SQL スクリプトおよびレジストリ・ファイルが含まれています。内容は変更しないでください。

`$ORACLE_HOME¥sysman¥config`

`$ORACLE_HOME¥sysman¥config` ディレクトリには、いくつかの構成ファイルが含まれています。ユーザーが変更できるのは、次のファイルです。

- `omsconfig.properties`

- `clientconfig.properties`
- `dbapps.cfg`

このディレクトリの他のファイルは変更できません。

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のコンポーネントのトレース情報は、`omsconfig.properties` および `clientconfig.properties` ファイルに格納されます。

`dbapps.cfg` ファイルには、SQL*Plus worksheet の設定が格納されます。

`dbapps.cfg` ファイルは、SQL*Plus に追加の環境変数を指定する際に使用されます。また、NLS Language で SQL*Plus Worksheet を実行するには、コマンド・ラインに `sqlplus` を指定するのと同様に、追加の環境変数を `dbapps.cfg` に指定する必要があります。

デフォルトでは、次のように設定されます。

```
SQLPLUS_ENDOFBUFTOKEN=OEM_sqlplus_input_finished
```

\$ORACLE_HOME¥sysman¥log

`$ORACLE_HOME¥sysman¥log` ディレクトリには、ディスクにリダイレクトされたトレースの出力が入っています。このディレクトリには、`oms.log` および `oms.nohup` ファイルが含まれています。`oms.nohup` ファイルには、Management Server の起動前に表示される Management Server のエラー・メッセージが含まれています。`oms.log` ファイルには、Management Server の起動時および実行時に生成されるメッセージが含まれています。

\$ORACLE_HOME¥sysman¥temp

`$ORACLE_HOME¥sysman¥temp` ディレクトリには、管理操作の処理中に作成される可能性のあるテンポラリ・ファイルが入っています。

\$ORACLE_HOME¥sysman¥ifiles

Instance Management の使用中に、`init.ora` パラメータをファイルに保存すると、そのファイルは、デフォルトで `$ORACLE_HOME¥sysman¥ifiles` ディレクトリに保存されます。

その他の重要なディレクトリ

前述のディレクトリの他に、重要なディレクトリとして次のものがあります。

\$ORACLE_HOME¥RelNotes¥EM

Enterprise Manager の Readme は、すべてこのディレクトリにインストールされます。

\$ORACLE_HOME¥Doc¥EM

Enterprise Manager に付随する html 形式のドキュメントは、すべてこのディレクトリにインストールされます。PDF 形式のドキュメントは、このディレクトリにはインストールされません。**注意：** Solaris の場合は、ドキュメントは個別の CD に保存されているため、Enterprise Manager をインストールしても、ドキュメントはインストールされません。

Configuration Assistant の操作

Enterprise Manager Configuration Assistant は、データベース管理者によるリポジトリ作成、削除、アップグレードおよび構成パラメータのメンテナンスを支援します。

リポジトリ作成については、2-1 ページの「[リリース 2.1 のリポジトリの作成](#)」で説明しています。

この付録では、次のことを説明します。

- リリース 2.0 のリポジトリをリリース 2.1 のリポジトリへアップグレードする方法
- リポジトリの削除方法
- 異なるリポジトリを使用するため、またはリポジトリ・ユーザーのパスワード変更に対応するために、ローカル Management Server をリダイレクトする方法

omsconfig.properties ファイルにアクセスできない場合の、リポジトリ作成およびパラメータ構成についての情報も提供しています。

注意： Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリは、Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のリポジトリとは異なります。リリース 2.1 のリポジトリは、リリース 1.x のリポジトリと同じスキーマには定義できません。

Enterprise Manager のリリース 1.x を使用しており、リリース 1.x のリポジトリをリリース 2.1 のリポジトリへ直接移行する場合は、リリース 2.1 のリポジトリを作成した後で、Enterprise Manager Migration Assistant を使用して追加のステップを実行する必要があります。リリース 1.x の 1 つ以上のリポジトリを、リリース 2.1 の共有リポジトリ・スキーマへ移行する場合の詳細は、[第 7 章「リリース 1.x のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへの移行](#)」を参照してください。

リリース 2.0 のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへのアップグレード

注意： リリース 2.0 のリポジトリからリリース 2.1 のリポジトリへアップグレードする場合は、リポジトリをアップグレードする前に、製品をリリース 2.1 にアップグレードする必要があります。

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant は、既存のリポジトリを取得して、それを直接アップグレードします。アップグレードが終了すると、元のリポジトリが新しいリリースになります。

リポジトリのすべてのユーザーは、(バックを含む) Oracle Enterprise Manager 製品をすべて、リリース 2.1 にアップグレードする必要があります。このアップグレードは、Management Server などのソフトウェアが使用されているすべてのマシン上で行います。リポジトリがアップグレードされると、リリース 2.0 のすべての製品は、稼動している場所に関係なく、リポジトリに対する操作を停止します。

リポジトリをアップグレードするには、DBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続してください。

注意： リポジトリをアップグレードする前に、データベースまたはスキーマをバックアップしてください。リポジトリのアップグレード中に失敗すると、そのリポジトリは使用できなくなります。失敗したリポジトリは、アップグレード可能なリポジトリとしてリストに表示されなくなります。

リポジトリをアップグレードするには、次の項のステップに従ってください。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-3 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

注意： リポジトリのアップグレードを実行する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。Management Server が対象のリポジトリを使用している場合は、リポジトリをアップグレードすると、サーバー・エラーが発生します。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」 ページが表示されます。

構成操作のリストから「既存のリポジトリを更新」を選択し、「次」を押して処理を続行します。「リポジトリのデータベースを選択」 ページが表示されます。

ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」

アップグレードするリポジトリが含まれているデータベースにログインします。データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたりポジトリ・スキーマには、このステップに必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、system/manager を使用します。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、2-5 ページの「[ステップ 2 「リポジトリのデータベースを選択」](#)」を参照してください。

ログインに成功すると、「リポジトリを選択」 ページが表示されます。

ステップ 3 「リポジトリを選択」

Enterprise Manager Configuration Assistant で、指定されたデータベースにリリース 2.0 のリポジトリが検出されると、それらのリポジトリが表示されます。該当するリポジトリを選択し、「次」 ボタンを押して操作を継続します。

指定されたデータベースにリリース 2.0 のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」 ボタンをクリックして Enterprise Manager Configuration Assistant を終了するか、「前」 ボタンをクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ 4 「リポジトリへのログイン情報」

「リポジトリ・ログイン情報」 ページに、リポジトリ・ユーザー・パスワードを指定します。

リポジトリの作成時に、Enterprise Manager Configuration Assistant は、指定されたユーザー名とパスワードを使用して、リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー（リポジトリ・スキーマ・ユーザー）を作成しました。

リポジトリをアップグレードするには、リポジトリ・データベースに対して、このユーザーでログインする必要があります。

前のページで選択した結果として、「ユーザー名」フィールドには、リポジトリ・ユーザー名が挿入されます。ただし、パスワードは入力する必要があります。

「次」を押して、操作を継続します。「リポジトリ・サマリーの更新」ページが表示されず。

ステップ5 「リポジトリ・サマリーの更新」

「リポジトリ・サマリーの更新」ページには、リポジトリのアップグレード中に、ウィザードで指定したすべての情報の概要が表示されます。「終了」をクリックしてリポジトリのアップグレードを開始するか、「前」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

ステップ6 「Configuration Assistant の進行」

「終了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。各処理ステップは、1行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンを押せば隠せます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「クローズ」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

終了したら「クローズ」ボタンをクリックします。

既存リポジトリの削除

リポジトリを削除するには、DBA 権限を持つユーザーとして、データベースに接続してください。

リポジトリを削除するには、この後の各項で説明する手順に従ってください。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-3 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

注意： リポジトリを削除する前に、対象のリポジトリを使用しているすべての Management Server および Oracle Enterprise Manager アプリケーションを停止してください。このリポジトリを使用中の Management Server がある場合、リポジトリを削除するとサーバー・エラーが生じます。

ステップ1「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作リストから「既存のリポジトリの削除」を選択し、「次」を押して操作を続けます。「リポジトリのデータベースを選択」ページが表示されます。

Configuration Assistant で `omsconfig.properties` ファイルに書き込めない場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。

ステップ2「リポジトリのデータベースを選択」

削除するリポジトリが含まれているデータベースにログインします。データベースには DBA 権限を持つユーザーとして接続してください。

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって作成されたりポジトリ・スキーマには、このステップに必要な DBA 権限がありません。セキュリティの問題が発生しないようにするため、リポジトリ・スキーマ・ユーザーに必要以上の権限を付与しないでください。データベースには、DBA 権限を持つ別のユーザーとして接続してください。たとえば、`system/manager` を使用します。

リポジトリが含まれているデータベースへのログインの詳細は、2-5 ページの「[ステップ2「リポジトリのデータベースを選択」](#)」を参照してください。ログインに成功すると、「リポジトリを選択」ページが表示されます。

ステップ3「リポジトリを選択」

Enterprise Manager Configuration Assistant で、指定されたデータベースにリリース 2.1 のリポジトリが検出されると、それらのリポジトリが表示されます。該当するリポジトリを選択し、「次」ボタンを押して操作を続けます。

指定されたデータベースにリリース 2.1 のリポジトリが含まれていない場合は、リポジトリのリストは空でグレー表示され、「データベースでリポジトリが見つかりませんでした。」というメッセージが表示されます。「取消」ボタンをクリックして Enterprise Manager

Configuration Assistant を終了するか、「前」ボタンをクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ4 「リポジトリの削除オプションを選択」

「リポジトリの削除オプションを選択」ページから、リポジトリ・ユーザーとそのスキーマ・オブジェクトをすべて削除することも、リポジトリ・オブジェクトのみを削除することもできます。

リポジトリのみを削除する場合は、リポジトリ・ユーザーのパスワードを指定する必要があります。これは、Enterprise Manager Configuration Assistant でリポジトリに接続し、Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 の SQL の削除スクリプトを呼び出せるようにするためです。リポジトリ・オブジェクトのみが削除されます。リポジトリのその他のスキーマ・オブジェクトは残ります。

リポジトリ・ユーザーとそのすべてのスキーマ・オブジェクトを削除する場合、パスワードは不要です。

注意： このステップを継続する前に、そのスキーマに他に重要なオブジェクトがないか確認してください。これを確認しないと、貴重なデータが失われる可能性があります。

Configuration Assistant では、管理対象のリポジトリが omsconfig.properties ファイルで指定されていることが認識されても、そのリポジトリを削除しない場合は、Management Server の構成は変更されません。

管理対象のリポジトリを削除すると、Configuration Assistant では、Management Server の構成が消去されます。

「次」を押して、操作を継続します。「リポジトリ削除のサマリー」ページが表示されます。

ステップ5 「リポジトリ削除のサマリー」

「リポジトリ削除のサマリー」ページには、リポジトリ削除ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックしてリポジトリ削除を開始するか、または「前」をクリックして前のページに戻り、情報を変更します。

ステップ6 「Configuration Assistant の進行」

「終了」ボタンをクリックすると、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウが表示され、実行された処理と、実行中の操作の処理ステップが表示されます。各処理ステップは、1行のテキストで表示されます。

詳細な情報が必要な場合は、「詳細表示」ボタンをクリックしてダイアログ・ボックスを拡張し、テキスト領域を表示します。テキスト領域は、「詳細を非表示」ボタンを押せば隠せます。

結果のいかんにかかわらず、処理が完了すれば、「取消」ボタンは「クローズ」ボタンに変わります。

エラーなくすべてのステップが完了した場合、「処理完了」メッセージが表示されます。

「取消」ボタンをクリックすれば、要求された操作を完了前に取り消せます。

終了したら「クローズ」ボタンをクリックします。

構成パラメータの編集

次の作業を実行する場合、「構成パラメータの編集」を選択します。

- 既存リポジトリを管理するように Management Server を設定
- 別のリポジトリを使用するように Management Server 構成を変更
- Management Server で、起動時にリポジトリへのログインで使用されるパスワードの変更
- 別のデータベースでリポジトリを使用するために Management Server を変更

注意： Enterprise Manager Configuration Assistant によって設定または変更されるのは、それが実行されているマシンの構成パラメータのみです。

Configuration Assistant では、それが稼動しているマシンの構成パラメータ (omsconfig.properties ファイル) のみ設定または変更できます。Configuration Assistant では、別のマシンの構成パラメータを変更できません。対象リポジトリを管理している他のすべての Management Server で、「構成パラメータの編集」オプションを使用して Configuration Assistant を実行し、各マシンの構成パラメータを変更してください。

リポジトリ接続情報 (ユーザー名、パスワード、サービス) を設定または変更して、正しいリポジトリを指定してください。同じリポジトリを管理するすべての Management Server マシンでは、構成パラメータが一致している必要があります。

注意： リポジトリの所有者であるデータベース・ユーザー・アカウントのパスワードを変更する場合は、対象リポジトリを使用しているすべての Management Server で、対応する Management Server の構成パラメータも変更する必要があります。変更しない場合は、Management Server を起動できなくなります。

Management Server 構成パラメータを編集するには、この後の各項で説明する手順に従ってください。

Enterprise Manager Configuration Assistant の起動の詳細は、2-3 ページの「[Enterprise Manager Configuration Assistant の起動](#)」を参照してください。

ステップ 1 「構成操作」

Enterprise Manager Configuration Assistant を起動すると、「構成操作」ページが表示されます。

構成操作のリストから「構成パラメータの編集」を選択し、「次」を押して操作を続けます。「構成パラメータ」ページが表示されます。

ステップ 2 「構成パラメータ」

希望のパラメータを設定または変更します。この情報は、同じマシンで Management Server を次に初期化する際に使用されます。無効な情報があると、Management Server は起動しません。

ユーザー名

リポジトリのユーザー名を入力して、Management Server の構成を別のリポジトリを使用するように変更します。このユーザー名はデータベースのユーザー名で、Oracle Enterprise Manager の管理者名ではありません。

パスワード

リポジトリ・ユーザーのパスワードを入力して、Management Server で起動時にリポジトリへのログインに使用されるパスワードを変更します。

パスワードを変更する場合、「確認」フィールドもそれに合せて変更してください。

サービス

リポジトリが常駐するサービスまたはデータベースを入力し、別のデータベースのリポジトリを使用するように Management Server を変更します。

注意: 次のページに進むには、このページのパラメータを少なくとも1つ変更する必要があります。何も変更せずに「次」ボタンを押すと、「構成パラメータは変更されていません。変更するか、取り消してください」というエラー・メッセージが表示されます。この場合、Enterprise Manager Configuration Assistant では、次のページに移動できません。

ステップ3「構成パラメータを変更」

「構成パラメータを変更」ページには、Management Server パラメータ変更ウィザード操作時に指定した全情報のサマリーが表示されます。「終了」をクリックして変更を開始するか、または「前」をクリックして前のページに戻り、設定を変更します。

構成ファイルにアクセス不能

リポジトリの作成または削除を選択し、omsconfig.properties ファイルにアクセス不能の場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。

omsconfig.properties ファイルに書き込み許可が設定されていないため、アクセスできないことがあります。

omsconfig.properties ファイルを変更せずにリポジトリの操作を継続することも、操作を中止することもできます。

「操作を実行します」を選択した場合、「次」ボタンが使用可能になり、通常の順序でリポジトリの作成または削除の操作を継続できます。ただし、この場合には、omsconfig.properties ファイルは変更されません。

リポジトリの作成を実行中の場合、Configuration Assistant によりリポジトリは作成されますが、omsconfig.properties ファイルは作成されません。ファイルに対する書き込みアクセス権がないと、Management Server を起動できません。

サマリー・ページには、構成ファイルを更新できないことが示され、「Configuration Assistant の進行」ウィンドウには、処理中のステップとして「構成パラメータを設定。」が表示されません。

後で omsconfig.properties ファイルに対する書き込み権限を取得した際に、「構成パラメータの編集」オプションを使用して、Management Server が使用するリポジトリのデータベース・ユーザー名、パスワードおよびサービス情報を入力できます。構成ファイルが更新されると、Management Server を起動できるようになります。

「リポジトリ操作を実行しない」を選択した場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが最後のページになります。「次」ボタンは使用不可になります。変更は実行されません。この場合には、前のページに戻るか、処理を取り消します。

トラブルシューティング

Oracle Enterprise Manager をインストールまたは使用する前に、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』に記載されている互換表を確認してください。

この章では、考えられるトラブルシューティングの問題を説明します。

- [オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告](#)
- [ログインとトレースの設定](#)
- [Management Server のトラブルシューティング](#)
- [ポケットベル・サービスのトラブルシューティング](#)
- [Web ブラウザのトラブルシューティング](#)
- [パスワードの再設定](#)
- [Enterprise Manager Configuration Assistant のトラブルシューティング](#)
- [omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更](#)
- [SGA サイズの決定](#)
- [ジョブ通知のトラブルシューティング](#)

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の報告

Oracle Enterprise Manager をご使用の際に問題が発生した場合は、多くの有効な情報を取得できます。

オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問合せになる前に、まず、マニュアルや『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を調べてみてください。Oracle Enterprise Manager のマニュアルのリストは、「はじめに」の xi ページの「ドキュメント・セット」に出ています。

マニュアル

特に利用価値の高いマニュアルは、次のとおりです。

- 『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート リリース 2.1』には、Oracle Enterprise Manager の最新情報に関する重要な説明とその他の最新ニュースに加えて、製品の実際の動作とドキュメントの説明との違いについて記載されています。
- 『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』では、Oracle Intelligent Agent の管理方法が説明され、トラブルシューティング情報が提供されています。
- 『Oracle Enterprise Manager メッセージ・マニュアル リリース 2.1』には、Oracle Enterprise Manager のエラーについて、考えられる原因と推奨される処置が記載されています。

Metalink

マニュアルとオンライン・ヘルプの他に、オラクル社では Oracle MetaLink を提供しています。これは、Oracle Metal (Gold, Silver, Bronze) カスタマが、24 時間年中無休で利用できる電子的なサポート・サービスです。カスタマは、<http://www.oracle.com/support> からオンラインで登録できます。

MetaLink 2.0 には、次の機能が用意されています。

- My Headlines
プッシュ・テクノロジーを使用して、情報を事前にお届けします。My Headlines には、MetaLink の「My Headlines」セクションにアクセスしたときに、必要な情報のみを取得できるようにするなど、ユーザー・プロファイルの情報をカスタマイズする機能が用意されています。また、この情報を電子メールで受信できるように設定することも可能です。配布される情報は、News & Notes、Knowledge Base、Patches、Bugs、TAR Updates、Product Lifecycle および Forum Updates に分類され、製品とプラットフォームに応じて独自に設定することもできます。
- User Administration
企業に対して、MetaLink ユーザーのアクセスを、サポート ID (CSI) レベルで管理できるようにします。MetaLink のいくつかの領域に対して、サイトの特定のユーザーのみアクセスできるようにする場合は、この機能によって制御できます。たとえば、社内のヘルプ・デスクの担当者のみが、MetaLink に TAR (Technical Assistance Request) を作成できるように許可できます。
- User Profile
連絡先情報の更新、サポート ID の追加と削除、同じサポート ID に登録されている他のユーザーの参照、MetaLink のカスタマイズ、パスワードの変更、各自のライセンス情報の参照を行います。MetaLink インタフェースを表示する言語 (英語、ドイツ語、フランス語) を選択することもできるようになりました。

- Technical Libraries

このライブラリは製品とプラットフォームごとに分類されています。これを使用して、ユーザーは、サポート・アナリストが「インストール作業や Oracle 製品の使用において有効である」と見なした情報にアクセスします。情報には、ドキュメント、ホワイト・ペーパー、問題と解決方法などがあります。

- Forums

技術アナリストに対して質問を送信すると、営業日の 2 日以内に回答を受信できます。すべての Oracle ユーザーは、ここでやりとりする情報やアイデアを共有できます。

- File Access

以前の Download に相当するもので、このセクションでは、パッチおよびパッチ・セットを MetaLink から直接ダウンロードできます。パッチ・セットで修正されたバグを特定するには、『Oracle Enterprise Manager 日本語リリース・ノート』を参照してください。

- Knowledge Base Search

オラクル社カスタマ・サポート・センターの内部リポジトリで、テキストの全文検索を行います。高度な検索もできます。

- Bug Search

問合せを行って、Oracle Bug Database で公開されているヘッダーと概要にアクセスできます。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

マニュアルと MetaLink では問題が解決しない場合には、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡し、次の情報をお知らせください。

1. どのような問題か。
2. 問題が発生したときに何をしていたか。
 - 問題が発生した製品またはコンポーネント。
 - 実行していた操作。問題が再現可能か。問題を調べるために取った処置。
3. ご使用の環境。
 - ご使用のオペレーティング・システムとバージョン。
 - ご使用の Oracle Enterprise Manager のリリースとインストール場所。
 - ご使用の Intelligent Agent のリリースとインストール場所。
 - ご使用のデータベースのリリースとインストール場所。
 - Management Server のインストール場所。

- ご使用のデータ収集サービスのリリースとインストール場所。
 - スキーマ、データ、スクリプトまたはご使用の環境についての関連情報。可能な場合は、問題を再現できるようにログ・ファイルもお送りください。
4. 表示されたエラー・メッセージと番号。
 5. (可能な場合は) トレースを実行し、トレース情報を提供してください。
 6. (ログ・ファイルがある場合は) 調査して、ログ情報を提供してください。

ロギングとトレースの設定

Oracle Enterprise Manager リリース 2.1 のシステムでは、トレースとロギングをサポートしています。情報提供のために、データを画面に記録することをトレースといいます。ロギングは、トレース情報のファイルへのリダイレクションです。

この項では、次の事項について説明します。

- [Management Server のトレースとロギング](#)
- [クライアントのトレース](#)
- [Web ブラウザのトレース](#)
- [ポケットベルのトレース](#)

Management Server のトレースとロギング

Management Server のロギングとトレースは、`$ORACLE_HOME¥sysman¥config` ディレクトリにある `omsconfig.properties` ファイルで指定します。

ロギング・プロパティとトレース・プロパティ

ロギング・プロパティとトレース・プロパティは、次のとおりです。

TRACING.ENABLED = <true>|<false>

トレース機能を有効または無効にします。デフォルトは FALSE です。

LOGGING.ENABLED = <true>|<false>

ロギング機能を有効または無効にします。デフォルトは FALSE です。

LOGGING.DIR = <directory_spec>

デフォルトは、`$ORACLE_HOME¥sysman¥log` となります。

注意: LOGGING.DIR を c:¥temp ディレクトリに設定するには、「¥¥」を使用して、LOGGING.DIR=c:¥¥temp と設定する必要があります。

このように指定しない場合は、c:¥temp の「¥t」がタブ文字と解釈され、Management Server を起動できなくなります。

TRACING.LEVEL = <oem_trace_levels>

トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。

<oem_trace_levels> の有効値は次のとおりです。

- 5-user: 重要またはエラーのレベルのメッセージのみ表示します。
- 3-admin: ユーザー・トレース・レベル・メッセージと警告メッセージを表示します。
- 2-dev: admin トレース・レベルのすべてのメッセージ他に、情報メッセージとデバッグ・メッセージを表示します。

LOGGING.FILENAME = <filename>

filename は、デフォルトでは oms.log.0、oms.log.1、oms.log.2 のようになります。

LOGGING.MAX_SIZE = <integer>

ログ・ファイルの合計最大サイズを制御します。OEM.LOGGING.MAX_SIZE プロパティに指定する値の単位は、MB となります。デフォルト値は 50 で、最大 25MB のログ・ファイルが 2 つになります。パラメータを 0 に設定すると、1 つのログ・ファイルがサイズ制限なしで使用されます。

LOGGING.MAX_FILE_CNT = <integer>

特定の時間に、ログが対象とするファイルの最大数を定義します。すべてのファイル・サイズの合計は、LOGGING.MAXSIZE プロパティで設定した値以下になるようにします。

デフォルトは 2 となります。

注意: LOGGING.MAX_SIZE=0 (ログ・サイズの制限がない) 場合は、LOGGING.MAX_FILE_CNT は意味がなくなるため、無効になります。

LOGGING.SAVE_PREVIOUS_LOG = <true>|<>false>

TRUE は、Management Server で、前回の呼出しのときから、既存のログ・ファイル名を変更することを表します。このようなログ・ファイルは、名前が変更される際に、(yyyyMMddHHmmss の形式の) タイムスタンプが付加されます。

デフォルトは FALSE です。

注意： バックアップおよびデータ管理のロギングとトレースは、omsconfig.properties ファイルにも、次のように指定されています。

```
OEM.TRACING.ENABLED = TRUE
```

```
OEM.TRACING.LEVEL = 2
```

Management Server ログ

Management Server では、トレース・メッセージはすべて Management Server のログ・ファイル (oms.log.0、oms.log.1、oms.log.2 など) に格納されます。まず1つのログ・ファイルに、それがいっぱいになると次のファイルに書き込み、最後の2ファイルがリサイクルされます。

Management Server のログ・ファイルにはサイズ制限があります。デフォルトでは、Management Server の起動時に、25MB のログ・ファイルしか作成できません。最初のログ・ファイル名は oms.log.0 です。そのファイルが 25MB の上限に達すると、別のログ・ファイルが作成されます。別のログ・ファイル名は oms.log.1 です。そのファイルが 25MB 制限に達すると、oms.log.0 ファイルが削除され、新しいログ・ファイル、oms.log.2 が作成されます。最後の2つのログ・ファイルが保存されます。

重要な注意： Management Server が起動すると、oms.log.* という名前のそれまでのログ・ファイルは、すべて自動的に削除されます。

クライアントのトレース

Enterprise Manager に統合されているすべてのクライアント・アプリケーションのクライアント・トレースを有効にするには、\$ORACLE_HOME¥sysman¥config ディレクトリに格納されている clientconfig.properties ファイルに、次のパラメータと値を追加して保存します。

```
OEM.TRACING.ENABLED=TRUE
```

```
OEM.TRACING_LEVEL=2
```

さらに、Windows NT の場合のみ、DOS ウィンドウをオープンして、次の環境変数を設定します。

```
C:¥>SET ORACLE_OEM_CLIENTTRACE=TRUE
```

次に、OEMAPP スクリプトを使用して、クライアント・アプリケーションを起動します。STDOUT でクライアント・アプリケーションのロギング・トレースを実行することはできません。つまり、トレースを行って、その出力をファイルにリダイレクトする場合、アイコンまたはショートカットを使用してアプリケーションを起動することはできません。

Web ブラウザのトレース

ブラウザで Oracle Enterprise Manager の起動時に問題が発生した場合は、トレース情報を収集してから、オラクル社カスタマ・サポート・センターに問題を報告してください。

ブラウザのトレースを設定するには、次の手順を実行してください。

1. ブラウザのセッションを終了します。
2. Java プラグイン・コンソールを起動します。

Windows の「スタート」メニューから、「プログラム」→「Oracle JInitiator Control Panel 1.1.7+」をクリックします。ウィンドウが表示されます。「Show Java Console」チェックボックスをクリックし、「適用」をクリックします。プラグイン・プロパティ・ウィンドウをクローズします。

3. ブラウザを再起動し、Oracle Enterprise Manager を再ロードします。

Java コンソール・ウィンドウが現れ、プラグインによってロードされた Java クラスと、発生する可能性のある例外が表示されます。例外が表示されない場合は、画面いっぱいの情報が 3 回か 4 回表示されるごとに画面を消去（「消去」ボタンをクリック）してください。

4. Java コンソール・ウィンドウに例外が表示された場合は、ファイルにカット・アンド・ペーストして、問題の説明と一緒にファイルをオラクル社カスタマ・サポート・センターにお送りください。

ポケットベルのトレース

ポケットベル・サービスは、Management Server とは別にデバッグやトレースができます。トレースが使用可能な場合、サーバーによって、すべての電話回線処理や、成功または失敗についてのトレース情報が書き込まれます。

paging.cfg ファイルでは、次のパラメータがトレースに影響を与えます。

TRACING.ENABLED

デバッグで使用するための値を設定します。ポケットベル・サービスは、すべての電話回線操作に対するトレース文と、成功または失敗を書き込むことにより、ポケットベル通信で発生した内容をトレースします。

有効値は TRUE または FALSE です。値を TRUE に設定する場合は、TRACEFILENAME と TRACING.LEVEL に値を設定する必要があります。値を FALSE に設定する場合は、TRACEFILENAME と TRACING.LEVEL には値を指定する必要はありません。

TRACING.LEVEL

トレース可能な場合に、収集のためのトレース情報の詳細を指定するための値を設定します。

指定可能な値は次のとおりです。

- 5 - user レベル： 重要なメッセージとエラー・メッセージを収集します。

- 3-admin レベル: 重要なメッセージ、エラー・メッセージ、警告メッセージを収集します。
- 2-dev: すべてのトレース情報を収集します。

TRACEFILENAME

トレース可能な場合に、トレースの出力結果を書き込む場所を設定します。

この値には、PAGING_LOG.TRC を設定することをお勧めします。

デフォルトでは、このファイルは、Intelligent Agent の ORACLE_HOME¥SYSMAN¥LOG ディレクトリに保存されています。

Management Server のトラブルシューティング

この項の項目は、次のとおりです。

- [Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合](#)
- [Management Server が Windows NT の「スタート」メニューから起動できない場合](#)
- [クライアント・アクセス用の Management Server の変更](#)
- [ping 間隔の設定](#)

Management Server がデフォルト以外の Oracle ホームから正しく実行できない場合

UNIX では、ORACLE_HOME 環境変数が、Management Server が稼動している Oracle ホームに設定されていない場合は、Management Server が正しく起動されません。Management Server では、実際の Oracle ホームではなく、デフォルトの Oracle ホームで、クラス・ファイルが検索されます。

csh

環境変数は次のように設定します。

```
setenv ORACLE_HOME '/usr/local/oracle'
```

ksh/sh

環境変数は次のように設定します。

```
ORACLE_HOME = '/usr/local/oracle'  
export ORACLE_HOME
```

UNIX システムの場合、Oracle 環境は、coraenv (CSH の場合) または oraenv (その他のシェルの場合) をコールして設定することもできます。このシェル・スクリプトにより、任意の識別子の Oracle 環境を設定します。この識別子は特定のデータベースでも、Management Server ソフトウェアが格納されている ORACLE_HOME を指すものでもかまいません。

せん。これらのスクリプトは、特定のマシンやサーバー・ベースの設定を含むようにカスタマイズできます。

coraenv および oraenv スクリプトの詳細は、特定のオペレーティング・システムの Oracle 管理ドキュメントを参照してください。

Management Server が Windows NT の「スタート」メニューから起動できない場合

リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を保存するように選択していない場合は、Windows NT の「スタート」メニューから Management Server を起動する際に、(データベース・ユーザーの作成で使用された) リポジトリのユーザー名およびそのユーザーのパスワードを、Management Server の起動時に「サービス」ダイアログ・ボックスに指定する必要があります。

「サービス」ダイアログ・ボックスにリポジトリ接続情報を入力していない

「サービス」ダイアログ・ボックスに、リポジトリのユーザー名とパスワードを入力しない場合は、Windows NT のイベント・ログにメッセージが記録されます。詳細は、[Windows NT のイベント・ログへのアクセス](#)を参照してください。

この場合には、Management Server は起動されません。

「サービス」ダイアログ・ボックスに誤った接続情報を入力した

誤った接続情報を指定した場合も、Management Server は起動されません。

Management Server ログ・ファイルには、エラーが記録されます。Management Server ログ・ファイル (oms.log) は、`$ORACLE_HOME¥sysman¥log` ディレクトリに保存されています。ログの出力をチェックして、問題を特定します。ほとんどの場合、メッセージには「無効なログイン接続情報です。」と示されます。

画面にエラー・メッセージが表示されない場合は、Windows NT のイベント・ログに情報が記録されます。詳細は、[Windows NT のイベント・ログへのアクセス](#)を参照してください。

Management Server を再起動し、Management Server を起動するための正しい接続情報を「サービス」ダイアログ・ボックスにもう一度入力してください。

Windows NT のイベント・ログへのアクセス

Windows NT のイベント・ログにアクセスして、Management Server で記録されたイベントを表示するには、次のようにします。

1. 「スタート」メニュー → 「プログラム」 → 「管理ツール (共通)」で、「イベント ビューア」を選択します。
2. 「ログ」メニューの「アプリケーション」を選択します。

3. ログの画面が表示されます。Oracle<Oracle_Home_Name>ManagementServer サービスで記録されたイベントの中で、赤い停止記号が示されているものをダブルクリックします。これらのものは、エラーがあった場合には、Management Server によって報告されます。

クライアント・アクセス用の Management Server の変更

複数 Management Server 環境で 1 つの Management Server に障害が発生した場合、影響を受けるのはそのサーバーに接続しているクライアントのみです。各 Management Server は、同じリポジトリに接続されている他の Management Server とは無関係です。

Management Server ノードを、まだ Management Server が稼動している別のノードに変更するには、次の手順に従ってください。

1. Oracle Enterprise Manager ログインで、Management Server のプルダウン・リストから、アクセスするリポジトリで構成されている Management Server が定義されているノードを選択します。

プルダウン・リストに、Management Server が稼動しているノード名が表示されない場合は、次の処理を行います。

 - a. 「Management Server」ボタンをクリックします。「Management Server」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - b. 「追加」ボタンをクリックします。「Management Server の追加」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - c. アクセスするリポジトリで構成されている Oracle Management Server が稼動しているノード名を入力し、「OK」をクリックします。
 - d. プルダウン・リストから、Oracle Management Server が稼動しているノードを選択します。
2. Web ブラウザ経由で Oracle Enterprise Manager が稼動しているそれぞれのマシンで、EmWebSite.html のページに戻ってマシン名を変更し、Management Server が稼動しているノードを表すようにします。Oracle Enterprise Manager ログイン画面で、Management Server のマシン名を入力することはできません。

ping 間隔の設定

Management Server のリリース 2.1 では、すべてのターゲットは事前に定義された間隔で ping が実行され、管理対象の状態を監視できるようになっています。

ping を実行する間隔を管理するには、omsconfig.properties ファイルで次のプロパティを使用して、ping の間隔を設定します。

```
oms.vdp.ping_interval=<integer; time in minutes>
```

間隔の設定によって、ノードのアップダウン・テストが含まれているイベントで設定した内容に関係なく、Management Server がノードのアップダウンに対してテストする間隔が定義されることに注意してください。

ポケットベル・サービスのトラブルシューティング

ポケットベルが作動しない

ポケットベル・サービスを構成するための指示に従っても、ポケットベルが作動しない場合は、次の内容を確認してください。

- PAGING.CFG ファイルで、必要なプロパティにすべて値が設定されていますか。詳細は、表 6-1「ポケットベルの構成プロパティ」を参照してください。
- ポケットベル・サービスを構成した後で、Intelligent Agent を再起動しましたか。
- Intelligent Agent の ORACLE_HOME¥Network¥Agent¥Config¥ ディレクトリの NMICONF.LST ファイルに、次の内容が 2 つ以上設定されていませんか。この内容は 1 つしか設定できません。エントリが複数ある場合は、次のエントリ以外のものを残して削除してください。

```
<drive letter>:¥<the Intelligent Agent's
ORACLE_HOME>¥network¥agent¥config¥NMIPAGING.TCL
```

たとえば、Intelligent Agent が F:¥Oracle¥Ora81 にインストールされている場合は、エントリは次のようになります。

```
F:¥Oracle¥Ora81¥network¥agent¥config¥NMIPAGING.TCL
```

リモート Oracle Management Server でのポケットベル・サービスの登録

デフォルトでは、ポケットベル・サービスは、ローカル Management Server でブート・ポート 7771 を使用して登録するように構成されています。

次のような Management Server を使用する場合は、PAGING.CFG ファイルを編集して、リモート Management Server のサービス登録、または別のブート・ポートの Management Server での登録（あるいはその両方）ができるようにします。

- リモート
- デフォルト以外のブート・ポートを使用するように構成済
- リモートで、別のブート・ポートを使用するように構成済

Intelligent Agent の ORACLE_HOME/sysman/config ディレクトリの PAGING.CFG ファイルに、次のプロパティを追加します。

```
OEM.MANAGEMENT_SERVER=<oms-hostname>
OEM.MANAGEMENT_SERVER.BOOTPORT=<integer>
```

<oms-hostname> には、リモート Oracle Management Server のホスト名を、<integer> には、Management Server が使用しているブート・ポートを指定します。

Enterprise Manager コンソールからのポケットベル・サービス情報の変更

Enterprise Manager コンソールから、ポケットベル・サービスのダイヤル情報（国コード、市外局番、電話番号、先頭に付加する番号など）を変更できます。次の指示に従って、これらのプロパティを編集します。

1. コンソールのナビゲータ・ペインに移動します。
2. 「ポケットベル・サービス」フォルダを開きます。
3. 対象のポケットベル・キャリアで、マウスを右クリックします。
4. 「編集」を選択すると、「ポケットベル・キャリアの編集」ダイアログ・ボックスが表示されます。

ポケットベルの通知失敗

ポケットベルの通知が失敗すると、ポケットベル・サービスは、あと 3 回ポケットベルの送信を試行します。再試行を行う時間の間隔は、変更できます。デフォルトでは、1 分の間隔で再試行されます。このデフォルト設定を変更するには、Management Server の `ORACLE_HOME¥sysman¥config` ディレクトリの `OMSCONFIG.PROPERTIES` ファイルを編集します。具体的には、次のプロパティ

```
OEM.PAGING.RETRYINTERVAL=<integer>
```

を `OMSCONFIG.PROPERTIES` ファイルに追加します。<integer> には、再試行の間隔を分単位で指定します。

Web ブラウザのトラブルシューティング

Web ブラウザを起動してコンソールにログインしても、コンソールが稼動しない場合は、JInitiator コンソールに次のメッセージが表示されます。

Web ブラウザを起動してコンソールにログインした後で、コンソールが停止しました。

```
@org.omg.CORBA.INITIALIZE [completed=MAYBE, reason=java.net.BindException:  
Cannot assign requested address]
```

次のステップを実行します。

1. JInitiator で、プロキシのブラウザ設定を使用していることを確認します。
2. ブラウザに指定した Web サーバー・アドレスに、`@.us.oracle.com` などのドメイン名を追加します。
3. ブラウザの設定を編集し、そのドメインを「no proxy settings for」に追加するか、またはブラウザの設定を編集して、「Direct Connection to Internet」を選択します。

パスワードの再設定

自分の SYSMAN パスワードを忘れたために、oem_temp に再設定する場合は、次の指示に従います。

reset_sysman() プロシージャを使用する前に、まず (SQL*Plus を使用して) Management Server リポジトリに接続する必要があります。

1. コマンド・ラインに次のように入力して、SQL*Plus を起動します。

```
sqlplus
```

2. 接続情報を要求されたら、次のように入力します。

```
<emrepository>/<emrepository-pwd>@<em-repository>
```

すると、データベースに接続します。

たとえば、次のようになります。

```
mynode/mypassword@mynode.world
```

これは、デフォルトのリポジトリ名がホスト名であるためです。

3. 次のように入力します。

```
execute smp_maintenance.reset_sysman();
```

Enterprise Manager Configuration Assistant の トラブルシューティング

Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー

この項では、Enterprise Manager Configuration Assistant のエラー・メッセージと、考えられるそれらの原因を説明し、エラー解決の推奨処置を提示します。

omsconfig.properties ファイルに接続できない

omsconfig.properties ファイルが書込み不可の場合、「構成ファイルにアクセス不能」ページが表示されます。詳細は、B-9 ページの「[構成ファイルにアクセス不能](#)」を参照してください。

選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がない

選択したデータベースに DBA ユーザーとしてログインするとき、Configuration Assistant によって、ユーザーに必要な権限があるかどうかチェックされます。必要な DBA 権限がない場合は、「選択したデータベース・ユーザーに、必要な DBA 権限がありません。DBA 権限を持つユーザーとして、データベースにログインしてください。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。正しい接続情報を入力して、処理を続行します。接続情報を入力して、再試行します。

リポジトリ・ログイン用のデータベースの選択に失敗した

無効なユーザー名、パスワードまたはサービスを入力すると、失敗を示すエラー・メッセージが表示されます。たとえば、次のようになります。「接続に失敗しました。ORA-01017: ユーザー名 / パスワードが無効です; ログインは拒否されました。」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、メッセージ・ボックスを消します。データを入力し、再度試みてください。

ユーザーがすでに存在する

ユーザーがすでに存在しており、Enterprise Manager リリース 2 の不完全なリポジトリが含まれています。リポジトリの作成、削除またはアップグレードの操作が進行中であるか、前の操作が失敗した可能性があります。現在の操作を続行すると、不完全なコンポーネントが置き換えられて、不足しているコンポーネントがリポジトリに作成されます。

次のいずれかを選択してください。

- 別のユーザーを選択
- 処理を続行して、選択したリポジトリを使用

リポジトリ操作がすでに実行されている場合は、続行できません。同じリポジトリで複数の操作を同時に実行すると、リポジトリが破損することがあります。

ユーザー“<username>”には、最新の Enterprise Manager V2 リポジトリがすでに含まれている

ユーザー“<username>”には、最新の Enterprise Manager リリース 2 のリポジトリがすでに含まれています。現在のリポジトリを上書きするには、最初に「削除」オプションを使用します。

ユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれている

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名が、データベースの既存のユーザーおよびスキーマの名前で存在し、その中に Oracle Enterprise Manager リリース 1.x のリポジトリが含まれていることが検出された場合は、次のメッセージが表示されます。「そのユーザーはすでに存在し、V1 リポジトリが含まれています。リリース 2 のリポジトリは、リリース 1 のリポジトリと同じスキーマに共存させられません。別のユーザー名を選択してください。」

ユーザーはこのデータベースにすでに存在する

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、選択したリポジトリ名がデータベースの既存のユーザーおよびスキーマの名前で存在し、その中に Oracle Enterprise Manager リリース 2.x およびリリース 1.x のリポジトリが含まれていないことが検出された場合は、次のメッセージが表示されます。「ユーザーはこのデータベースにすでに存在します。このユーザーのスキーマ内にリポジトリを作成しますか。」

「いいえ」を選択すると、異なるユーザー名を選択できます。

「はい」を選択すると、「リポジトリ作成のサマリー」ページが表示されます。詳細は、2-12 ページの「[ステップ 5 「リポジトリ作成のサマリー」](#)」を参照してください。

このマシンの Management Server により、現在サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリが管理されている

リポジトリの作成中、Configuration Assistant で、管理対象リポジトリが omsconfig.properties ファイルですでに指定されていて、そのリポジトリと異なるリポジトリを作成している場合、次のメッセージが表示されます。「このマシンの Management Server により、現在サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリが管理されています。ここで、サービス <service_name> 内のユーザー <user_name> が所有するリポジトリを管理するように変更しますか。」

「はい」を選択すると、構成が更新されます。構成ファイルへの変更を有効にするには、Management Server を停止して再起動してください。「いいえ」を選択すると、構成ファイルは更新されません。選択した内容が、「リポジトリの作成サマリー」ページおよび「Configuration Assistant の進行」ウィンドウのステップに反映されます。

ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域を SYSTEM に選択した

Configuration Assistant では、Oracle Enterprise Manager リポジトリに対するユーザーを作成する際に、デフォルトの表領域と一時的に使用する表領域を指定するように要求されます。いずれかの表領域に SYSTEM を選択すると、Configuration Assistant には「ユーザーのデフォルト表領域または一時表領域を SYSTEM に選択しました。SYSTEM 表領域を、データ・ディクショナリ表と SYSTEM ロールバック・セグメント専用を使用することをお勧めします。よろしいですか。」というメッセージが表示されます。別の表領域を選択してください。

リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant で、リポジトリのデフォルト表領域に十分な空き領域がないことが検出された場合、次のメッセージが表示されます。「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」考えられる解決方法は、C-15 ページの「リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない」を参照してください。

リポジトリ・データベースのデフォルト表領域に十分な空き領域がない

Configuration Assistant は、リポジトリに対して選択されたデフォルトの表領域に、適切な属性および特性があるかどうか確認します。この表領域に十分な空き領域がない場合は、次のメッセージが表示されます。「リポジトリのデフォルト表領域には十分な空き領域がありません。」

リリース 8.1.x では、OEM_REPOSITORY 表領域があれば、それを使用してください。これは、Enterprise Manager のデフォルトの表領域です。

新しいユーザーでリポジトリを作成する場合は、「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」画面では、OEM_REPOSITORY 表領域を作成するように推奨されます。Enterprise Configuration Assistant を使用して OEM_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には、必ず正しい属性および特性が定義されます。

ただし、必要に応じて別の表領域を作成することも、既存の表領域のサイズを拡張することもできます。

注意： DBA Studio の Storage Management を使用して、別の表領域を作成、または既存の表領域のサイズを拡張する場合は、Configuration Assistant を終了する必要はありません。

Oracle Enterprise Manager リポジトリの記憶域要件とディスクの領域割当てを決定する場合は、[付録 D「リポジトリのサイズ設定」](#)を参照してください。

OEM_REPOSITORY 表領域が存在しない場合の作成

OEM_REPOSITORY 表領域が作成されていない場合は、Enterprise Manager Configuration Assistant の「リポジトリ・ユーザー表領域を選択」ページの「新規の OEM_REPOSITORY 表領域の作成（推奨）」オプションが有効になります。

OEM_REPOSITORY 表領域を作成する場合は、このオプションを選択します。Enterprise Manager Configuration Assistant を使用して OEM_REPOSITORY 表領域を作成すると、表領域には適切な属性および特性が定義されます。これを、ユーザーのデフォルト表領域として使用します。

別の表領域の作成

DBA Studio の Storage Management を使用して新しい表領域を作成する場合は、次の項に記載されている処理を実行します。

1. DBA Studio をスタンドアロン・モードで起動します。
 - Windows NT の場合
Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「DBA Management Pack」→「DBA Studio」
を選択して、DBA Studio を起動できます。
 - UNIX の場合
コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```


ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」
を選択し、「OK」をクリックします。
2. DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのアイコンをクリックし、SYSDBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. 「オブジェクト」メニューの「作成」を選択し、「表領域」を選択して「作成」をクリックします。「作成 表領域」プロパティ・シートが表示されます。

4. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「一般」ページに、新しい表領域名を入力し、この表領域を使用して永続的なデータベース・オブジェクトを保持するように指定します。
5. 「データ・ファイル」セクションに、新しいデータ・ファイルのサイズを指定します。「ファイル名」および「ファイル・ディレクトリ」の列には、デフォルトの内容が自動的に設定されます。
6. データ・ファイル名 (<name>.ora) の隣に表示されている「+」記号を右クリックし、「編集」を選択して、データファイル行をダブルクリックするか、「編集」ボタン（鉛筆型のアイコン）を選択します。「作成 データファイル」プロパティ・シートが表示されます。
7. 「作成 データファイル」プロパティ・シートの「記憶領域」ページで、「満杯時に自動的にデータファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択して、データベースでこれ以上の領域が必要になった場合に、サイズが自動的に拡張されるようにします。
8. 「作成 データファイル」プロパティ・シートの「OK」ボタンをクリックします。
9. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「記憶領域」ページで、領域を管理する方法を選択します。ここで指定した方法は、後で変更できます。
10. 「作成 表領域」プロパティ・シートの「作成」ボタンをクリックします。

既存の表領域のサイズを拡張

DBA Studio の Storage Management を使用して、既存の表領域のサイズを拡張するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. DBA Studio をスタンドアロン・モードで起動します。
 - Windows NT の場合
Windows の「スタート」メニュー → 「プログラム」 → 「Oracle-<Oracle_Home_Name>」 → 「DBA Management Pack」 → 「DBA Studio」を選択して、DBA Studio を起動できます。
 - UNIX の場合
コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」を選択し、「OK」をクリックします。
2. DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのアイコンをクリックし、SYSDBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. Storage Management のノードを展開します。

4. 「データファイル」フォルダから、拡張するデータファイルをダブルクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「一般」ページが表示され、データファイルのファイル・サイズを編集できます。
5. 「一般」ページの「適用」ボタンをクリックします。
6. 「記憶領域」タブをクリックします。「データファイル」プロパティ・シートの「記憶領域」ページが表示されます。
7. 「満杯時に自動的にデータファイルを拡張 (AUTOEXTEND)」ボックスを選択し、「適用」ボタンをクリックします。

リポジトリ操作には不十分なデータベース・パラメータ

Oracle Management Server は、クライアントおよび管理対象ノードのかわりに作業を行っている場合には、複数のリポジトリ・データベース・セッションをオープンできません。

通常、1つの Management Server で必要なセッション数は3～5個で、Management Server の負荷によって異なります。次のような状況では、通常以上のリポジトリ・データベースのセッションが必要になります。

- 多数のコンソールがジョブの発行またはイベントの登録を行っている場合
- 複数の Management Server が同じリポジトリを使用している場合
- 多数の Intelligent Agent が Management Server に通知を送信している場合

Enterprise Manager のリポジトリで使用されているデータベースに対して他のアプリケーションもアクセスすると、データベースのセッション負荷が高くなります。これは、データベースを設定する際に考慮しておく必要があります。

Oracle Enterprise Manager に対するプロセスの設定が低すぎる場合は、Oracle_OEM_Home/sysman/log ディレクトリの oms.log ファイルに、次のようなエラー・メッセージが示されます。

```
can't open a session
```

負荷が高くなった場合、またはリポジトリが定義されているデータベースに複数のアプリケーションがアクセスしている場合は、負荷に応じて、データベースの init.ora のプロセス・パラメータの値を増やすことが可能です。

Instance Management を使用して、データベースのパラメータを変更するには、この項で説明する手順に従ってください。

1. DBA Studio をスタンドアロン・モードで起動します。

- Windows NT の場合

Windows の「スタート」メニュー→「プログラム」→
「Oracle-<Oracle_Home_Name>」→「DBA Management Pack」→「DBA Studio」
を選択して、DBA Studio を起動できます。

- UNIX の場合

コマンド・ラインから次のコマンドを使用して、DBA Studio を起動できます。

```
oemapp dbastudio
```

ログイン・ダイアログ・ボックスが表示されます。ここで「データベースに直接接続」を選択し、「OK」をクリックします。

2. DBA Studio のナビゲータ・ツリーでデータベースのアイコンをクリックし、SYSDBA 権限を持つユーザーとしてデータベースに接続します。
3. Storage Management のノードを展開します。
4. 「データベース」プロパティ・シートの「一般」ページで、「すべての初期化パラメータ」ボタンをクリックします。
5. パラメータの値を変更します。
6. 「すべての初期化パラメータ」ページで、「別名で保存」ボタンをクリックします。「初期化パラメータを保存」ダイアログ・ボックスが表示されます。
7. 完全なディレクトリ・パスとファイル名を入力するか、「参照」ボタンを使用してローカルのオペレーティング・システムを検索してファイルを検出し、ファイル名を入力します。
8. 「OK」を押してファイルを保存します。

omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更

リポジトリの作成時に、リポジトリ接続情報を omsconfig.properties ファイルに保存するように選択した場合に、このファイルに関する許可を変更して、ファイルを参照できるユーザーを制限することがあります。

ファイルに関する許可を変更すると、他のユーザーはファイルを参照できなくなります。

注意： omsconfig.properties ファイルに保存されているリポジトリ接続情報では、パスワードはプレーン・テキストではありません。パスワードが存在する場合は、暗号化されてファイルに保存されています。

UNIX の場合

ファイルの許可を変更するには、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
$ chmod 600 omsconfig.properties
```

このコマンドによって、ファイルの所有者のみが読みおよび書きみできるようになります。

Windows NT の場合

ファイルの許可を変更するには、次のステップを実行します。

1. 「スタート」メニュー→「プログラム」で、「Windows NT エクスプローラ」を選択します。
 2. Oracle_Home/sysman/config ディレクトリで、omsconfig.properties ファイルを選択します。
 3. 選択したファイルでマウスを右クリックし、ポップアップ・メニューの「プロパティ」を選択します。
 4. 「プロパティ」ダイアログ・ボックスの「セキュリティ」タブを選択します。**注意：** このステップは、NTFS ファイル・システムにのみ適用されます。
 5. 「セキュリティ」ページの「アクセス権」ボタンを押して、「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを表示します。デフォルトでは、「Everyone」に「フルコントロール (ALL)」が設定されています。「アクセス権の種類」は「フルコントロール」です。
 6. 「削除」ボタンをクリックして、このエントリを削除します。
 7. 「追加」ボタンをクリックして、「ユーザーとグループの追加」ウィンドウを表示します。
 8. 「ユーザーの表示」ボタンをクリックして、すべてのユーザーを表示します。
 9. Management Server を通常に起動し、Enterprise Manager Configuration Assistant を使用するユーザーを選択し、「アクセス権の種類」フィールドで、ドロップダウン・リストから「フルコントロール」を選択します。
 10. 「OK」ボタンをクリックして、「ユーザーとグループの追加」ダイアログ・ボックスを終了します。
 11. 「OK」ボタンをクリックして、「ファイルのアクセス権」ダイアログ・ボックスを終了します。
 12. 「OK」ボタンをクリックして、「プロパティ」ダイアログ・ボックスを終了します。
- 複数のユーザー名にアクセス権限を付与できます。

SGA サイズの決定

SGA のサイズは、主に 2 つの要素によって決定されます。

- インスタンスで使用できる RAM の容量
- インスタンスで予想されるアクティビティの量

インスタンスで使用できる RAM の容量とは、リポジトリのインスタンスで専用に使用されるメモリーです。この中には、リポジトリのホスト・ノード上の、他のインスタンスおよびアプリケーションに必要なメモリーは含まれないようにします。アクティビティの量には、有効な（発行された）ジョブ、有効な（登録されている）イベント、監視対象のホスト、接

続した管理者が、すべて含まれます。アクティビティが増加すると、インスタンス上の要求も増加します。

インスタンスが Management Server リポジトリ専用である場合は、最低限必要なサイズは、次のようになります。

```
db_block_size = 2048           # EM is a strict OLTP application
db_block_buffers = 2048       # **May need increase under heavy load**
sort_area_size = 128000      # **May need increase under heavy load**
sort_area_retained_size = 128000 # **May need increase under heavy load**
log_buffer = 64000           # **May need increase under heavy load**
```

Management Server のリポジトリのトランザクションが短い傾向にあれば、ロールバック領域は問題にはなりません。トランザクション（前述のものに対するアクティビティ）が多いことが予想される場合は、REDO ログ・サイズおよび log_buffer サイズを確認してください。

ジョブ通知のトラブルシューティング

問題

ジョブ通知が配布されずに、コンソールの状態ではスケジュール済のままになります。ジョブは作動するときも、しないときもあります。ジョブを再発行すると、「ジョブはすでに発行されています。」というエラーが表示されます。

解決方法

Agent が、異なる IP アドレスで稼動している 2 つのコンソールに対して、ジョブの状態と出力を配布している可能性があります。

あるノードで使用しているリポジトリと同じ名前のリポジトリを使用して、別のノードで別の Enterprise Manager が稼動していることが考えられます。どちらのマシンが最後に登録されたかによって、一方のノードへ配布されるジョブ通知と、他方のノードへ配布されるジョブ通知があります。ノード上で稼動している Management Server を確認し、いずれかを正しい Management Server として定義する必要があります。

リポジトリのサイズ設定

この付録では、Oracle Enterprise Manager のリポジトリに対して、記憶域要件とディスクの領域割当てを決定する際のガイドラインについて説明します。領域の要件は、使用する Oracle Enterprise Manager ツールで行う処理、および実行する作業で生成されるデータ量によって異なります。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースの違い（リリース 8.1.6 と 8.0.6 など）によっても、リポジトリのデータの量の増加は多少異なります。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成する際に、リポジトリに対するデフォルトの構成を確定すると、OEM_REPOSITORY という新しい表領域が生成されます。OEM_REPOSITORY 表領域には、Oracle Enterprise Manager コンソール、DBA Management Pack、および個別にライセンスを取得できるすべてのバックのリポジトリ・オブジェクトが含まれます。これらのバックでは、インストールしたか、またはライセンスを取得したかどうかに関係なく、個別にライセンスを取得できるものがすべて対象となります。また、リポジトリが作成されるデータベースのリリースによって、リポジトリを最初に 6 ~ 26MB のハード・ディスク領域に割り当てることができます。

実際に Oracle Enterprise Manager 製品をどのように使用するかによって、リポジトリのサイズを拡張できます。リポジトリのデータ量がどのくらい増加するかを決めるには、次の表を参照してください。リポジトリ・サイズの増加に適合できるように、デフォルトの OEM_REPOSITORY 表領域は、自動拡張に設定されています。たとえば、小規模な 1 つのデータベースに対して Capacity Planner を使用して、デフォルトの OEM_REPOSITORY 表領域を 4MB の割当てで作成したとします。しかし、実際には（大規模な 3 つのデータベースなどの）標準的な基準で Capacity Planner を使用すると、リポジトリのサイズは、概算で 16MB に増加します。このような場合には、表領域は、増加量に合わせて自動的に拡張されません。

通常のインストール・セッションから新しいリポジトリを作成し、既存の表領域を使用する場合は、次のステップに従って、リポジトリで使用するディスク領域がどのくらい増加するかを決定します。

1. 「製品」列を参照して、使用している製品を検索します。
2. それぞれの製品で実行する操作を、「状況」列で識別します。

3. それぞれの操作に対して、ハード・ディスクの領域に「割当て」列の容量を追加します。これらの必要量の合計が、リポジトリの予想サイズとなります。

製品	状況	割当て
Oracle Enterprise Manager コンソールと DBA Management Pack	<ul style="list-style-type: none"> ■ コンソールとDBA Management Pack のみを使用する。 ■ ジョブ履歴にはほとんど保存しない。 	4 ~ 9MB
Oracle Diagnostics Pack	<ul style="list-style-type: none"> ■ 4MB 未満のトレース・データを収集する。 ■ 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 	8MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 4 ~ 20MB のトレース・データを収集する。 ■ 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	30MB
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 20 ~ 60MB のトレース・データを収集する。 ■ 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	80MB
Oracle Tuning Pack	次の範囲未満で保存 <ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文: 50 個 ■ 有効なチューニング・セッション: 5 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ: 10 個 	15MB 未満
	次の範囲で保存 <ul style="list-style-type: none"> ■ チューニングされた SQL 文: 50 ~ 150 個 ■ 有効なチューニング・セッション: 5 ~ 15 ■ ジョブ履歴の表領域ジョブ: 10 ~ 30 個 	15 ~ 45MB

製品	状況	割当て
	次の範囲を超えるものを保存 <ul style="list-style-type: none"> チューニングされた SQL 文: 150 個 有効なチューニング・セッション: 15 ジョブ履歴の表領域ジョブ: 30 個 	90MB 以上
Oracle Change Management Pack	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン: 1 個 (2つのバージョンで保存) 保存されている比較: 1 個 変更計画: 1 個 (スキーマを伝播) 	10MB
	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン: 2 個 (2つのバージョンで保存) 保存されている比較: 2 個 変更計画: 5 個 	25MB
	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン: 5 個 (2つのバージョンで保存) 保存されている比較: 5 個 (2つのバージョン) 変更計画: 10 個 	50MB
Oracle Management Pack for Oracle Applications	<ul style="list-style-type: none"> 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 	4MB
	<ul style="list-style-type: none"> 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	10MB

製品	状況	割当て
	<ul style="list-style-type: none"> 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	20MB
Oracle Management Pack for SAP R/3	<ul style="list-style-type: none"> 小規模な 1 つのデータベースで数日 Capacity Planner を使用する。 	4MB
	<ul style="list-style-type: none"> 中規模の 1 つのデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	10MB
	<ul style="list-style-type: none"> 最大 3 つの大規模なデータベースで数か月 Capacity Planner を使用する。 	20MB
Oracle Standard Management Pack ¹	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 1 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 1 個 	10MB
	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 2 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 2 個 	20MB
	<ul style="list-style-type: none"> 約 500 個のオブジェクトを持つスキーマ ベースライン： 5 個 (2 つのバージョンで保存) 保存されている比較： 5 個 (2 つのバージョン) 	40MB

¹ 個別にライセンスを取得できる他のパックは、Oracle8i Enterprise Edition で使用できますが、Oracle Standard Management Pack は、Oracle8i standard edition でのみ使用できます。

たとえば、次のような状況であるとします。

- コンソールと DBA Management Pack を標準で使用します。ただし、通常は大量の出力はジョブ履歴に保存しません (約 7MB)。
- 約 45MB のトレース・データを収集します (約 45MB)。

-
- ごく少量のデータに対して Capacity Planner を使用します (約 4MB)。
 - チューニングされた SQL 文を約 100 個、有効なチューニング・セッションを 11、ジョブ履歴の表領域ジョブを 25 個保存します (約 32MB)。

この場合には、これらの領域割当ての合計は、88MB (7MB + 45MB + 4MB + 32MB) となります。したがって、リポジトリに対して約 88MB の割当てを想定できます。

重要： ここで説明している内容は、Oracle Enterprise Manager の環境のデフォルト構成に基づいたガイドラインにすぎません。実際のリポジトリのサイズ設定要件は、設定されたカスタム構成によって、異なります。コンソールおよび各種のパックで、実際にどのアプリケーションを使用しているか、パラメータをどのように構成したか、などによって、リポジトリで必要とするディスク領域は異なります。たとえば、Oracle Diagnostics Pack のデフォルトのサンプリング間隔は 5 分です。このサンプリング間隔を短くする場合は、より多くのディスク領域を割り当てる必要があります。ジョブ履歴に保存するデータ量によっても、リポジトリに必要な領域の量が異なります。40 ~ 50MB の大量の出力をジョブ履歴に保存する場合は、さらに 40 ~ 50MB のディスク領域が必要になります。

Web サーバーの構成とディレクトリ・マッピング

Enterprise Manager にデフォルトでパッケージされている Oracle Application Server リスナーなしで、Oracle Enterprise Manager Web サイトをインストールする場合は、サポートされている Web サーバーを、次の指示のように構成します。

- Apache 1.3.9 (Solaris)
- Oracle Application Server 4.0.8 (Windows NT および Solaris)
- Internet Information Server (IIS) 4.0 (Windows NT)

Apache 1.3.9 (Solaris)

1. Enterprise Manager Web サイトを、Oracle Application Server リスナーなしでインストールします。
2. Apache 1.3.9 をインストールします。詳細は、Apache 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. Apache home → conf → httpd.conf/ を選択し、httpd.conf を編集します。Web リスナーを停止し、再起動します。
4. ScriptAlias は、サーバー・スクリプトがどのディレクトリに含まれるかを制御します。ScriptAlias は、基本的には Alias と同じものですが、実際のディレクトリ (realname ディレクトリ) のドキュメントが、(クライアントに送信されたドキュメントとしてではなく) アプリケーションとして処理され、要求されたときにサーバーで実行される点が異なります。

ScriptAlias では、後続の "/" は Alias の場合と同じルールで使用されます。

```
ScriptAlias /oem_webstage/cgi-bin  
"/private/oemv2/oem_webstage/cgi-bin"
```

5. 任意の数の別名を追加できます (制限はありません)。次の形式で指定します。

```
Alias fakename realname
```

fakename に後続の "/" が含まれている場合は、サーバーでは "/" も URL に含まれていると見なされます。この例では、"/icons" ではなく "/icons/" が別名となります。

```
Alias /icons/ "/usr/local/apache/icons/"
Alias /oem_webstage "/private/oemv2/oem_webstage/"
```

6. ScriptAlias で定義された CGI ディレクトリが構成されている場合は、そのディレクトリへ "/apache/cgi-bin" ディレクトリを変更します。

```
< ディレクトリ "usr/local/apache/cgi-bin"> から
```

```
< ディレクトリ "/oem_webstage/cgi-bin"> へ
```

```
AllowOverride all
Allow from all
</Directory>
```

AddHandler を使用すると、特定のファイル拡張子をハンドラ（つまりファイルタイプに関連付けられていないアクション）にマップできます。ハンドラは、サーバーに組み込むことも、Action コマンドで追加することもできます。

サーバー・サイド・インクルードまたは CGI を、ScriptAlias で定義されたディレクトリ以外で使用するには、次の行をコメントにしないでください。

```
#
# To use CGI scripts:
AddHandler cgi-script .exe
```

Oracle Application Server 4.0.8 (Windows NT および Solaris)

注意： ここで説明するステップは、Enterprise Manager にデフォルトでパッケージされている Oracle Application Server リスナーには適用できません。Oracle Enterprise Manager から個別にインストールした Oracle Application Server にのみ適用されます。

1. Enterprise Manager Web サイトを、Oracle Application Server リスナーなしでインストールします。
2. Oracle Application Server 4.0.8 をインストールします。詳細は、Oracle Application Server 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. 使用する Web ブラウザを起動し、`http://<webserver>:<admin-port>/` の URL で、Oracle Application Server リリース 4.0 の管理ページを表示します。

たとえば、`http://myserver.mydomain:8888/` と指定します。

4. メイン・セクションの「website40」サイトを展開します。
5. 「HTTP リスナー」セクションで、仮想ディレクトリを実際の（物理的な）ディレクトリに「ディレクトリ」ページで関連付けます。

ファイルシステムのディレクトリ	フラグ	仮想ディレクトリ
<drive>:\oem_webstage¥	NR	/oem_webstage/
<drive>:\oem_webstage¥cgi-bin¥	CR	/oem_webstage/cgi-bin/

6. 仮想ディレクトリを設定した後で、対応する Web サーバー・リスナーを停止し、再起動します。

注意： Oracle Application Server 4.0.8 を使用する場合は、Microsoft Internet Explorer 5.0 または Netscape Navigator 4.51 以上のブラウザが必要です。

Oracle Application Server 4.0.8 で Microsoft Internet Explorer 4 を使用すると、コンソールの起動時に次のエラーが発生します。

exception: Sun.applet.AppletSecurityException: checkpropsaccess.key

Internet Information Server (IIS) 4.0

1. Enterprise Manager Web サイトを、Oracle Application Server リスナーなしでインストールします。
2. Internet Information Server (IIS) 4.0 をインストールします。詳細は、Internet Information Server 固有の構成ドキュメントを参照してください。
3. Windows NT の「スタート」メニューで、「Microsoft Internet Information Server 4.0」→「Internet Service Manager」を選択し、Internet Information Server を構成します。「Microsoft Internet Service Manager」画面が表示されます。
4. 「Default Web Site」を選択して右クリックすると、関連するサブメニューが表示されません。
5. 「Properties」をクリックし、規定の Web サイトのプロパティ・シートを表示します。
6. ノードの IP アドレスが、プロパティ・シートに正しく設定されていることを確認します。「OK」をクリックします。
7. 右クリックして「service properties」を選択し、「directories」タブを選択します。「追加」をクリックします。
8. 仮想ディレクトリの名前（oem_webstage など）を入力します。

9. 次のように設定します。

Alias: /oem_webstage

Path: c:/oem_webstage

Access: Read, Execute

10. 設定を保存した後、「Default Web Site」を展開して、新しい仮想ディレクトリを表示します。

11. 新しい仮想ディレクトリ oem_webstage を選択します。

12. 「Action」 ボタンをクリックし、「New」、「Virtual Directory」を選択して、次の設定で追加の仮想ディレクトリを作成します。

Alias: cgi-bin

Path: c:¥oem_webstage¥cgi-bin

Access: Read, Execute

13. 追加の仮想ディレクトリを“¥oem_webstage¥java-plugin”という別名で、ディレクトリ c:¥oem_webstage¥java-plugin に作成し、次のように設定します。

Alias: java-plugin

Path: c¥oem_webstage¥java-plugin

Access: Read-only

注意： アクセス権を実行できないようにしてください。アクセス権を実行すると、プラグインをダウンロードできなくなります。

14. プラグインが、Web ブラウザを実行しているシステムにインストールされていることを確認します。プラグインは、c:¥oem_webstage¥java-plugin ディレクトリに保存されます。

索引

A

admin ディレクトリ, A-1
Apache 1.3.9 (Solaris), E-1
AREA_CODE, 6-19

C

CARRIER_NAMES, 6-19
clientconfig.properties, A-2
Configuration Assistant
 Management Server で、起動時にリポジトリへのロ
 グインで使われるパスワードの変更, B-7
 既存のリポジトリを管理するように Management
 Server を設定, B-7
 起動, 2-3
 トラブルシューティング, C-13
 別のデータベースのリポジトリを使用するために
 Management Server を変更, B-7
 別のリポジトリを使用するように Management
 Server 構成を変更, B-7
 リポジトリのアップグレード, 2-1, B-2
 リポジトリの削除, B-4
 リポジトリの作成, 2-1
config ディレクトリ, A-1
CONNECTION_DELAY, 6-20
COUNTRY, 6-19

D

DBA Management Pack, 8-1
DBA Studio, 8-1
DBA Studio の手順
 OMS モードからスタンドアロン・モードへの変更,
 8-15

OMS モードの DBA Studio のナビゲータ・ツリー
 にデータベースを追加, 8-14
OMS モードのナビゲータからデータベースを削除,
 8-14
Quick Tour へのアクセス, 8-13
スタンドアロン・モードから OMS モードへの変更,
 8-16
スタンドアロン・モードの DBA Studio のツリーか
 らデータベースを削除, 8-13
接続で使用しているロールの参照, 8-13
データベースに別のユーザーとして接続, 8-13
dbapps.cfg, A-2
dbapp ディレクトリ, A-1

H

host (マシン名), 2-5

I

ifiles ディレクトリ, A-1
init.ora ファイル, 6-30
Intelligent Agent
 UNIX, 5-3
 起動, 5-3
 状態の確認, 5-3
 状態のチェック, 5-3
 停止, 5-3
 Windows NT, 5-1
 起動, 5-2
 状態の確認, 5-2
 状態のチェック, 5-2
 停止, 5-2
 定義, 1-3, 1-6
Internet Information Server (IIS) 4.0, E-1, E-3

L

listener.ora ファイル, 6-29
LOGGING.DIR, C-4
LOGGING.ENABLED, C-4
LOGGING.FILENAME, C-5
LOGGING.MAX_FILE_CNT, C-5
LOGGING.MAX_SIZE, C-5
LOGGING.SAVE_PREVIOUS_LOG, C-5
log ディレクトリ, A-1

M

Management Server

Oracle Enterprise Manager インストールからの自動
起動, 2-3
起動, 3-1
クライアント・アクセス用の変更, C-10
構成パラメータ, 編集, B-7
構成パラメータの設定, 2-1
状態のチェック, 3-3
接続のダイヤルアップ回線, 6-28
追加, 4-1
定義, 1-5
停止, 3-4
トラブルシューティング, C-8
ロギングとトレース, C-4
ログ, C-6
ログイン・ダイアログ・ボックスから選択, 2-3,
6-2
「Management Server」ダイアログ・ボックス, 6-3
MetaLink, C-3
Migration Assistant, 7-2
移行の段階, 7-2
起動, 7-9
重要な注意, 7-2
使用前のリリース 1.x のリポジトリ情報の確認, 7-7
リポジトリ移行の準備, 7-6
リリース 1.x のリポジトリとリリース 2.1 のリポジ
トリとの違い, 7-3

O

OEM_REPOSITORY 表領域, 2-11, C-16
oem_temp パスワード, 1-5
oemapp console コマンド, 6-2
oemclient.properties, A-2

oemctrl start oms コマンド, 3-3
oemctrl status oms コマンド, 3-3
oemctrl stop oms コマンド, 3-5
OEM.MANAGEMENT_SERVER, 6-21
OEM.MANAGEMENT_SERVER.BOOTPORT, 6-22
omsconfig.properties ファイル, 2-3, A-1, C-4
OMS モードの DBA Studio, 8-9
Oracle Application Server 4.0.8, E-1, E-2
Oracle Enterprise Manager
admin ディレクトリ, A-1
config ディレクトリ, A-1
dbapp ディレクトリ, A-1
ifiles ディレクトリ, A-1
Intelligent Agent, 1-3, 1-6
log ディレクトリ, A-1
Management Server, 1-5, 3-1, 3-3, 3-4, 4-1
temp ディレクトリ, A-1
アーキテクチャ, 1-1
コンソール, 1-2, 1-5, 6-1, 6-10
システムおよびハードウェアの要件, 1-3
ディレクトリ構造, A-1
トレースとロギング, C-4
リポジトリ, 1-2, 1-5, 2-1
リポジトリの所有者, 1-5
Oracle Enterprise Manager のアーキテクチャ, 1-1

P

PAGER_TYPE, 6-19
paging.cfg, 6-15, 6-17, C-7
paging.cfg.template, 6-17
PAGINGLOG.TRC ファイル, 6-25
PHONE_NUMBER, 6-20
PROTOCOL, 6-21

S

SID (データベース・システム ID), 2-5
SMTP メール
アドレス, 6-14
ゲートウェイ, 6-14
SMTP メール・ゲートウェイ, 6-13
SUFFIX, 6-21
sysman アカウント, 1-5

T

temp ディレクトリ, A-1
TIMEOUT, 6-20
TRACEFILENAME, 6-23, C-8
TRACING.ENABLED, 6-23, C-4, C-7
TRACING.LEVEL, 6-23, C-5, C-7

W

Web サーバー, サポート, 6-7
Web ブラウザ, サポート, 6-6
Windows NT ユーザー・アカウント
 権限の割当て, 6-11
 作成, 6-10

い

移行の段階, 7-2

お

オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題の
 報告, C-1

か

管理者, スーパー, 6-4
管理対象サービスの優先接続情報リスト, 設定, 6-13
管理ユーザー
 定義, 1-5

き

記憶域要件とディスクの領域割当てを決定するための
 ガイドライン, D-1
起動
 Configuration Assistant, 2-3
 DBA Studio, 8-1
 Intelligent Agent
 UNIX, 5-3
 Windows NT, 5-2
 Management Server, 3-1
 Migration Assistant, 7-9
 Web ブラウザからの Oracle Enterprise Manager,
 6-5
 コンソール, 6-1

Web ブラウザから, 6-5
Windows の「スタート」メニューから, 6-2
 コマンド・ラインから, 6-2

サービス検出, 6-3
ポケットベル・サービス, 6-26

基本用語, 1-4

Intelligent Agent, 1-6
Oracle Management Server, 1-5
管理ユーザー, 1-5
コンソール, 1-5
サービス検出, 1-6
優先接続情報リスト, 1-6
リポジトリ, 1-5
リポジトリの所有者, 1-5

こ

構成

Enterprise Manager を実行する Web ブラウザ, 6-7
OMS モードの DBA Studio

Management Server への接続, 8-9
 起動, 8-10

データベースへの接続, 8-11

Oracle Enterprise Manager の概要, 1-7

Web サーバーとディレクトリ・マッピング, E-1

Apache 1.3.9 (Solaris), E-1

Internet Information Server (IIS) 4.0, E-1, E-3

Oracle Application Server 4.0.8, E-1, E-2

スタンドアロン・モードの DBA Studio, 8-3

起動, 8-3

ツリーへのデータベースの追加, 8-4

データベースへの接続, 8-6

ローカル優先接続情報リストの編集, 8-7

ダイヤルアップ回線用コンソール, 6-28

追加の Management Server, 4-2

電子メール通知, 6-13

ポケットベル・サービス, 6-16

リモート SYSDBA アクセス, 6-30

リリース 2.1 のリポジトリ, 2-1

ローカル Management Server, 2-1

構成パラメータのメンテナンス, 2-1

「構成ファイルにアクセス不能」ページ, B-5, B-9

コンソール

起動, 6-1

Web ブラウザから, 6-5

Windows の「スタート」メニューから, 6-2
 コマンド・ラインから, 6-2

設定, 6-10
定義, 1-2, 1-5

さ

サービス検出, 6-3
定義, 1-6
作成
OEM_REPOSITORY 表領域, 2-11, C-16
omsconfig.properties ファイル, 2-3
新規パスワード・ファイル, 6-30
リポジトリの作成時のデータベース・ユーザー,
2-7
リリース 2.1 のリポジトリ, 2-1

し

システムおよびハードウェアの要件
1つのマシンからの Enterprise Manager のバンドル
全体の実行, 1-4
個別のマシンでの Enterprise Manager コンポーネン
トの実行, 1-3
最適な環境の特性, 1-4
状態のチェック
Intelligent Agent
NT, 5-2
UNIX, 5-3
Management Server, 3-3
ポケットベル・サービス, 6-27

す

数値ポケットベルのポケットベル状態コード, 6-27
スーパー管理者, 6-4
スタンドアロン・モードの DBA Studio, 8-3

せ

セキュリティ・ログイン, 6-3
設定
Management Server の構成パラメータ, 2-1
ORACLE_HOME 環境変数, 3-3, C-8
Windows NT ドメイン・ユーザー, 6-12
Windows NT ユーザー・アカウント, 6-10
管理対象サービスの優先接続情報リスト, 6-13
コンソール, 6-10
電子メール通知, 6-13

トレースとロギング, C-4
ポケットベル・サービス, 6-16
ローカル Management Server の構成パラメータ,
2-1

た

ダイヤルアップ回線, 構成, 6-28

て

停止
Intelligent Agent
UNIX, 5-3
Windows NT, 5-2
Management Server, 3-4
ポケットベル・サービス, 6-27
ディレクトリ構造, A-1
データベース・リスナー・ポート・アドレス, 2-5
電子メール通知, 設定, 6-13

と

トラブルシューティング
Configuration Assistant, C-13
Enterprise Manager に統合されているクライアン
ト・アプリケーションのトレース, C-6
Management Server, C-8
Management Server が Windows NT の「スター
ト」メニューから起動できない場合, C-9
Management Server がデフォルト以外の Oracle
ホームから正しく実行できない場合, C-8
ping 間隔の設定, C-10
クライアント・アクセス用の変更, C-10
Management Server のトレースとロギング, C-4
MetaLink の使用, C-2
omsconfig.properties ファイルに関する許可の変更,
C-19
SGA サイズの決定, C-20
Web ブラウザ, C-12
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの情報
提供, C-3
オラクル社カスタマ・サポート・センターへの問題
の報告, C-1
ジョブ通知, C-21
パスワードの再設定, C-13
ポケットベル・サービス

Enterprise Manager コンソールからのポケット
ベル・サービス情報の変更, C-12

ポケットベルが作動しない, C-11

ポケットベルの通知失敗, C-12

リモート Oracle Management Server でのポケッ
トベル・サービスの登録, C-11

リポジットリ操作には不十分なデータベース・パラ
メータ, C-18

リポジットリ・データベースのデフォルト表領域に十
分な空き領域がない, C-15

トレース, C-4

Management Server, C-4

Web ブラウザ, C-7

クライアント, C-6

の

ノードの検出, 6-3

は

パスワードの再設定, C-13

パスワード・ファイル, 6-30

バッチ ジョブとしてログオン, 拡張ユーザー権限,
6-10

ひ

表領域

OEM_REPOSITORY, 2-8

ROLLBACK, 2-9

SYSTEM, 2-9

TEMPORARY, 2-9

既存のサイズを拡張, C-17

作成, C-16

ふ

ファイル

clientconfig.properties, A-2

dbapps.cfg, A-2

init.ora, 6-30

listener.ora, 6-29

omsconfig.properties, A-1, C-4

oms.log, A-2, C-6

paging.cfg, 6-15, 6-17, C-7

paging.cfg.template, 6-17

PAGINGLOG.TRC, 6-25

パスワード, 6-30

へ

編集

Management Server の構成パラメータ, B-7

ほ

ポケットベル・サービス

状態の問合せ, 6-27

設定, 6-16

停止, 6-27

ポケットベルの構成プロパティ, 6-19

AREA_CODE, 6-19

CARRIER_NAMES, 6-19

CONNECTION_DELAY, 6-20

COUNTRY, 6-19

OEM.MANAGEMENT_SERVER, 6-21

OEM.MANAGEMENT_SERVER.BOOTPORT, 6-22

PAGER_TYPE, 6-19

PHONE_NUMBER, 6-20

PROTOCOL, 6-21

SUFFIX, 6-21

TIMEOUT, 6-20

TRACEFILENAME, 6-23

TRACING.ENABLED, 6-23

TRACING.LEVEL, 6-23

ゆ

優先接続情報リスト

定義, 1-6

優先接続情報リスト, ローカル設定, 8-7

り

リポジットリ

サイズ設定, D-1

Oracle Change Management Pack, D-3

Oracle Diagnostics Pack, D-2

Oracle Enterprise Manager コンソールと DBA
Management Pack, D-2

Oracle Management Pack for Oracle

Applications, D-3

Oracle Management Pack for SAP R/3, D-4

- Oracle Standard Management Pack, D-4
- Oracle Tuning Pack, D-2
- 作成, 2-1
- 定義, 1-2, 1-5
- リポジトリ, 削除, B-4
- リポジトリ接続情報, 保存, 2-7
- リポジトリの移行
 - アクティブ・ジョブおよびイベントの削除と登録解除, 7-14
 - 移行成功の確認, 7-14
 - 重要な注意, 7-2
 - 準備, 7-6
 - 段階, 7-2
 - 取消し, 7-16
 - リリース 1.x とリリース 2.1 との違い, 7-3
 - リリース 1.x のオブジェクト・リファレンス, 7-16
 - リリース 1.x の既存のリポジトリのバックアップ,
7-8
 - リリース 1.x のリポジトリの情報確認, 7-7
- リポジトリの所有者
 - 定義, 1-5
- リモート SYSDBA アクセス, 6-30

ろ

- ロギング, C-4
 - Management Server, C-4